

熊本県文化財調査報告 第79集

# 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚

1986

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第79集

# 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚

1986

熊本県教育委員会



セツ江カキワラ貝塚貝層断面



# 序 文

農業の近代化をめざす県営農業基盤整備事業は、県下の各地で実施されており、施工面積が広範囲におよぶため、その区域内に文化財が含まれることが多くなってきております。その取扱いについては、地元や農政部局と協議をしながら対応を進めているところであります。

ここに報告する七ツ江カキワラ貝塚、竹の下貝塚は、いずれも未登録の遺跡で、昭和58年度小川地区ほ場整備事業の排水路工事によって発見されたものであります。幸い、関係者の協力により、工事による破壊は最少限に止められ、基礎的な調査を行ったうえで保存策が講じられることとなりました。文化財保護の主旨からみて誠に喜ばしいことであると思えます。

調査は、基礎的な資料を得るために短期間に行ったものでありますが、ほぼ所期の成果を取めることができたと考えております。

貝類、人骨、動物遺体、植物遺体など、専門的な分野については、専門調査員の先生方に分担調査をお願いし、調査成果をより深めることができました。ご多忙の中、ご協力いただきましたことに対し、厚くお礼を申し上げます。

これらの調査成果を発刊するにあたり、この成果が学術的研究のみならず、広く県民の皆様に活用され、文化財保護・愛護思想の普及などに役立てられることを願って止みません。

最後に、調査、あるいはその後の保存問題などについて終始ご協力を受けた小川町をはじめ、県農政部耕地第一課、県宇城事務所耕地第一課、小川町教育委員会、および地元の方々に対し、心から感謝の意を表します。

昭和61年3月31日

熊本県教育長 伴 正 善

## 例 言

1. 本書は、県営ほ場整備事業（小川地区）に伴い、昭和58年度に発掘調査を行った七ツ江カキワラ貝塚、竹の下貝塚の発掘調査報告書である。
2. 調査は、熊本県農政部耕地第一課（熊本県宇城事務所）の依頼により、熊本県教育庁文化課が実施した。
3. 本書の執筆は、I～VIを松本健郎が行った。専門的な分野については、菊池泰二（貝類）、渡辺 誠（魚骨・植物遺体）、西中川 駿（動物骨）、松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二（人骨）の諸先生方に調査を依頼し、その調査成果を掲載することができた。
4. 挿図等の作成は、挿図目次に示すとおりである。挿図作成、原稿整理等については瀬丸延子、写真関係については白石巖の協力を受けた。
5. 本書に使用した地形図は、熊本県宇城事務所耕地第一課から原図の提供を受けた。航空写真は、小川町役場から提供を受けた。
6. 本書で使用したレベル数値（L＝）は、すべて海拔高である。
7. 出土品、実測図、写真等の資料は、熊本県文化財収蔵庫で保管している。
8. 本書の編集は、熊本県教育庁文化課が行い、松本が担当した。

# 本文目次

I. 貝塚の発見と調査経緯	1
II. 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚とその周辺	2
III. 調査の組織	5
IV. 七ツ江カキワラ貝塚の調査	
1. 調査の概要	6
2. 貝層	6
3. 埋葬人骨	12
4. 埋葬獣骨	13
5. 出土遺物	15
(1) 縄文土器	15
(2) 土製品	18
(3) 石器	21
(4) 石製品	23
(5) 骨角器・貝製品	23
(6) 縄文土器以外の土器	24
(7) 自然遺物	25
V. 竹の下貝塚の調査	
1. 調査の概要	27
2. 貝層	27
3. 出土遺物	
(1) 土器	28
(2) 骨角器	32
(3) 自然遺物	33
VI. まとめ	34
VII. 専門調査の成果	
1. 熊本県小川町七ツ江カキワラ貝塚出土の縄文時代人骨	39
2. 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚出土の植物遺体・魚骨	71
3. 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚出土の動物骨	77
4. 七ツ江カキワラ貝塚の貝類	87

## 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図（松本・瀬丸作成）	2
第 2 図	遺跡の地形と周辺遺跡（国土地理院 1/25,000「松橋」、松本作成）	3
第 3 図	七ツ江カキワラ貝塚地形図・計画平面図（宇城事務所原図と松本・古森測図を合成、松本製図）	7
第 4 図	七ツ江カキワラ貝塚貝層断面図（古森実測、松本製図）	9・10
第 5 図	貝塚の範囲（宇城事務所原図と松本・古森測図を合成、松本製図）	11
第 6 図	埋葬人骨実測図（長崎大学医学部解剖学第二教室実測、松本製図）	12
第 7 図	埋葬人骨周辺出土土器実測図（松原実測、松本製図）	13
第 8 図	埋葬獣骨実測図（松本・古森・浦田・西林実測、松本製図）	14
第 9 図	須恵器系土器実測図（松原実測、松本製図）	14
第10図	七ツ江カキワラ貝塚出土縄文土器実測図（松本・松原実測、松本製図）	16
第11図	七ツ江カキワラ貝塚出土縄文土器実測図（松本・松原実測、松本製図）	17
第12図	七ツ江カキワラ貝塚出土縄文土器・土製品実測図（松本・松原実測、松本製図）	18
第13図	七ツ江カキワラ貝塚出土縄文土器実測図（松本・松原実測、松本製図）	19
第14図	七ツ江カキワラ貝塚出土石器実測図（松本・松原実測、松本製図）	20
第15図	七ツ江カキワラ貝塚出土石器実測図（松本・松原実測、松本製図）	21
第16図	七ツ江カキワラ貝塚出土石器・石製品実測図（松本・松原実測、松本製図）	22
第17図	七ツ江カキワラ貝塚出土石製品・骨角器・貝製品実測図（松本実測・製図）	23
第18図	七ツ江カキワラ貝塚出土土器実測図（松本・松原実測、松本製図）	24
第19図	竹の下貝塚地形図（宇城事務所原図、松本製図）	26
第20図	竹の下貝塚土層断面図（松本・古森・坂田実測、松本製図）	29・30
第21図	竹の下貝塚出土土器実測図（松本・松原実測、松本製図）	31
第22図	竹の下貝塚出土骨角器実測図（松本実測・製図）	32
第23図	七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚周辺地形復原図（松本作成）	35
VII-図 1	七ツ江カキワラ貝塚の位置	40
VII-図 2A	人骨の残存状態	41
VII-図 2B	人骨の残存状態	42
VII-図 3	大腿骨と上腕骨の骨体の太さ（男性）	56
VII-図 4	大腿骨と上腕骨の骨体の太さ（女性）	56



# 表 目 次

第1表	ブロックサンプル一覧表	25
VII-表1	出土人骨一覧	39
VII-表2	資料数	43
VII-表3	上腕骨計測値(男性、右)	50
VII-表4	橈骨計測値(男性、右)	50
VII-表5	尺骨計測値(男性、右)	51
VII-表6	大腿骨計測値(男性、右)	52
VII-表7	脛骨計測値(男性、右)	52
VII-表8	腓骨計測値(男性、右)	53
VII-表9	推定身長値(男性)	53
VII-表10	上腕骨計測値(女性、右)	54
VII-表11	大腿骨主要計測値(女性、右)	54
VII-表12	脛骨計測値(女性、右)	55
VII-表13	脳頭蓋計測値	58
VII-表14	下顎骨計測値	58
VII-表15	鎖骨計測値	58
VII-表16	上腕骨計測値	58
VII-表17	橈骨計測値	59
VII-表18	尺骨計測値	59
VII-表19	大腿骨計測値	60
VII-表20	脛骨計測値	61
VII-表21	膝蓋骨計測値	61
VII-表22	腓骨計測値	61
VII-表23	歯の計測値	61
VII-表24	推定身長値	62
VII-表25	四肢骨比	62
VII-第1表	ドングリ類の分類	72
VII-第2表	魚骨数量表	73
VII-表1	ウシ、ウマの骨格別出土骨数	78
VII-表2	上腕骨の計測値	78
VII-表3	中手骨の実測値	79
VII-表4	第三指基節骨の実測値	79
VII-表5	大腿骨の実測値	79
VII-表6	中足骨の計測値	80
VII-第1表		

## 図 版 目 次

- 図版 1 南小野・北部田地区航空写真
- 図版 2 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚遠景（南から）
- 図版 3 七ツ江カキワラ貝塚遠景（南東から）：竹の下貝塚・七ツ江カキワラ貝塚遠景（北西から）
- 図版 4 七ツ江カキワラ貝塚貝層断面（東から）：七ツ江カキワラ貝塚貝層断面（西から）
- 図版 5 七ツ江カキワラ貝塚貝層断面
- 図版 6 露出した貝層
- 図版 7 埋葬人骨
- 図版 8 埋葬人骨：埋葬人骨周辺出土土器
- 図版 9 埋葬獣骨
- 図版 10 埋葬獣骨と出土土器
- 図版 11 七ツ江カキワラ貝塚出土土器
- 図版 12 七ツ江カキワラ貝塚出土土器
- 図版 13 七ツ江カキワラ貝塚出土土器
- 図版 14 七ツ江カキワラ貝塚出土土製品・土器・石器
- 図版 15 七ツ江カキワラ貝塚出土石器
- 図版 16 七ツ江カキワラ貝塚出土石器
- 図版 17 七ツ江カキワラ貝塚出土石製品・骨角器・貝製品
- 図版 18 竹の下貝塚出土土器
- V-図版 1 1号人骨（男性）上肢骨：1号人骨（男性）下肢骨
- V-図版 2 1号人骨（男性）頭蓋（後頭骨）：1号人骨（男性）下顎骨：1号人骨（男性）腰椎・変形性脊椎症
- V-図版 3 1号人骨（男性）肘関節・変形性関節症
- V-図版 4 2号人骨（女性）：3号人骨（女性）：3号人骨（女性）頭蓋上面：4号人骨（女性）前頭骨
- V-図版 5 5号人骨（女性）：7号人骨（女性）：8号人骨（女性）
- V-図版 6 6号人骨（男性）上肢骨：6号人骨（男性）下肢骨
- V-写真 1 七ツ江カキワラ貝塚出土の種子類・魚骨
- V-写真 2 竹の下貝塚出土の魚骨
- V-図版 七ツ江カキワラ貝塚出土動物骨

# I 貝塚の発見と調査経緯

昭和58年度県営ほ場整備事業小川地区の工事が、下益城郡小川町北部田一帯で実施された。この地区には、周知の埋蔵文化財は含まれておらず、事前の遺跡台帳との照合、分布調査によっても確認できなかったものである。

昭和58年10月、勝木 安氏（熊本県文化財保護指導員）は、施工地区内の排水路掘削地に貝層が露呈し、土器片等が散布しているのを確認し、その旨を県文化課に通報された。報告を受けた県文化課は、県農政部耕地第一課と連絡のうえ、施工主体者の県宇城事務所耕地第一課と共に現地を調査し、対応策を検討した。

協議の結果、①すでに掘削が完了している排水路の法面に露呈している貝層断面の観察と記録、②排水路等から掘削された貝層の水洗処理、③貝塚の基礎調査と保存策の検討を主眼とする緊急調査を実施することとなった。

調査は、国庫補助事業「ほ場整備地区遺跡発掘調査」の一環として昭和58年10月20日～11月5日、熊本県教育庁文化課が行った。主な作業内容は先に示したとおりであるが、表土を除去し貝層が露出した部分に埋葬人骨、埋葬獣骨が露出していたので、その調査を併せて行った。

この貝塚は、『全国遺跡地図』等には未登録の遺跡であったので、施工主体者（熊本県知事細川護熙）から文化財保護法第57条の6による遺跡発見通知書が文化庁長官に提出された。

貝塚の所在地は、熊本県下益城郡小川町大字北部田で、大半は字七ツ江に属し、一部は字竹の下に属している。調査中の聞き取りで、この一帯を「カキワラ」あるいは「ヒジマ」と呼んでいたということから、遺跡名を七ツ江カキワラ貝塚と命名した。

七ツ江カキワラ貝塚の調査が終了した直後、同貝塚を見学に行かれた熊本市立博物館・富田紘一学芸員から、七ツ江カキワラ貝塚の北方にも貝層が見られる旨の連絡があった。

農政部局と共に再度現地調査を行い、状況を確認した。この貝塚の場合、排水路および周辺の整地工事等はすでに終了していたが、排水路の法面にはかなりの長さにも貝層が見られた。貝層の上面は地表下1 m以上の深さにあり、露呈している貝層は薄く、掘削された貝層の大半はすでに何処かへ運び去られていた。

この貝塚の所在地は、小川町大字北部田字竹の下である。七ツ江カキワラ貝塚と同じく新発見の遺跡であったので、所在地の字名によって竹の下貝塚と命名した。

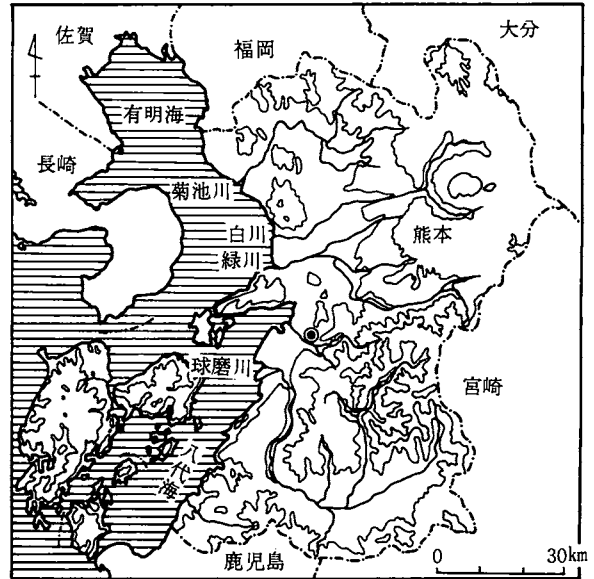
竹の下貝塚の調査は、排水路に露呈している貝層の断面調査を中心に、わずかに残っていた掘削された貝層の水洗処理等を行った。現地での調査は、昭和58年11月12日～11月15日の4日間であった。

両貝塚で水洗した貝層は、袋詰めにして熊本県文化財収蔵庫に持帰り、昭和59年度に選別作業を行った。昭和60年度に資料整理作業と報告書の作成を行った。

## II セツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚とその周辺

セツ江カキワラ貝塚、竹の下貝塚は、ともに熊本県下益城郡小川町大字北部田に所在し、両貝塚は直線にして約160mの至近距離に位置する。

下益城郡小川町は、熊本市街の南方約23km、宇土半島基部の東南部に位置する。北部は同郡松橋町と、東部は同郡豊野村、南部は八代郡竜北町と境界を接し、西方は干拓地を介してわずかに不知火（八代）海に面している。町の西部を国道3号線、国鉄鹿児島本線が南北に並走している。両貝塚は、国鉄小川駅の東方、約2kmの地点である。



第1図 遺跡位置図

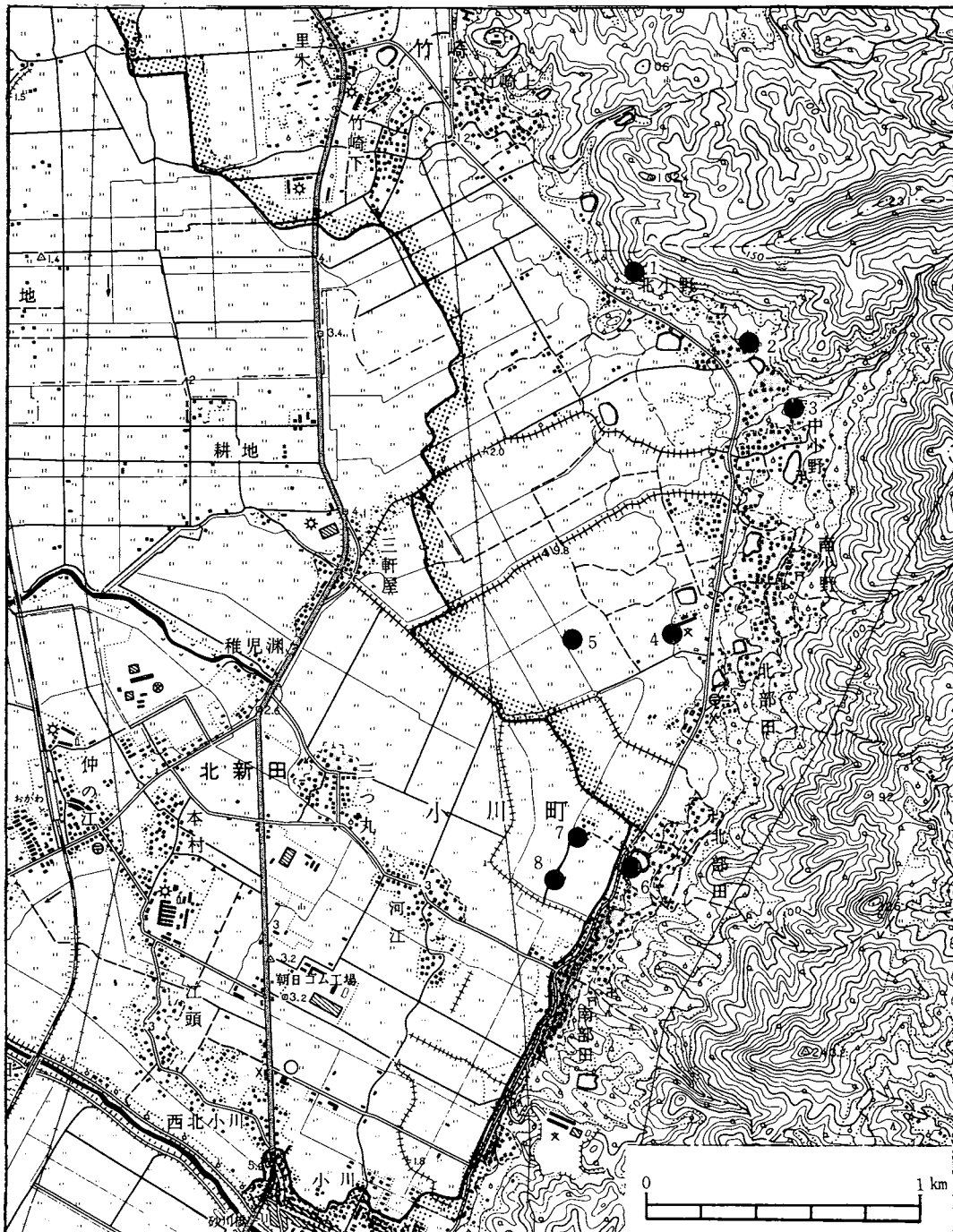
小川町の地形は、東側の山間部と西側の沖積地、および海岸部の干拓地に大別される。両貝塚は、山間部と沖積地の接点に位置し、山塊裾部に発達した小丘陵の先端部に立地している。遺跡の所在する一帯は、ほとんどが水田化されており、かなり平坦な地形となっているが、全体的には東側の山麓から西側の低地へと緩やかに傾斜する斜面である。

両遺跡の北側を北部田川が流れ、南側に南部田川が西流したのち北に折れて北部田川と合流している。両河川は、東側の山塊の谷間から流れ出る小川であるが、沖積地では天井川となっている。両貝塚の周辺は、これらの両河川の堤防と、東側の山塊とに囲まれ、一見盆地状の地形を呈している。

現地周辺の踏査や地形図等を検討すると、この山麓一帯の旧地形は、樹枝状に発達した小丘陵と低地が多く、複雑な微地形を呈していたものと考えられる。両貝塚は、隣接するこれらの小丘陵の先端部に位置するもので、後世の自然堆積や開墾等によって埋没したものと考えられる。

小川町は、埋蔵文化財の比較的少ない地域で、北部の宇土・松橋の遺跡群と、南部の八代郡・市の遺跡群との間の緩衝地帯的な存在とみられていた。周囲の主要な遺跡は第2図に示すとおりである。

図の上端の松橋町竹崎から、山麓線は東へ弯入し、この三角地帯が小野部田地区<sup>註1</sup>である。小野部田地区に限ってみると、弥生時代・古墳時代の遺跡は少数ながら山麓線上に点在していた



- |          |                |          |          |
|----------|----------------|----------|----------|
| 1. 北平古墳  | 2. 年の神1・2号墳、貝塚 | 3. 中小野遺跡 | 網目は5m等高線 |
| 4. 立田遺跡  | 5. 大坪貝塚        | 6. 高倉遺跡  |          |
| 7. 竹の下貝塚 | 8. 七ツ江カキワラ貝塚   |          |          |

第2図 遺跡の地形と周辺遺跡（小野部田地区）

が、縄文時代の良好な遺跡は皆無であった。両貝塚の発見により、その空白の一部が埋められることとなった。さらに、昭和60年、両貝塚の北方約800mの地点に大坪貝塚<sup>註2</sup>が発見され、この地域における低湿地埋没遺跡について注意を促すこととなった。

弥生時代の遺跡は、小野部田小学校一帯の立田遺跡<sup>註3</sup>、竹の下貝塚の東方にある高倉遺跡<sup>註3</sup>がある。ともに後期～終末期の遺跡である。立田遺跡の一部は、昭和60年7月～8月、県営ほ場整備事業に伴って調査が行われ、V字溝や祭祀址などが検出されている。

古墳時代の遺跡は、北小野に北平古墳<sup>註4</sup>、年の神1・2号墳<sup>註5</sup>の3基の横穴式石室墳がある。北平古墳は6世紀後半代、年の神古墳は7世紀後半の古墳である。年の神2号墳の南側の斜面には、7世紀前半の貝塚が調査されている。中小野遺跡<sup>註6</sup>では、古墳時代後期（6世紀）の住居址が発掘されているが、数は少ない。

歴史時代は、北小野の古墳の西側に布目瓦出土地があり、高倉遺跡で歴史時代の須恵器が採集されていたが、いずれも断片的な資料である。昭和60年7月～8月に行った立田遺跡の北部の調査で、石帯（丸柄）や須恵器・土師器が出土しているが、遺構は検出されていない。また、完形の青磁・白磁も出土している。石造物では、七ツ江カキワラ貝塚の東方の集落の中に鎌倉期の五輪塔が1基ある。また、竹の下貝塚の東側の志水氏の宅地内にも五輪塔の部材が数点みられる。

註1. 北から北小野、中小野、南小野、北部田、南部田の集落が連続する。

註2. 昭和60年1月発見。昭和60年8～11月、県営ほ場整備事業に伴って貝塚の一部を県文化課で発掘した。貝塚は縄文時代中期のものであるが、貝塚を利用した弥生時代の埋葬址が上部にあり、30数体の人骨が出土している。

註3. 佐藤伸二「中九州に於ける弥生終末期土器の諸問題」『熊本史学』第35・36合併号 昭和45年

註4. 松本健郎・勢田広行「年の神2号墳」『境古墳群・境遺跡』熊本県文化財調査報告第42集  
昭和55年

註5. 富樫卯三郎・松本雅明「小川町年ノ神古墳—20体近くの人骨の出土」『熊本史学』第15・16合併号  
昭和34年

註6. 江本直「中小野遺跡」『中小野・矢ノ下・目抜・アケサン』熊本県文化財調査報告第39集  
昭和55年

### III 調査の組織

調査の組織は下記のとおりである。

**調査主体** 熊本県教育委員会

**調査総括** 米村嘉人（前文化課長） 森 一則（文化課長） 林田茂一（前文化課長補佐） 佐々木正典（文化課長補佐） 隈 昭志（文化課主幹〔文化財調査係長〕）

**調査総務** 大塚正信（前文化課主幹〔経理係長〕） 柴田和馬（文化課主幹〔経理係長〕） 花田隆二（前文化課参事） 森 貴志（文化課参事） 谷貴美子（文化課主事）

**専門調査員** 菊池泰二（九州大学理学部教授・付属天草臨海実験所長）……………貝類  
内藤芳篤（長崎大学医学部教授） 松下孝幸（長崎大学医学部助教授）  
……………人骨  
渡辺 誠（名古屋大学文学部助教授）……………魚骨・植物遺体  
西中川 駿（鹿児島大学農学部助教授）……………動物骨

**調査員**（七ツ江カキワラ貝塚）

松本健郎・古森政次（文化課技師） 浦田信智（文化課嘱託） 西林和弘  
（文化課臨時調査員）

（竹の下貝塚）

松本健郎 古森政次 坂田和弘（文化課嘱託）

（資料整理・報告書作成）

松本健郎 松原明美（文化課嘱託） 瀬丸延子（文化課臨時職員）

**調査協力** 県農政部耕地第一課・県宇城事務所耕地第一課・小川町役場・小川町教育委員会・小川町文化財保護委員会・小川町郷土史跡愛好会  
勝木 安・富田紘一・菅本宣正・山田精吉・川野繁義

## IV セツ江カキワラ貝塚の調査

### 1. 調査の概要

貝塚発見の報により、現地を踏査した時には、工事の終了に近く、荒工事等はほとんど終了していた。幸い、貝塚の部分は工事が多く残されており、北側を支線第1号排水路で分断され、その南側の貝塚中心部を部分的に表土が除去され、貝層が露出している状況であった。

農政部局との協議により、先にも記したように掘削された排水路法面の調査、排水路等から掘削された貝層の水洗処理、貝塚の範囲確認等を主眼として調査を実施することとした。

調査を進めて行く途中で、表土を除去された貝層や旧畦畔の崖の部分に埋葬人骨、埋葬獣骨が発見されたので、これらについても併せて調査を行った。

作業の大半は、掘削された貝層の処理であったが、原位置（層位）等は区分できない状態であった。現地で水洗して袋詰めにし、収蔵庫に持ち帰って選別作業を行った。

貝種、構成比等を見るため、4ヵ所からブロックサンプリング（30×30×20cm）を行った。

貝塚の中心部は、計画どおりに施工すれば数十cmの削平を受けることとなっていたが、調査結果をもとに農政部局と協議を行い、貝層上面から50cmの高さに盛土することとし、設計変更により保存が図られることとなった。

### 2. 貝層

貝塚発見の端緒となった支線第1号排水路法面に貝層の断面が露呈していた。また、排水路の南側一帯が重機によって部分的に表土が除去され、貝層上面が露出していた。貝層の調査は、水路断面の観察記録と任意の地点に小グリッドを設定し、貝層の範囲を探ることとした。

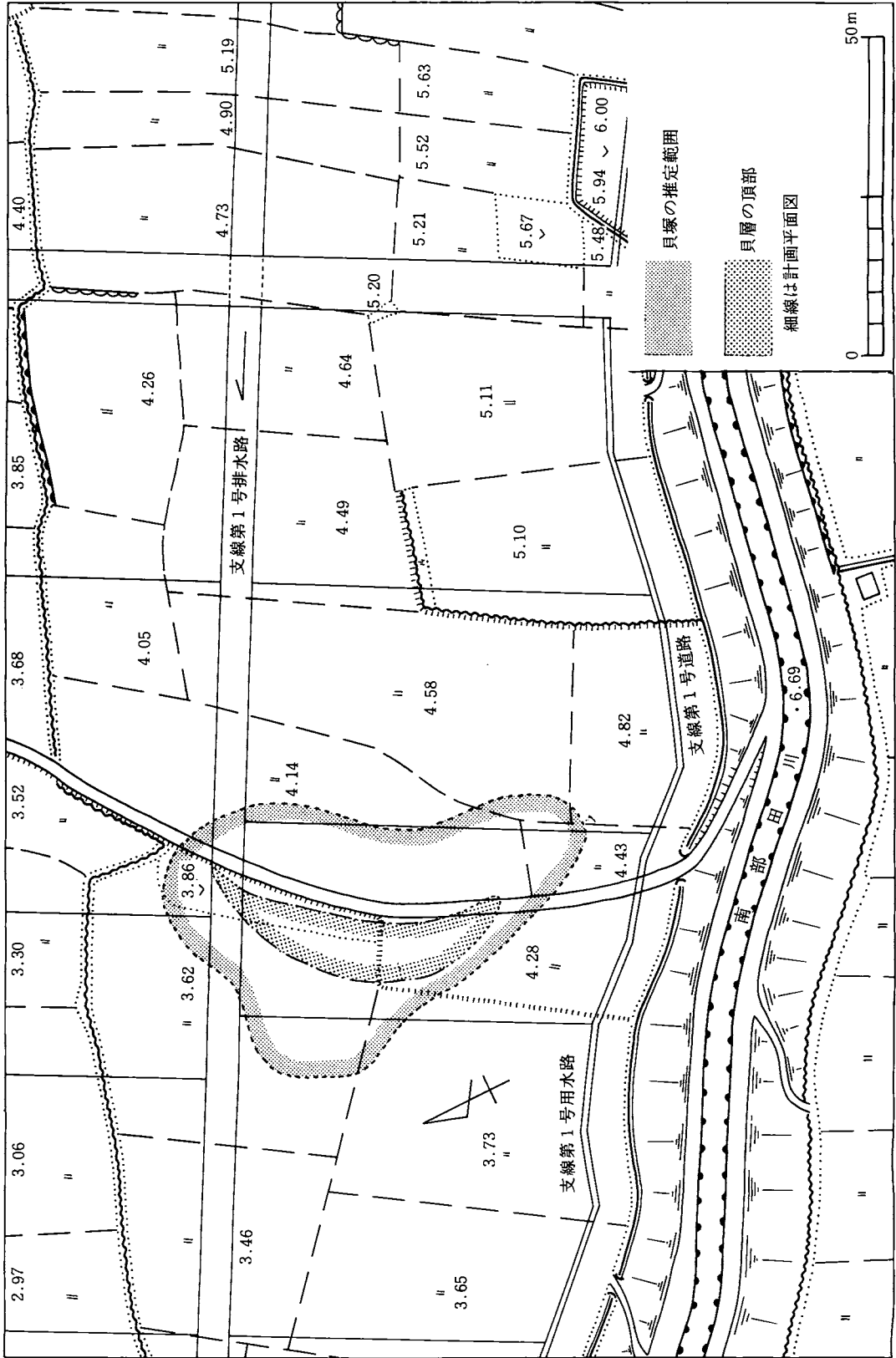
#### 貝層断面（第4図）

調査時、排水路工事はほぼ完了していた。法面には工事による補強土が張り付けてあったが、比較的状态の良かった南面（下流に向かって左側）を約26mにわたって清掃し、原層序を露出させて観察記録を行った。

層序は第4図に示すとおりである。2～30層は、基本的には砂質土・砂層と粘質土とが互層を成しているもので、丘陵斜面上部（東側）からの流水作用によって形成されたものであろう。

純貝層は山形に堆積しており、貝種の相違などによってXA～XPの15層に区分した。この区分は、堆積の単位を示すものと考えられるが、平面での確認はできていない。純貝層の確認基底面での幅は11mであるが、さらに下位へ続いているので、実際の数値はさらに大きくなる。





第3図 セツ江カキワラ貝塚地形図・計画平面図

純貝層の頂部はほぼ平坦であるが、表土層も薄く、後世の削平を受けているものと考えられる。貝層頂部の標高は3.3mを測る。

排水路底面にはすでにU字溝が埋設されており、貝層下部の調査はできなかった。部分的に掘削した所見では、貝層頂部から2.1mの深さ（標高1.2m）までは純貝層が続いており、それ以下は掘削が不可能であった。

純貝層の両端は緩やかな傾斜を示し、その上に混土貝層・混貝土層が重なっている。その傾斜は純貝層よりさらに緩やかで、その幅は確認面で25.2mに達した。ただし、これらの混土貝層・混貝土層は、原堆積を示すものではなく、程度の差はあっても二次堆積であると考えられる。その度合は、上層のものほど著しいと考えられる。

構成貝種や色調等により、貝層の分層は比較的容易に行えたが、それらの時間的な指標となる遺物は断面部分からは出土しなかった。断面で確認した遺物（貝類を除く）は、人骨・歯、炭化物がごく少量みられたにすぎない。

#### 貝塚の範囲（第5図）

支線第1号排水路に露出した貝層断面、その南側に露出した貝層頂部、6ヵ所に設定したグリットの観察、及び原地形等の復原などにより、貝塚（貝層）の範囲を推定した。

排水路の北側及び貝塚の東側のほ場は、すでに整地工事などが完了しており、グリットの掘削等ではできなかった。排水路の北側のほ場では、排水路端から約7mの半径で貝類の散布が確認できた。これを旧地形と照合すると、貝塚の中心部に位置していた畑地の北端とほぼ一致する。その北側には旧水路が東西に走っており、後述するように、この水路が丘陵部と低湿地部の境界であった可能性が強く、旧地形との関係でもほぼ肯首できるものとする。

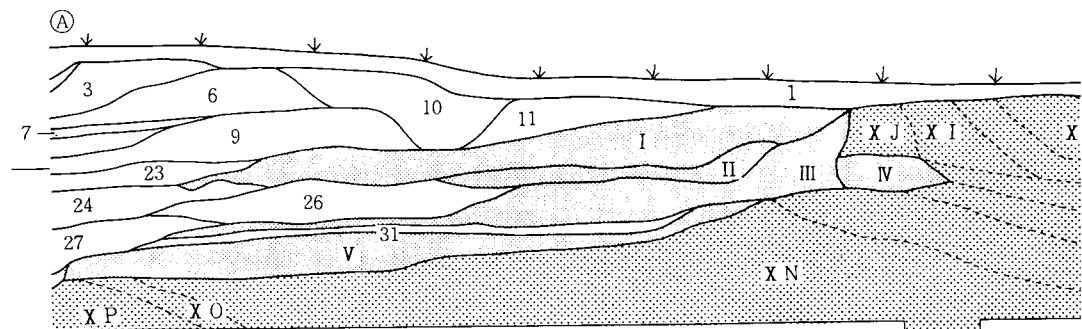
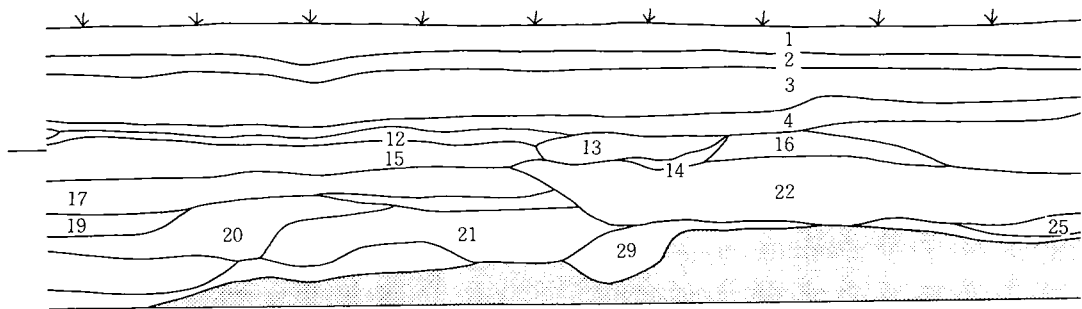
貝塚の東端については、かなり盛土を受けており、確認はできなかった。三日月状になっている貝層頂部や丘陵先端部に位置することなどから、図示したような弯曲した曲線になるものと想定した。

貝塚の中心部は、表土が一部除去され、貝層の頂部が南北方向に露出していた。この貝層頂部は、貝塚のほぼ中心部を南北に走っていた農道に沿って三日月形に広がっている。

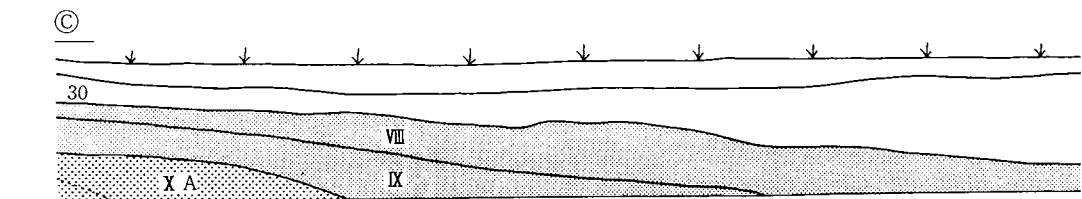
貝塚の西側、南側については、6ヵ所に2m四方のグリットを設け、貝層・土層の状態を確認した（AG～FGと略称、第5図）。AG・BG・DGにおいては、貝層末端部に近いと考えられる混貝土層が確認され、CGにおいては純貝層の頂部が確認された。EG・FGにおいては貝層は検出されず、下部の土層は水分の多い青灰色土であった。

これらを総合して、貝塚の範囲を東西約42m、南北約68mと推定した（第5図）。

周辺地形との関係でみると、第3図で示したように、貝塚の北側を東西に流れる水路を境にして、北側の水田は南側に比べて標高が低く、この水路付近が丘陵と低地の境界であったと考



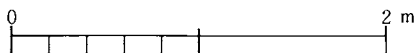
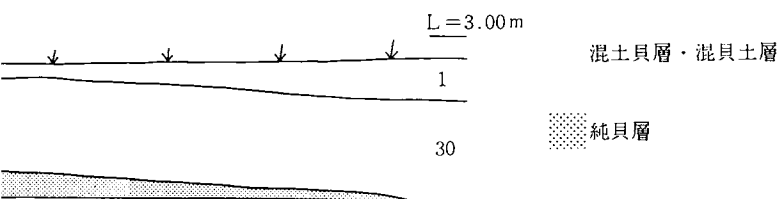
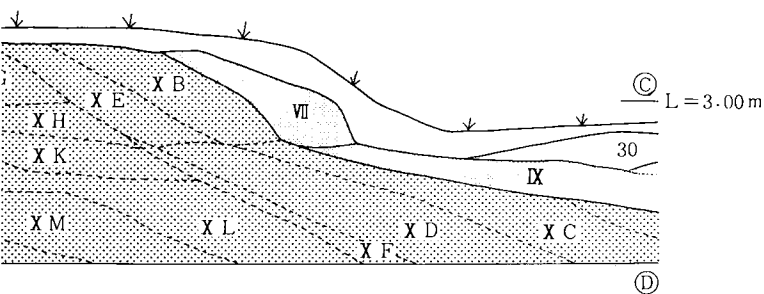
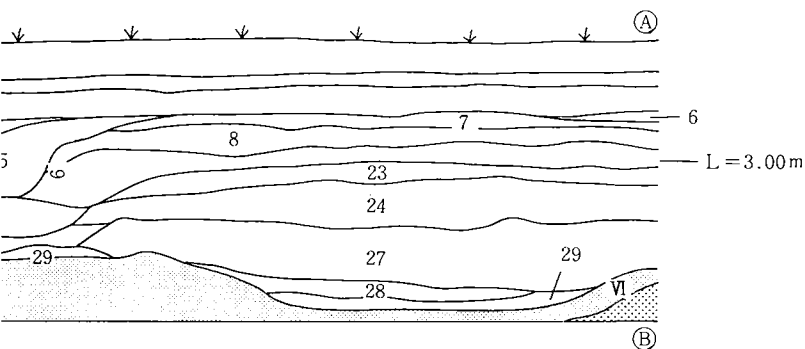
(B)



(D)

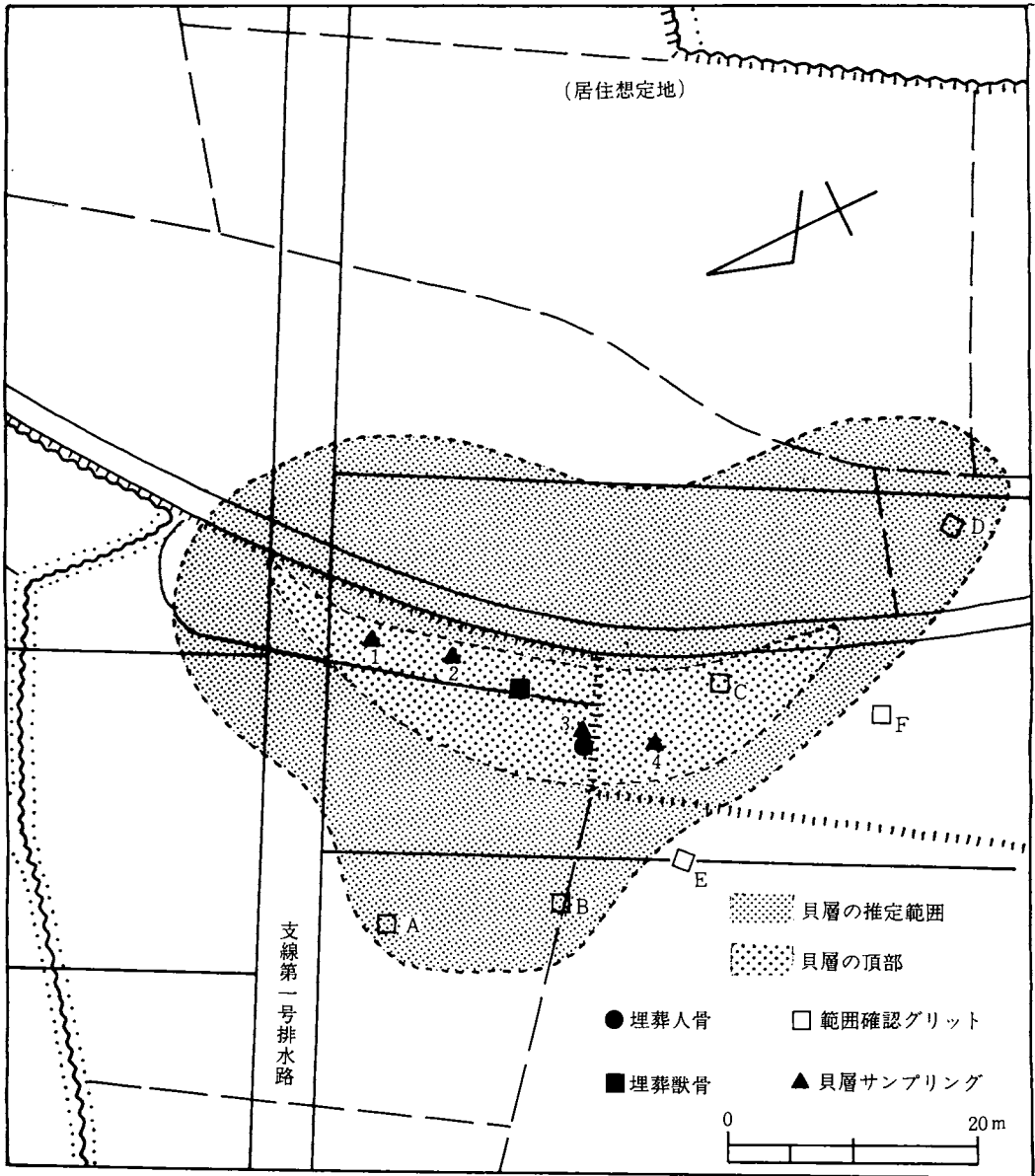
- |                   |                     |                        |                  |
|-------------------|---------------------|------------------------|------------------|
| 1 表土              | 11 褐色砂質土            | 21 青灰色砂質土              | 31 褐色粘土          |
| 2 赤褐色粘土           | 12 明青灰色粘土 (含黑色斑点)   | 22 灰褐色砂質土              | I 混土 (褐色砂質土) 貝   |
| 3 青灰色粘土 (含赤褐色斑点)  | 13 白灰色砂層            | 23 灰褐色土                | II 混貝 (磁障ハイガイ主)  |
| 4 赤褐色砂層           | 14 青灰色粘質土 (含赤褐色斑点)  | 24 褐色土 (含青灰色粘質土ブロック)   | III 混土 (褐色粘質土) 貝 |
| 5 淡青灰色砂質土         | 15 青灰色砂質土 (含赤褐色斑点)  | 25 白灰色砂層               | IV 混土 (灰褐色粘質土)   |
| 6 黄褐色砂質土          | 16 褐色砂質土            | 26 褐色粘質土 (含灰褐色斑点)      | V 稀混土 (灰褐色粘質土)   |
| 7 黄褐色砂質土 (含赤褐色斑点) | 17 淡青灰色砂質土          | 27 褐色粘質土 (含青灰色粘質土)     | VI 混土 (青灰色粘土) 貝  |
| 8 灰褐色砂質土          | 18 青灰色砂質土 (含赤褐色斑点)  | 28 青灰色粘質土              | VII 混土 (灰褐色土) 貝層 |
| 9 灰褐色土            | 19 青灰色砂層            | 29 青灰色粘質土 (含炭化物)       | VIII 混貝 (ハイガイ主体) |
| 10 灰褐色砂質土         | 20 淡青灰色砂質土 (含赤褐色斑点) | 30 灰色砂質土 (含青灰色粘質土ブロック) | IX 混土 (青灰色粘質土)   |

第4図 七ツ江カキワラ貝塚貝層図



- |                  |                       |                         |
|------------------|-----------------------|-------------------------|
|                  | XA 純貝層・カキ             | XK 純貝層・カキ主体             |
| (破砕ハイガイ主体)       | XB 純貝層・ハイガイ (焼けたもの多し) | XL 純貝層・ハイガイ主体           |
| 土層 (褐色粘質土)       | XC 純貝層・ハイガイ           | XM 純貝層・ハイガイ主体           |
| (破砕ハイガイ主体)       | XD 純貝層・ハイガイ           | XN 純貝層(青灰色粘土付着)・カキ・ハイガイ |
| (ハイガイ主体)         | XE 純貝層・ハイガイ主体         | XO 純貝層(青灰色粘土付着)・ハイガイ主体  |
| 層 (ハイガイ主体)       | XF 純貝層・ハイガイ           | XP 純貝層(青灰色粘土付着)・カキ主体    |
| (破砕ハイガイ主体)       | XG 純貝層・ハイガイ           |                         |
| イガイ主体・含破砕貝)      | XH 純貝層・ハイガイ           |                         |
| (砕貝) 土層 (青灰色砂質土) | XI 純貝層・カキ主体           |                         |
| (破砕ハイガイ主体)       | XJ 純貝層・ハイガイ           |                         |

面図

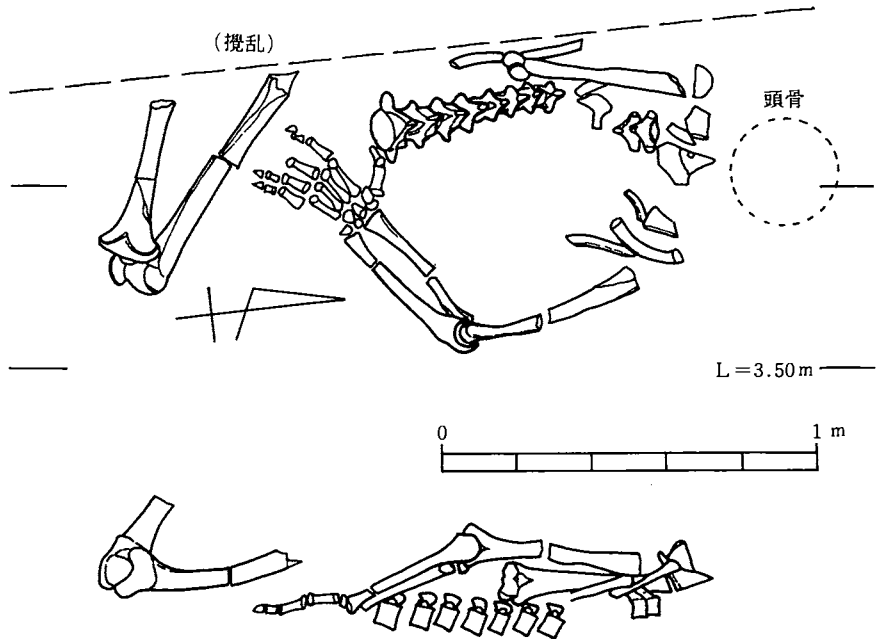


第5図 貝塚の範囲

えられる。また、東側の山麓から貝塚にかけては、傾斜度がやや大きいですが、貝塚の西の方では平坦化している。貝塚の中央部を貫く農道付近が丘陵の先端部であったろうと想定される。丘陵の南端は、現在は天井川となっている南部田川付近と想定される。

したがって、七ツ江カキワラ貝塚は、東から西に延びた微丘陵の先端部に立地する貝塚であったとみられる。そうすれば居住地（住居址）は、貝塚の東方、丘陵の中央部に位置していたものであろう。

### 3. 埋葬人骨 (第5~7図)



第6図 埋葬人骨実測図

新たに掘削された排水路の南側約22mの地点から、埋葬人骨が1体出土した(第5図)。この地点は、南北に連なる貝層の頂部にあたり、重機による表土掘削により貝層が露出し、下肢骨の一部が露呈していたものである。

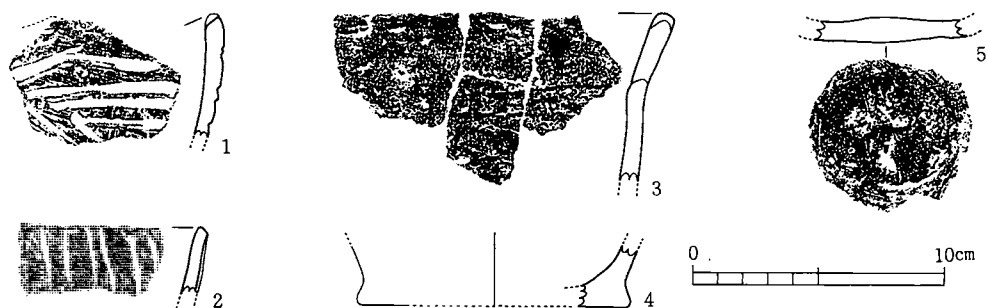
人骨はハイガイを中心とする混土貝層に埋葬されていたが、人骨を覆うものも同種の混土貝層で、土壌などは確認できなかった。

人骨はほぼ磁北に頭位を置き、埋葬位は伏臥屈葬であった。頭骨はほとんど破碎し、欠失している部分も多くあった。人骨の西側、身体の左側部分には南北方向の攪乱があり、この部分の骨格は失われているものが多い(第6図)。

この人骨は、壮年男性のものと推定され、推定身長156.25cm (Pearson式)、153.74cm (藤井式)、変形性関節症・変形性脊椎症に罹患していたことが指摘されている。

埋葬人骨の周囲から、数点の縄文土器(第7図)が出土した。この土器は、ほぼ人骨の埋葬時期を示すものと考えてよい。セツ江カキワラ貝塚から出土した縄文土器の年代については後節でやや詳しくふれるが、人骨周辺出土の土器もそれらと同種のもので、縄文時代後期前半に比定されるものである。第7図3の土器は、人骨の真横で出土したもので、埋葬人骨と供伴と考えてよい資料である。

その他、各地点から数体分の部分骨が採集され、多数の埋葬人骨が存在することが想定さ



第7図 埋葬人骨周辺出土土器実測図

れる。

これら人骨の調査は、長崎大学医学部解剖学第二教室に依頼した。その詳細な調査結果は後節に示しているので参照されたい。

#### 4. 埋葬獣骨（第8・9図）

新たに掘削された排水路の南側約16mの地点から、埋葬した状態で複数体の獣骨が出土した。出土地点は、旧畦畔の部分にあたり、約50cmの段差があり、法下には幅30cm前後、深さ20cm弱の小さな水路があった。

獣骨は、この水路の法面に一部が露出しており、先端部には苔が生えていた。上部を覆っている砂質土を除去すると多数の獣骨が現われた。

獣骨を埋葬した土壌は、人骨の場合と同じく混土貝層に掘り込まれ、再び貝層で埋戻されていた。したがって、土壌の確認は不可能であったが、幅1m前後、長さ2m弱の楕円形の土壌であった可能性が高い。土壌及び獣骨の北西側は段落ちによってなくなっており、全体の約四分の三程が遺存していた。

獣骨は4～5重に重なって出土したが、大まかにみれば脊椎や肋骨などの胴体骨は下位にあり、四肢骨は上位にあった。脊椎や四肢骨には、関節が連結した状態で出土したものもあるが、胴体と四肢は連なった状態で埋葬されたものではなく、分断された後で埋葬されたものとみられた。また、頭骨あるいは歯などはみられなかった。

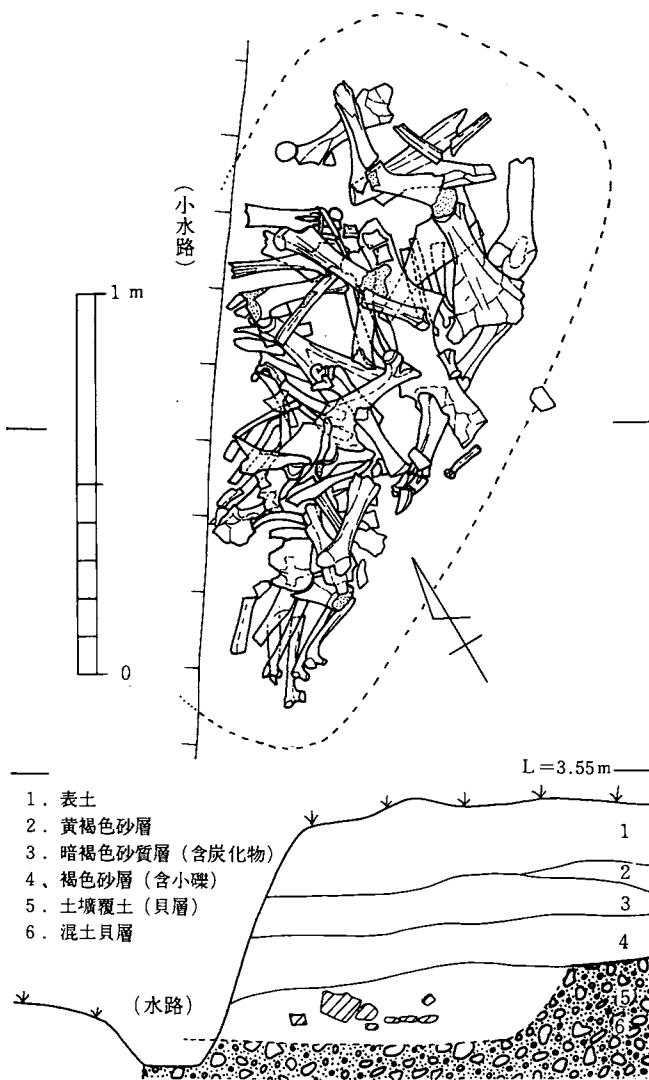
獣骨の埋葬年代を積極的に判断する伴出土器などはないが、段落ちの畦畔と直交する断面観察によって、ある程度の推定を行うことはできる（第8図）。

断面図をみると、表土層（耕作土）の下には3層にわたる土層がみられ、これが純貝層及び土壌覆土を覆っている。2・4層は砂層で、洪水などによる自然堆積層である。遺物などは含まれておらず、急激に堆積したものと考えられる。3層もやや砂質ではあるが、わずかに炭化物を含み、ある時期の生活面であったと考えられる。この3層から2点の土器が出土した。1

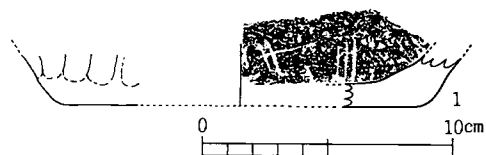
点は須恵器系土器の播鉢の底部破片（第9図）である。復原底部径は約14.4cmを測り、胎土には微砂粒を含んでいる。焼成は良く、硬質であるが、破損した断面には多くの縞文様がみられ、瓦質を呈する。内面には間隔をおいて数条単位の条痕があるが器面荒れのため不明瞭である。他の1点は土師器の杯の細片である。器面が荒れているため不明瞭であるが、底部は糸切り離しとみられる。

3層の堆積時期は、この2点の土器の特徴から室町時代と考えられる。その下層の4層及び土壌の掘削時期を示すものはないが、古代-中世の可能性が強いと考えている。

出土した獣骨は、鹿児島大学農学部解剖学教室に依頼して同定を行った。その結果、ウシ4体分とウマ1体分とされている。詳細な結果については後節を参照されたい。



第8図 埋葬獣骨実測図



第9図 須恵器系土器実測図



## 5. 出土遺物

出土遺物の大半は、掘削された貝層の水洗処理や、工事によって移動して散乱していたものを採集したもので、原位置・層位を判定できるものはきわめて少ない。埋葬人骨及び埋葬獣骨の調査に伴って出土した遺物については、すでに前節に記載しているので、ここでは水洗処理、採集によって得られた遺物を一括して記述する。

### (1) 縄文土器（第10～13図）

出土状況は前述のとおり、原位置・層位を確定できるものはない。また、すべて破片資料で全体の器形を復原できない小破片が多い。したがって、ここでは主に部位（口縁部・胴部・底部・脚部）と施文とによって大略の分類を示すに止める。

1・2は内側に屈曲、あるいは内弯した口縁部で、浅鉢の破片と考えられる。器面調整は、内外面とも丁寧な横ナテ調整で、2点とも黒褐色を呈している。

3～5は直線的な口縁部で、頸部での屈曲がない器形と推定される。4には小さな山形突起が付き、5は波状口縁の頂部に粘土紐を貼付けている。

6～11は口縁帯がなく、無文のものであるが、7・8・10・11にみられるように、頸部で屈曲してやや球形の胴部になるものである。9・11の口縁端部には刻み目を、10には刺突文を連続させている。

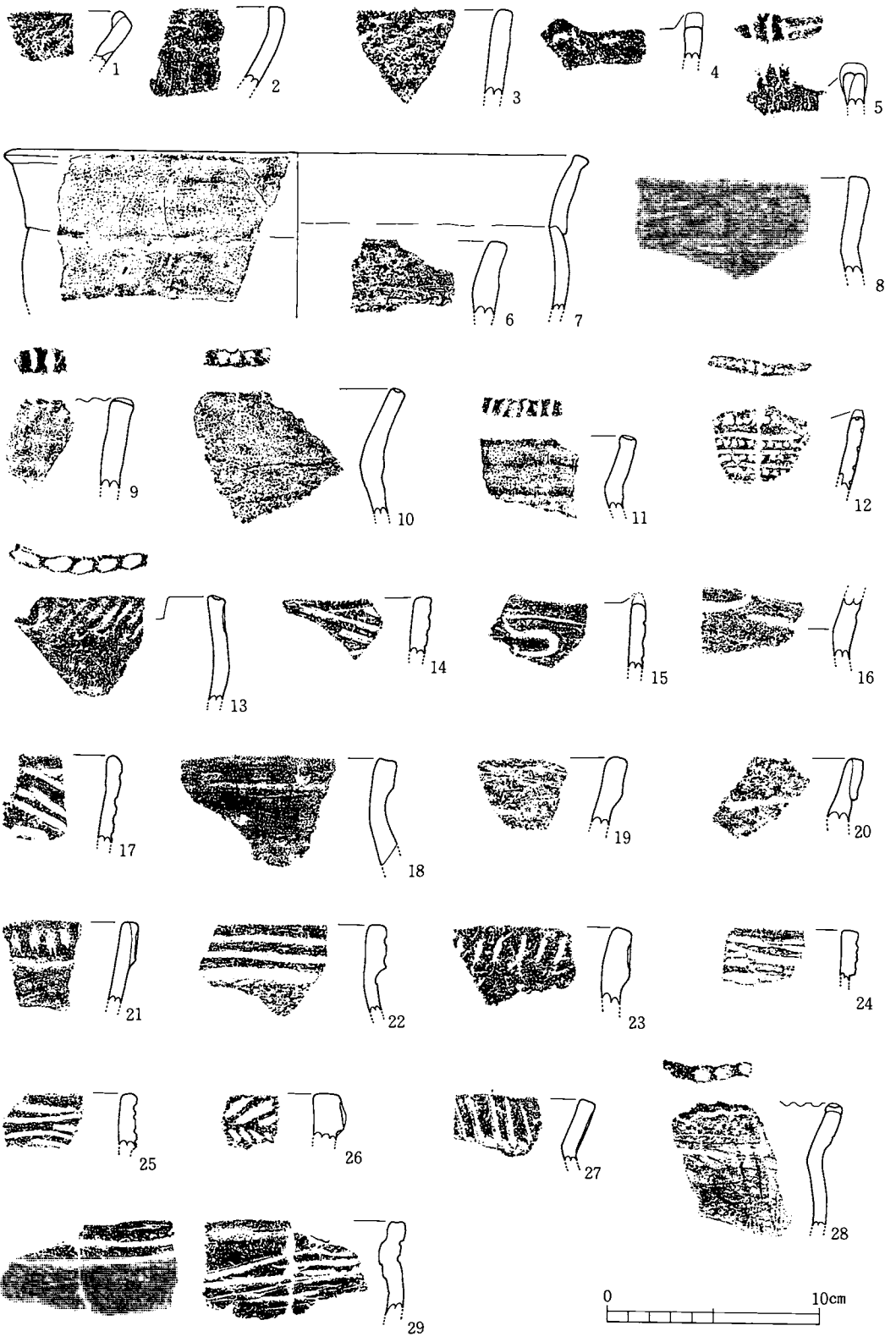
12は口縁帯はなく、直線的な口縁部であるが、連点と押し引きによる沈線を交互に施文している。小さな破片であるが、文様帯は幅広になるものであろう。わずかに波状口縁をなし、口縁端部にも連点文があり、薄手の造りである。

13～17は口縁帯がなく、口縁部に幅の狭い文様帯をもつものである。

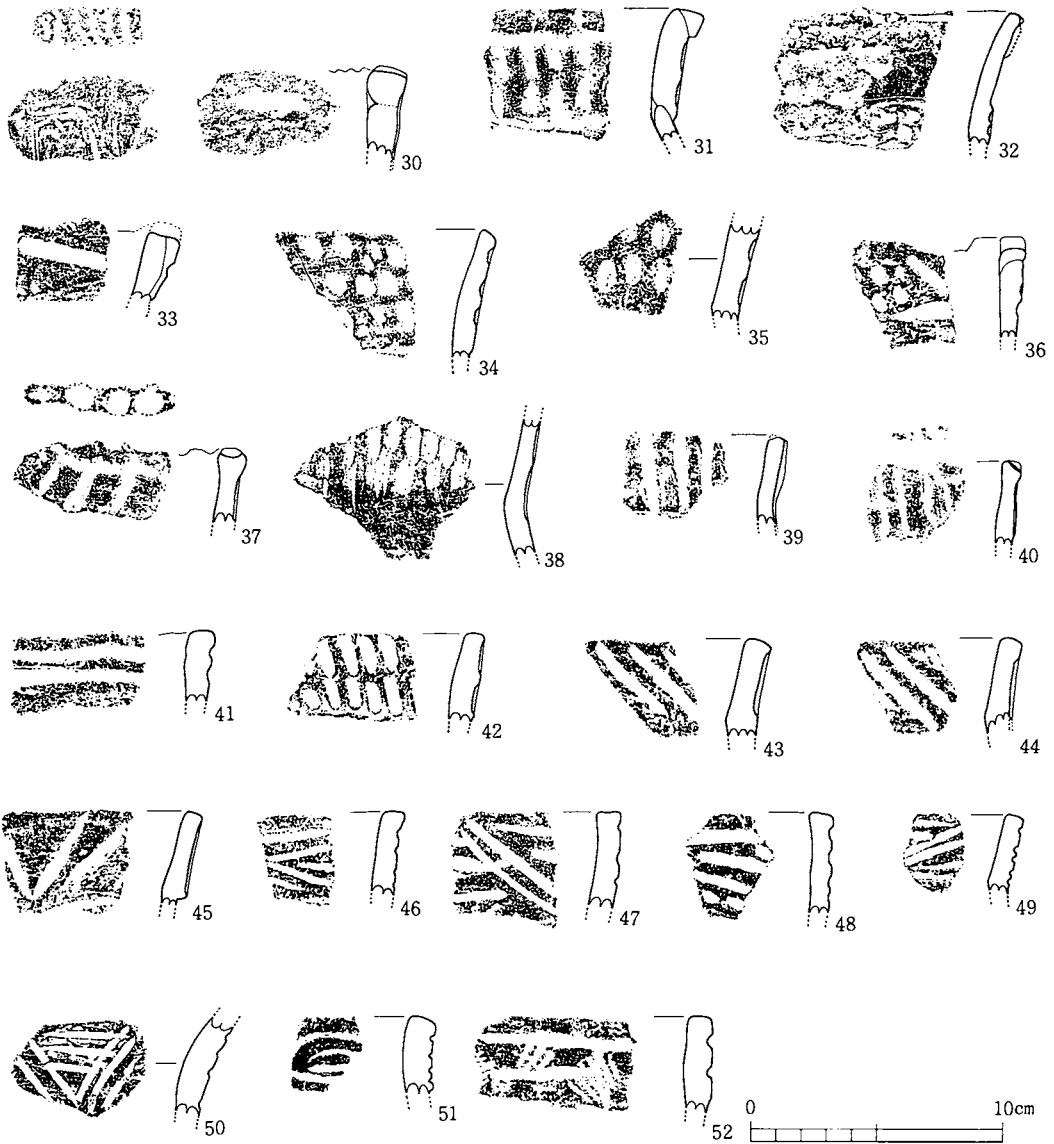
18～20は口縁部を肥厚させているが、その幅は狭く、無文のものである。21～29は、肥厚させた口縁部に施文したものである。文様は単純で、縦、横、斜めの沈線、凹線が中心である。口縁部肥厚の度合は様々で、27～29はごくわずかに肥厚させているにすぎない。口縁部から直線的に胴部へ続くものと、屈曲して胴部へ続くものがある。

30～52は口縁部を肥厚させ、文様帯としたものである。基本的には前類と大きな区別はなく両者の中間形態的なものもある。30・33はきわめてぶ厚い。31・32は凸帯を巡らしている。口縁部は水平のものが多く、やや幅広の山形突起を付けたもの（33・36）、上部からの押圧により小さな波状をなすもの（37）がある。文様は、凹点、凹線、沈線など単純なものが多いが、52では貝殻圧痕文がみられる。52には内外に赤色顔料が塗布されている。

53は大きな波状口縁をなし、口縁部のわずかに下に断面三角形の凸帯を巡らす。凸帯の上面



第10図 七ツ江カキワラ貝塚出土土縄文土器実測図



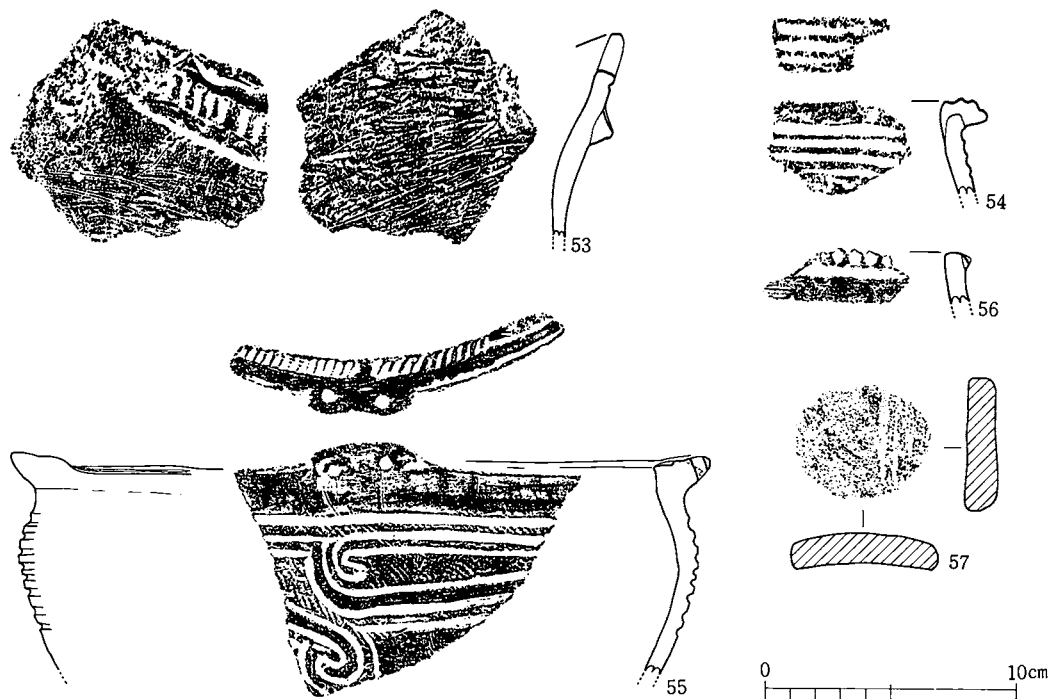
第11図 セツ江カキワラ貝塚出土縄文土器実測図

にのみ刻み目を入れている。外面には柁目板によるものと思われる平行の調整痕があり、内面はへら磨きされている。

54・55は口縁部を横に広げ、口唇部と胴部に施文したもので、胴部は球形に近い。55は2孔の耳を付け、胴部文様は磨消縄文である。54は器面が荒れているが、55は文様部分以外は丁寧にへら磨きされている。55には外面にのみ赤色顔料の痕跡がごくわずかにみられる。

56は、所謂凸帯文土器の口縁部破片である。

58～66は胴部の破片である。58は削り出しにより施文し、外面には赤色顔料が塗布されている。59・60は磨消縄文の破片であるが、59は貝殻擬縄文、60は連点文が一見縄文に見えるもの



第12図 セツ江カキワラ貝塚出土縄文土器・土製品実測図

である。

62～66は無文の胴部破片である。62はナデと横ナデ調整であるが、63～65は底部に近い破片で、縦方向の削りにより調整されている。63～65は直線的であるが、66は弯曲度が強く、浅鉢の底部近くであろう。

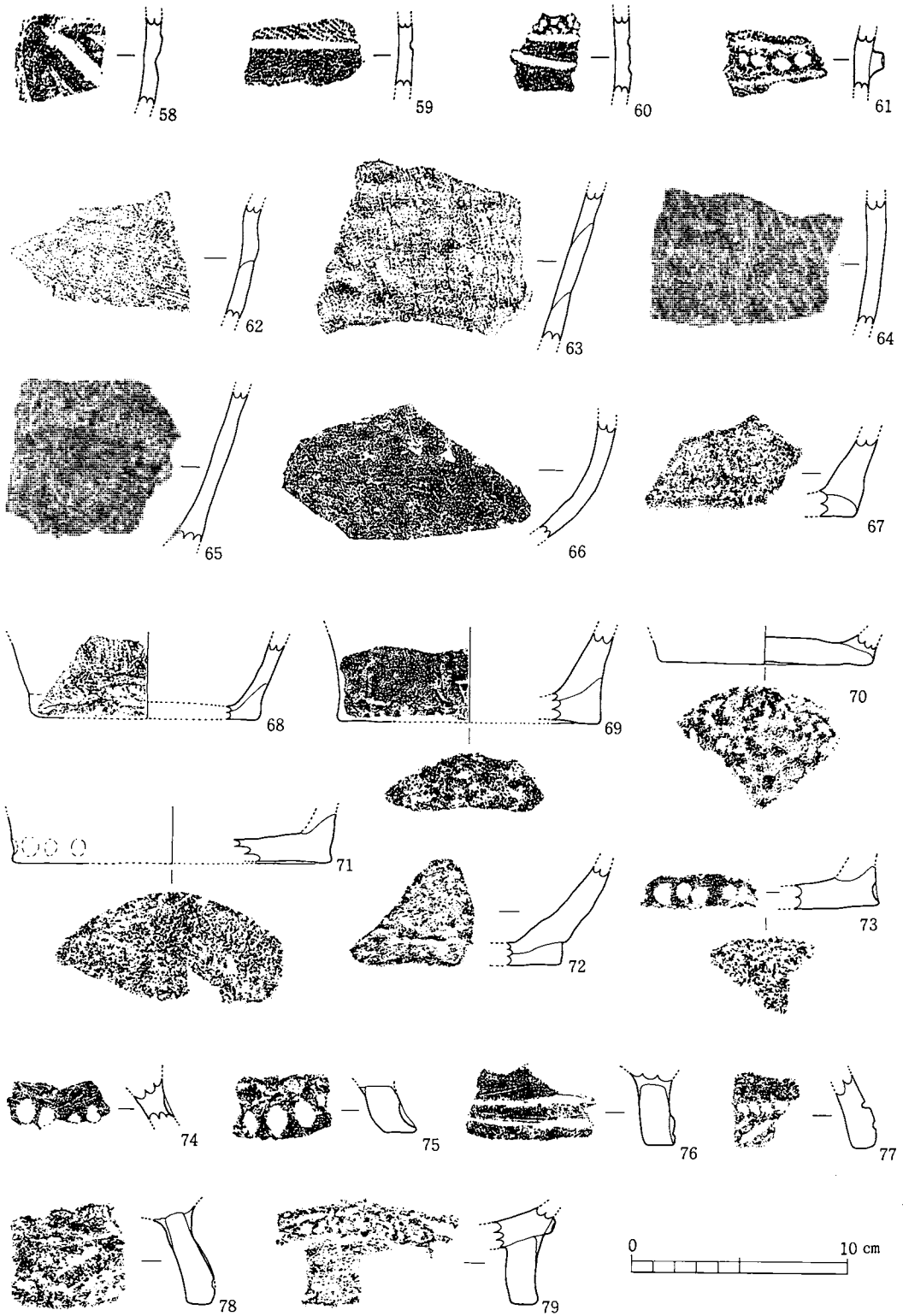
67～73は平底の底部である。胴部から直線的に底部へ続くもの(67～71)、高台状に段がつくもの(72)、凹点文を巡らすもの(73)がある。底部外面はナデ調整されており、69・70に鯨骨状圧痕らしきものがわずかに観察されるが不明確である。

74～78は脚台状の底部で、低くて直線的なもの(75・76)と高くてわずかに弯曲するもの(77・78)とがある。脚台部には単純な文様がみられる。

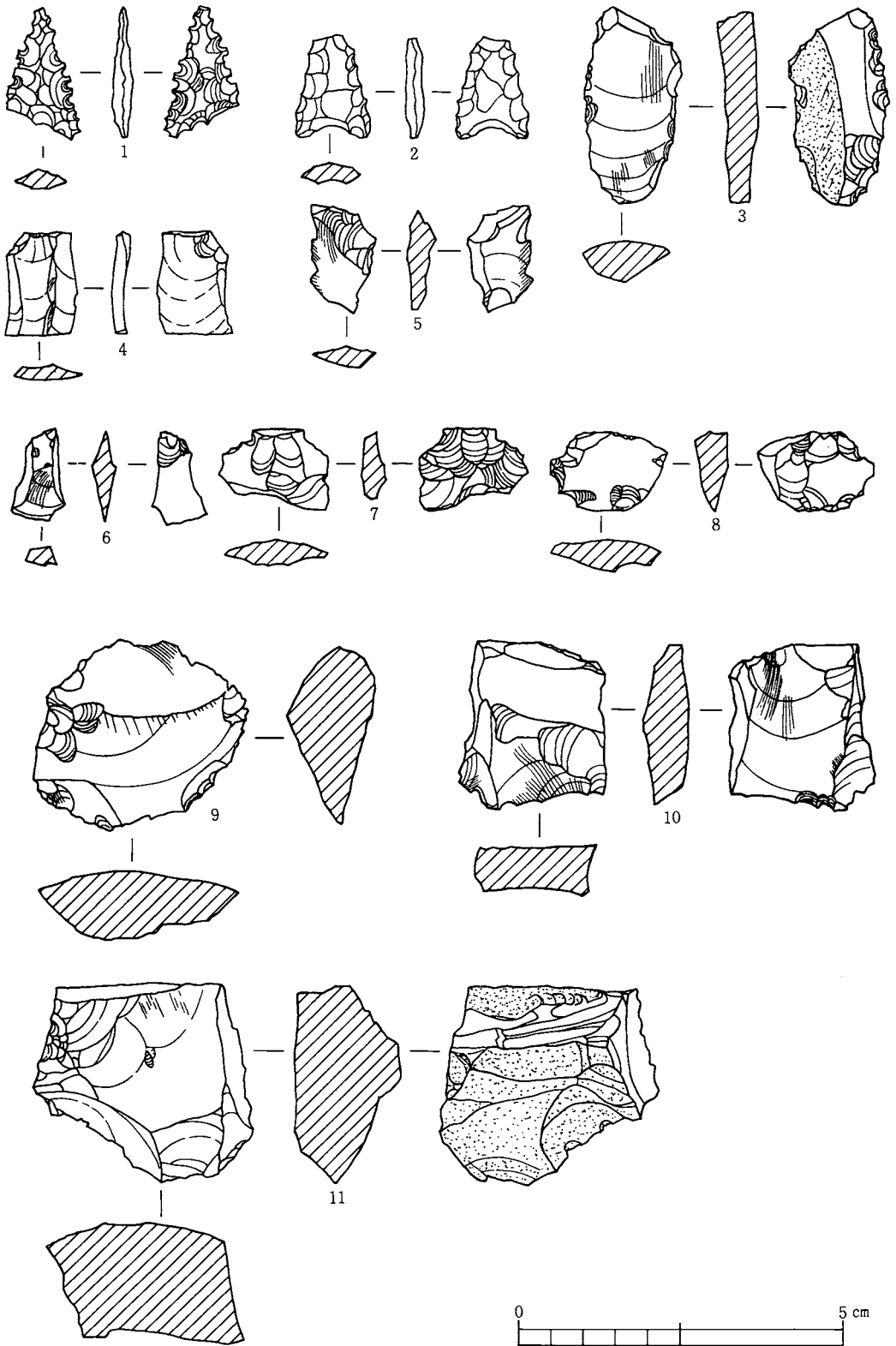
79は台付鉢である。棒状の低い脚部で、胴部との接合面のやや上位に刺突を施した凸帯を巡らせている。

## (2) 土製品 (第12図57)

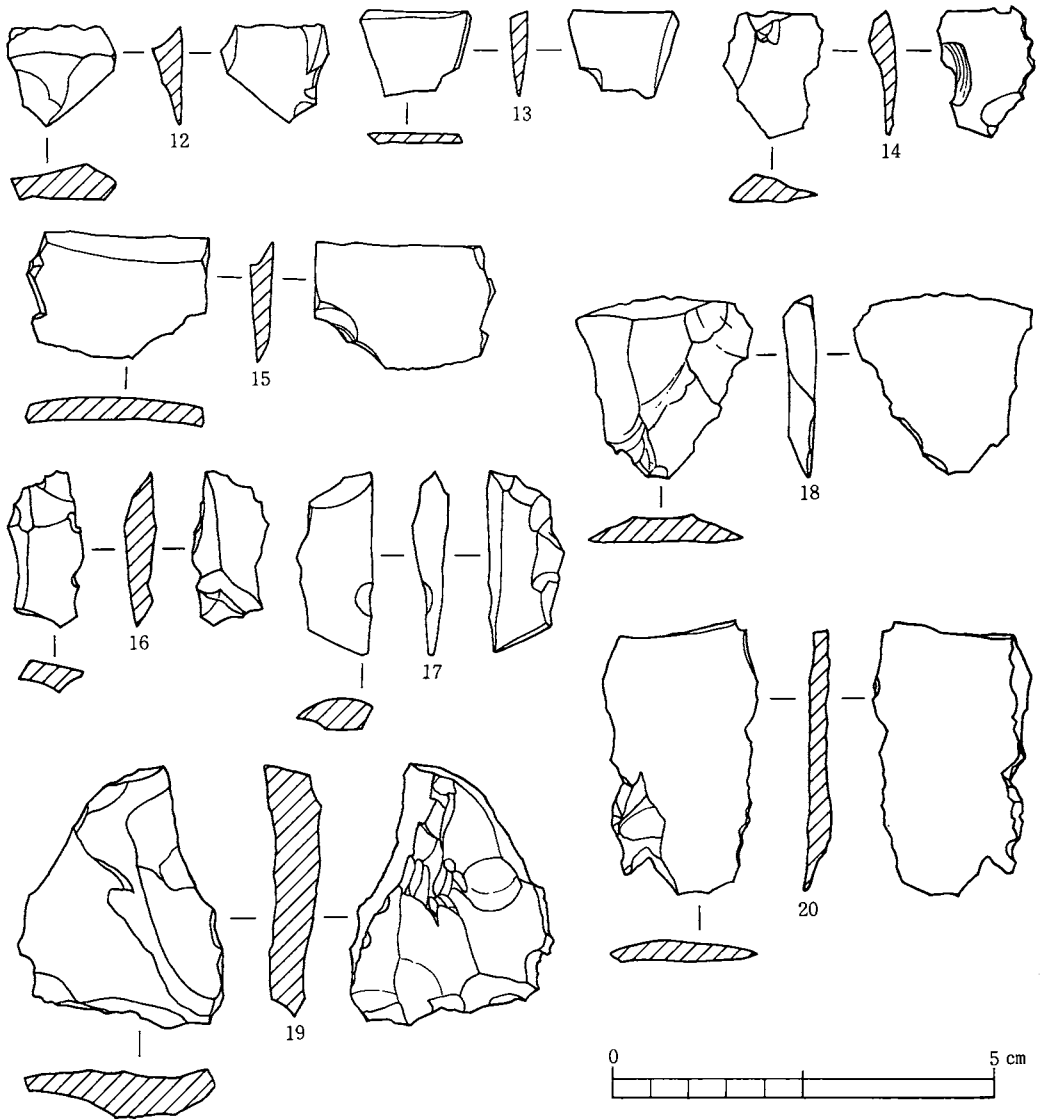
縄文土器の胴部破片を楕円形に加工したもので、長径5.8cm、短径5.2cmを測る。底部に近い部分を利用している。



第13図 セツ江カキワラ貝塚出土土縄文土器実測図



第14図 セツ江カキワラ貝塚出土石器実測図



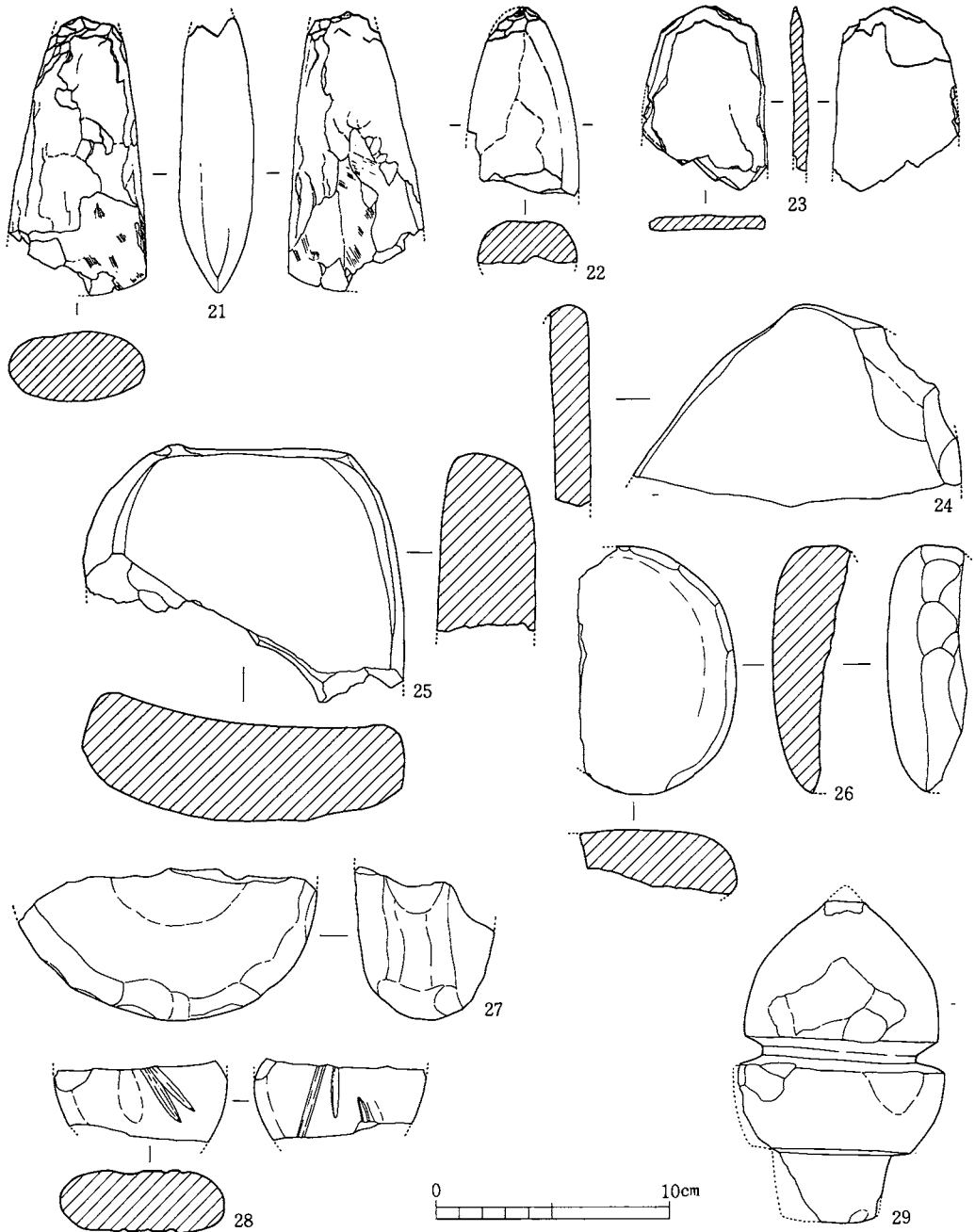
第15図 セツ江カキワラ貝塚出土石器実測図

### (3) 石器 (第14・15図)

石器・石製品も、土器と同じく出土状態の明確なものはない。

1は側辺が鋸歯状になった石鏃で、細身の三角形を呈する。形状は石鏃との組合せによる銚先石器に類似するが、復原長2cmと小型である。基部を欠失しており、石材は黒灰色の黒耀石である。2は安山岩の石鏃で先端部を欠き、表面は風化が進んでいる。

3・4は黒耀石の縦長剥片で、3の側縁部には加工を施して刃部を作っている。5・6は不定形の剥片を使用したものである。



第16図 セツ江カキワラ貝塚出土石器・石製品実測図 (25・29は $\frac{1}{2}$ )

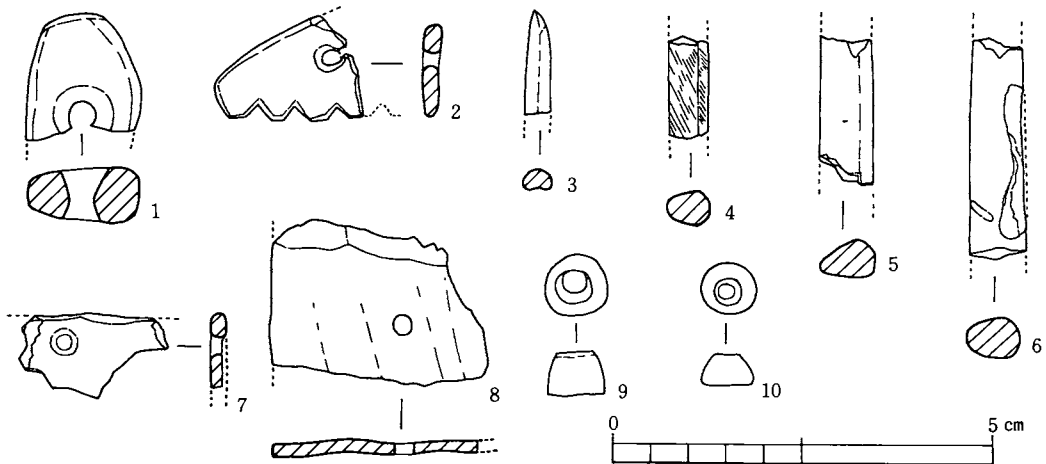
7～9は、二枚貝状の不定形剥片を利用した搔器である。7・8には顕著な二次調整はみられない。

10・11は石核で、11の一側面は自然面を多く残している。

12～20は、不定形剥片及び使用痕のある剥片で、18が頁岩である他はすべて安山岩である。

21・22は磨製石斧であるが、遺存状態は良くない。21は円刃で、斜め方向の線状痕が観察さ





第17図 セツ江カキワラ貝塚出土石製品・骨角器・貝製品実測図

れるところから縦斧と考えられる。石材は蛇紋岩であるが強熱を受けており、変色・劣化が著しい。22は蛇紋岩の磨製石斧の頭部の断片である。

23は扁平な打製石斧で、刃部は欠失している。

24・25は石皿で、24は砂岩、25は多孔質の安山岩である。24の使用面はほぼ水平で、使用度は低い。25は使用面が弯曲しており、使用度が高かったことが窺える。

26・27は磨石類で、共に安山岩である。26は側縁部に敲打痕、表裏面に磨痕がみられるのに対し、27は側縁部に敲打痕がみられるだけで、磨痕はない。

28は、砂岩の円礫を利用した砥石で、表裏面に浅いU字状の使用痕があるが顕著ではない。

#### (4) 石製品 (第17図1、第16図29)

第17図1は石製垂飾品である。石質は硬い石英で、乳濁色を呈する。

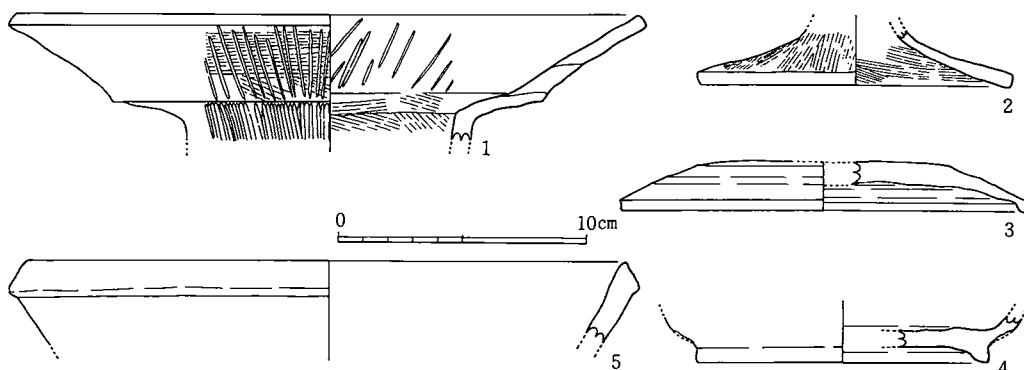
第16図29は五輪塔の空風輪で、貝塚と直接の関係はない。重機によって移動し、散乱していたものを採集したものである。他に1点、水輪の断片も採集された。

#### (5) 骨角器・貝製品 (第17図2～10)

水洗した貝層の中から骨角器6点、貝製品3点を検出した。

2は獣骨を加工した垂飾品である。全体形は三角形に復原され、下端を鋸歯状に刻み、中央部付近に穿孔している。図の表の部分は自然面であるが、裏には擦過痕があり、加工を行っている。

3～6はヘアピンである。3はその先端部であり、管骨を利用しており、裏面にわずかに凹



第18図 七ツ江カキワラ貝塚出土土器実測図

みがある。6の表面は傷や風化が著しく、明瞭な加工痕は観察できず、自然遺物の可能性もある。

7は全体の形状が不明である。両面とも自然面を残し、両面からの穿孔があり、装飾品の一種であろうか。

8はアワビに穿孔したもので、図の左端部は明らかに切断している。表裏面ともアワビ特有の光沢を有している。他にもアワビの断片は検出されているが、加工痕のみられるのはこの1点であった。

9・10は貝玉で、小形の巻貝の殻頂部近くの上下端を切断し、切断部分はさらに磨きをかけ丸味をおびている。内部は加工を加えず、螺旋形のままである。貝種は2点とも同一で、カワアイである。10は火を受けて焼けており、脱色して灰褐色を呈する。

#### (6) 縄文土器以外の土器 (第18図)

少量の古式土師器、須恵器、須恵器系土器が出土しているが、掘削された貝層から出土したものではない。原位置等の明確なものはないが、貝層上部の堆積土に含まれていたものであろう。

##### 土師器

1は複合口縁壺の口縁部で、復原口径は約25cmである。頸部は直立しており、口縁部は大きく外傾している。器面の調整はハケ目とへら磨き、横ナデが併用されている。2は台付鉢の脚部であろう。復原底径は約12.5cmを測る。器面調整はハケ目の上を横ナデしているが、やや凹凸がみられる。二次熱を受け、器面が荒れている。

##### 須恵器

須恵器の出土も少なく、細片を含めても4～5点を数えるにすぎない。3は蓋で、復原口径は16.2cmを測る。胎土・整形・焼成ともに良く、外面は暗灰色、内面は明灰色を呈する。4は高台付椀の底部で、小さな破片である。復原底径11.6cmを測る。体部下端にはわずかに張りか

みられ、高台はほぼ直立である。畳付の部分はやや丸味をおびる。胎土・整形・焼成ともに良く、硬質で、暗灰色～黒灰色を呈する。3・4ともに同時期で、奈良時代（8世紀）に比定される。

#### 須恵器系土器

こね鉢の口縁部細片で、復原口径は24cmを測る。口縁部は断面三角形を呈する。胎土にわずかに砂粒を含むが焼成は良く、硬質で明灰色を呈する。器形・焼成状態からみて、鎌倉時代に属するものであろう。

### (7) 自然遺物

貝類を除けば、自然遺物の種類・量は多くはない。

貝類については、表土が除去され、露出していた貝層頂部の4地点からブロックサンプルを採集した（第5図）。ブロックサンプルの量、及び観察事項等は第1表のとおりである。また、水洗処理によって多量の貝類が得られたが、ほとんどはハイガイとマガキであった。水洗処理や採集によるものは、貝種の異なるものを任意に抽出した。

動物骨は、埋葬された牛・馬骨以外はごく少量である。魚骨についても水洗処理によって少量が得られたにすぎない。

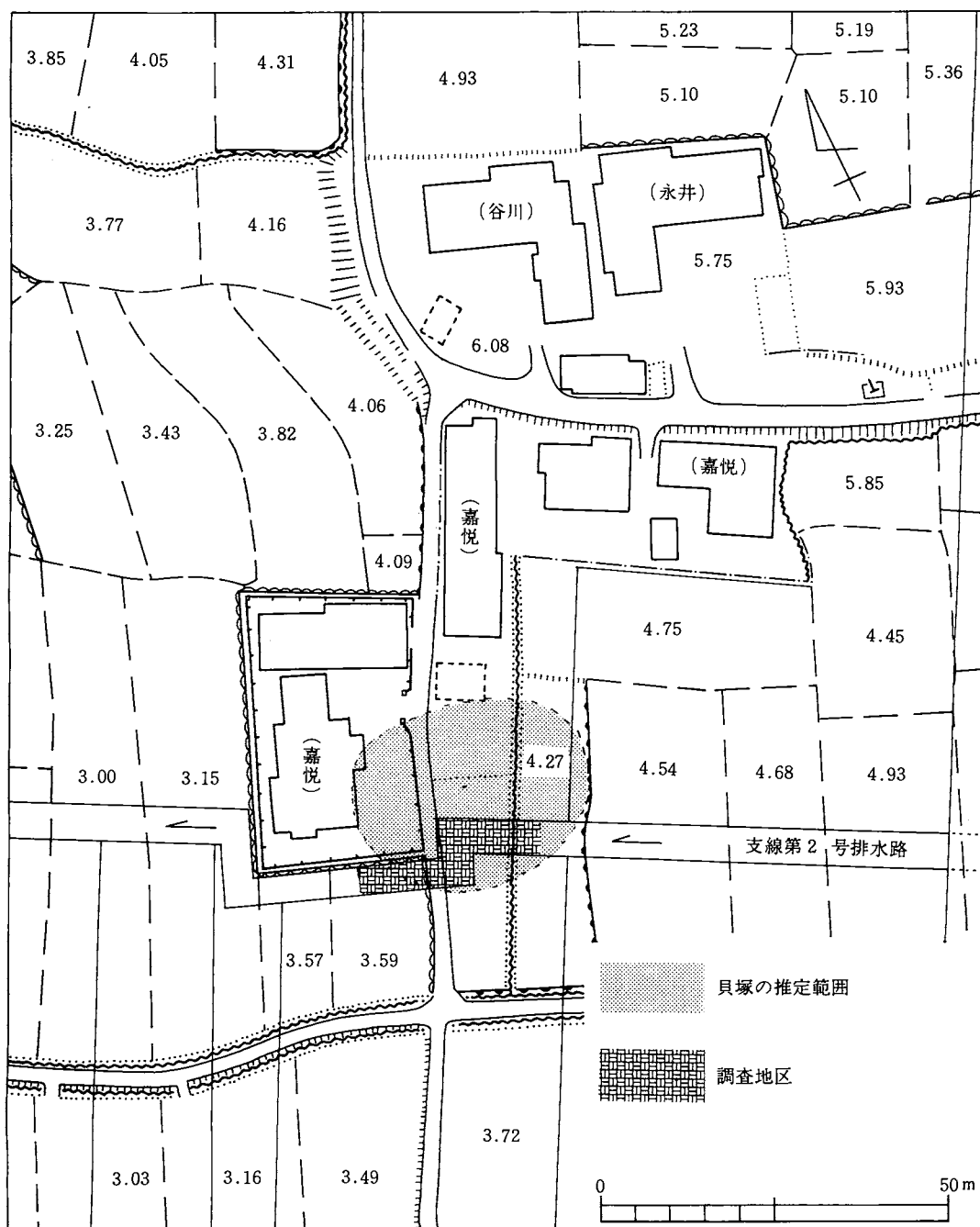
植物遺体は、同じく水洗処理によって数点の炭化した堅果類が出土した。掘削された貝層からの出土で、この排土からは他時代の遺物は出土していないので、貝塚に伴うものと考えてよい。

これらの自然遺物については、各々専門調査員の方に調査を依頼し、その成果を後章に収めているので参照されたい。

第1表 ブロックサンプル一覧表

サンプルNo.	サンプル量 (cm)	サンプル上面 のレベル (m)	貝層の区分	採取時の観察事項等
1	30×30×20	3.19	純貝層	カキとハイガイの純貝層
2	30×30×20	2.93	純貝層	カキを主体とし、ハイガイを混じえる。
3	30×30×20	3.18	混土貝層	土の量はごく少ない。ハイガイを主とし、カキが混じる。土器が多い。1号人骨の近距離。
4	30×30×20	3.21	純貝層	カキが主体。やや破碎している。

# V 竹の下貝塚の調査



第19図 竹の下貝塚地形図

## 1. 調査の概要

現地踏査を行った時、排水路掘削、周辺の整地工事はすでに完了しており、支線第2号排水路の法面の下部に貝層が露呈している状態であった。排水路から掘削された土砂・貝層のほとんどは、すでに何処かに運び去られており、ごく一部が排水路の北側に残存していた。

調査は、排水路法面を清掃して観察記録を行い、掘削された貝層の水洗処理を行った。

## 2. 貝層

掘削された支線第2号排水路は、民家を避けるため鍵形に掘られており、その部分に貝層が露呈していた。水路の下流に向かって右手（北）の法面を清掃し、3面にわたって断面図を作成した（第19・20図）。上流部分から断面1、断面2、断面3として説明を加える。

### 断面1

約15mの長さを清掃、観察した。図の右手は工事により大きく攪乱を受けており、原地層を観察できたのは約14mである。

地表面の標高は4.1～4.2mで、間に水路を挟んで、両側は水田である。2～12層は、貝・土器等の遺物を含まず、連続性の強い水平堆積を示す。13～15層は、暗青灰色の粘質土で、七ツ江カキワラ貝塚でも同様な地層がみられた。低湿地特有の色調、含水性、粘性をもつ層である。13～15層には、図示したように縄文土器・弥生土器を含んでいた。

16層は破碎したカキを主体とした貝を含む混土貝層である。17層は混土貝層で、16層より貝の比率が高い。貝種は16層と同じく、破碎したカキが主体で、ハイガイ等を含んでいる。

貝層の上面は、図の両端で標高2.7mを測る。最も高い所で2.8m、低い所では2.5m前後で上面にはわずかに凹凸がある。水路工事等はすでに終了しており、下部への掘削は行わなかったため、貝層の下面は未確認である。

遺物の出土状態は図に示したとおりであるが、縄文土器と弥生土器とが出土した。両者の出土層位は明確には区別できず、混在した状態であるが、貝層（16・17層）には縄文土器が多く、その上層（13～15層）には弥生土器が多い傾向はみられる。

### 断面2

断面1と断面3の間の屈曲部で、両者とは直交する位置関係にあり、上面で約4m、下面で約3.3mの短い区間である。地表の大半は水田面で、図の左端は簡易舗装の農道である。水田面地表は、標高4.1m前後で、右端は断面1へと連続する。

2～11層の堆積状態は断面1と大差なく、12層が混土貝層で、断面1の17層に連続する。貝層の上面は標高2.6～2.7mで、下面は未確認である。

断面で確認した遺物は5点で、縄文土器が1点、弥生土器が2点、須恵器が1点、馬の歯が1点であった。出土層位をみると、9層に弥生土器・須恵器・馬の歯が各1点、10層に縄文土器・弥生土器が各1点である。縄文土器は後期前半、弥生土器は後期後半、須恵器は蓋の細片であるが6世紀終末頃と考えられる。馬の歯は、弥生土器・須恵器と近接して出土し、年代の特定はできないが、両者のどちらかに属するものであろう。貝層からは、土器等は出土していない。

### 断面3

断面2からほぼ直角に折れて、下流側の約11.4mにわたって記録を行った。

図の右端上部は、断面2に見られた農道で、道路の横断面が現われている。下部の堆積状態は基本的には水平堆積を示しているが、断面の中央部付近は不整な堆積状態を示している。これらの不整な堆積層は、砂層あるいは砂粒を含むものが多い。

29層は混土貝層で、断面1の17層、断面2の12層に対応し、貝種等も断面1・2と同一である。断面で確認した遺物は、縄文土器、弥生土器、須恵器がある。須恵器は細片が1点だけ出土している。甕の胴部破片であるため、全体の器形は不明である。縄文土器は16点、弥生土器は43点を数えた。

層位的な出土状態は、正に混在状態であるが、地点では断面の左端の25層に集中している。貝層部分からの出土は9点で、縄文土器4点、弥生土器5点である。

## 3. 出土遺物

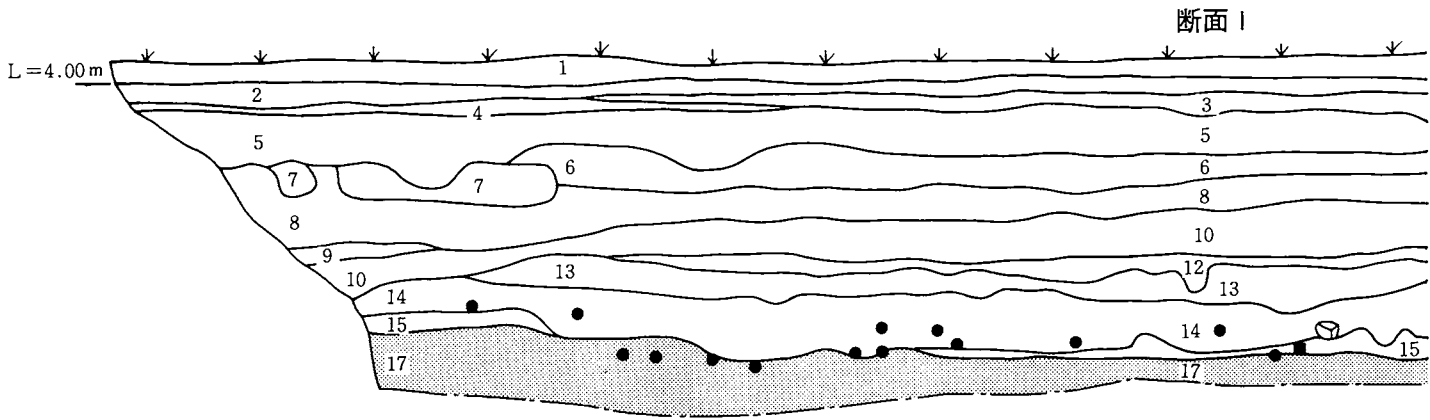
出土した遺物の大半は、排水路断面から出土したものである。排水路から掘削した貝層などはすでに何処かへ持ち去られており、遺物の量は少ない。出土遺物は土器・骨角器の他、自然遺物として貝類・馬歯・獣魚骨があるが、貝類の他はきわめて少量であった。

### (1) 土器

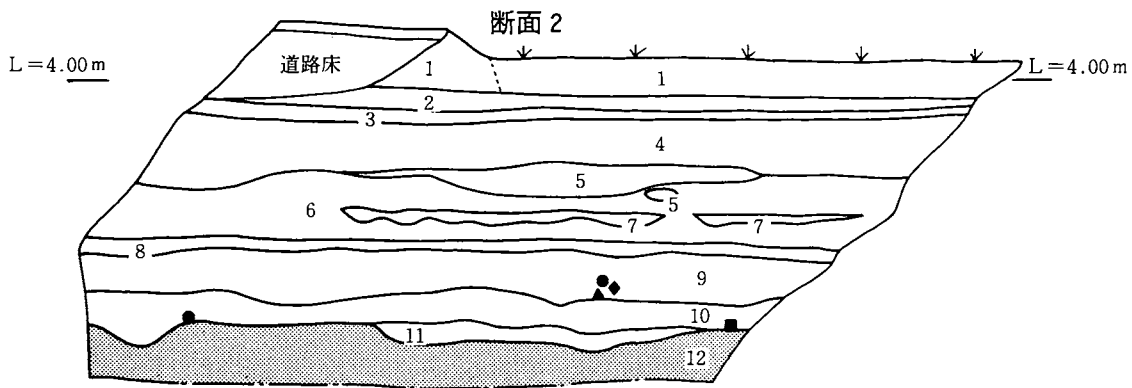
出土した土器の総点数は107点で、すべて排水路北側断面から採集したものである。内訳は縄文土器21点、弥生土器84点、須恵器2点である。いずれも小さな破片資料で、全体を復原し得るようなものはない。

#### 縄文土器（第21図1～8、図版）

1～4は深鉢の口縁部であるが、口縁部を肥厚させ、その部分に押し引きの凹線文を施すが、4は無文である。1の口縁端部は押しえにより小さな波状を呈し、文様帯の下は横方向にかき削っている。5・6はやや底部に近い胴部の破片で、内外面ともナデ・横ナデ調整であるが、



断面 I

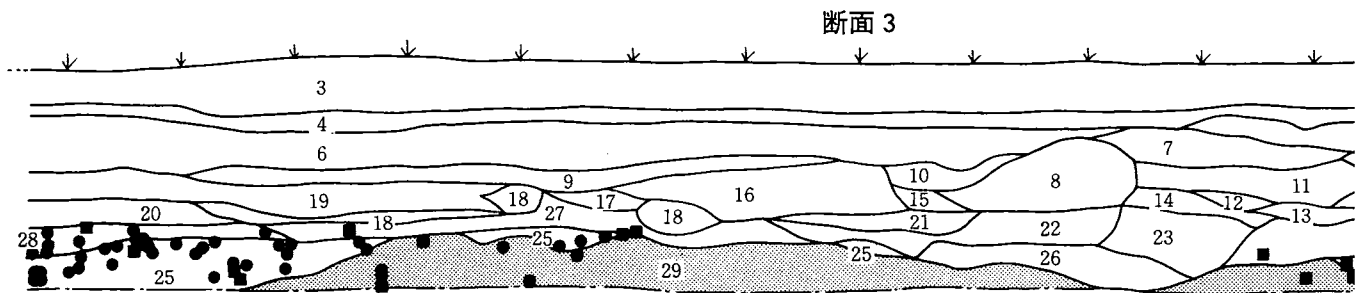


断面 2

断面 I

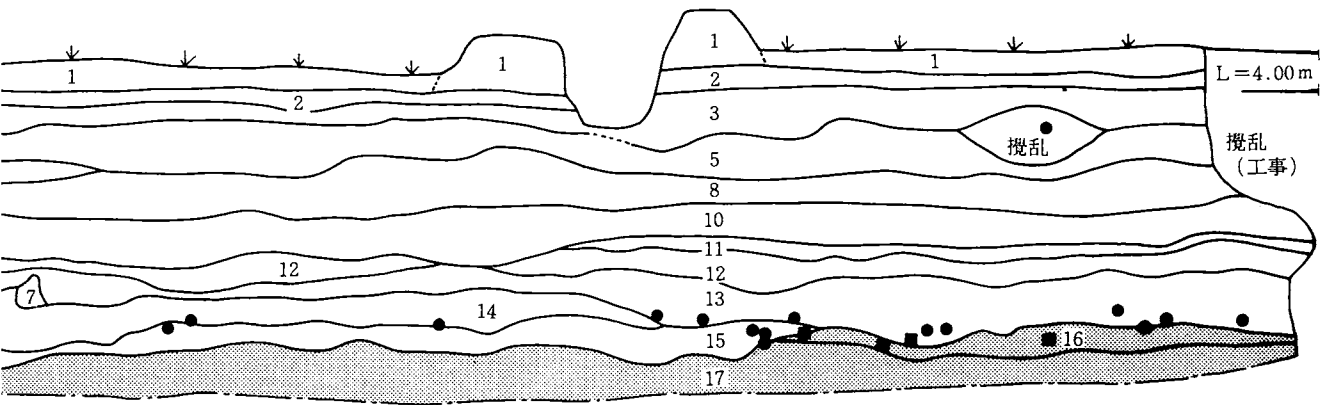
- 1 表土
- 1 畦畔
- 2 暗灰色土
- 3 黄灰色土 (含白斑)
- 4 黄灰色土
- 5 暗褐色土 (砂粒を多く含む)
- 6 暗褐色土 (砂粒をわずかに含む)
- 7 灰白色砂層
- 8 暗褐色土 (砂粒を含む)
- 9 灰白色砂層
- 10 明褐色土
- 11 灰色砂層
- 12 暗青灰色土 (含褐色斑点)
- 13 暗青灰色粘質土
- 14 暗青灰色弱粘質土
- 15 暗青灰色粘質土
- 16 混土 (暗青灰色) 貝層 (破碎)

L=4.00m



断面 3

第20図 竹の下貝塚土層断面図



断面 2

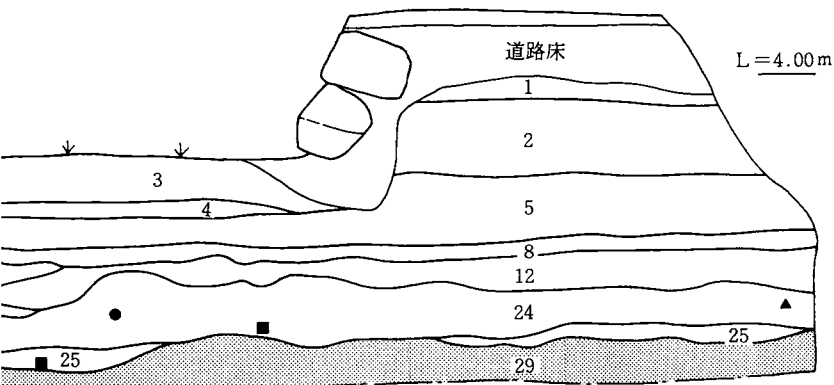
- 1 表土
- 2 暗灰色土
- 3 黄灰色土
- 4 暗褐色土 (砂粒を多く含む)
- 5 灰白色砂層
- 6 暗褐色土 (砂粒を含む)
- 7 明褐色砂質土
- 8 灰白色砂層
- 9 明褐色土
- 10 暗青灰色弱粘質土
- 11 暗青灰色粘質土
- 12 混土 (暗青灰色土) 貝層 (破碎カキ主体)

断面 3

- 1 黄灰色土
- 2 暗褐色土 (砂粒を多く含む)
- 3 表土
- 4 暗青灰色土 (含褐色斑点・細砂粒)
- 5 暗褐色土 (砂粒を含む)
- 6 暗青灰色土 (含小礫)
- 7 暗褐色土 (混青灰色土、荒い砂粒を含む)
- 8 灰白色砂層
- 9 暗青灰色土 (砂粒を含む)
- 10 暗青灰色土
- 11 暗褐色粘質土
- 12 明褐色土
- 13 灰褐色砂質土
- 14 暗灰色土 (砂粒を含む)
- 15 灰色砂層
- 16 暗灰色土 (含褐色斑点)
- 17 灰色粘質土
- 18 褐色砂層

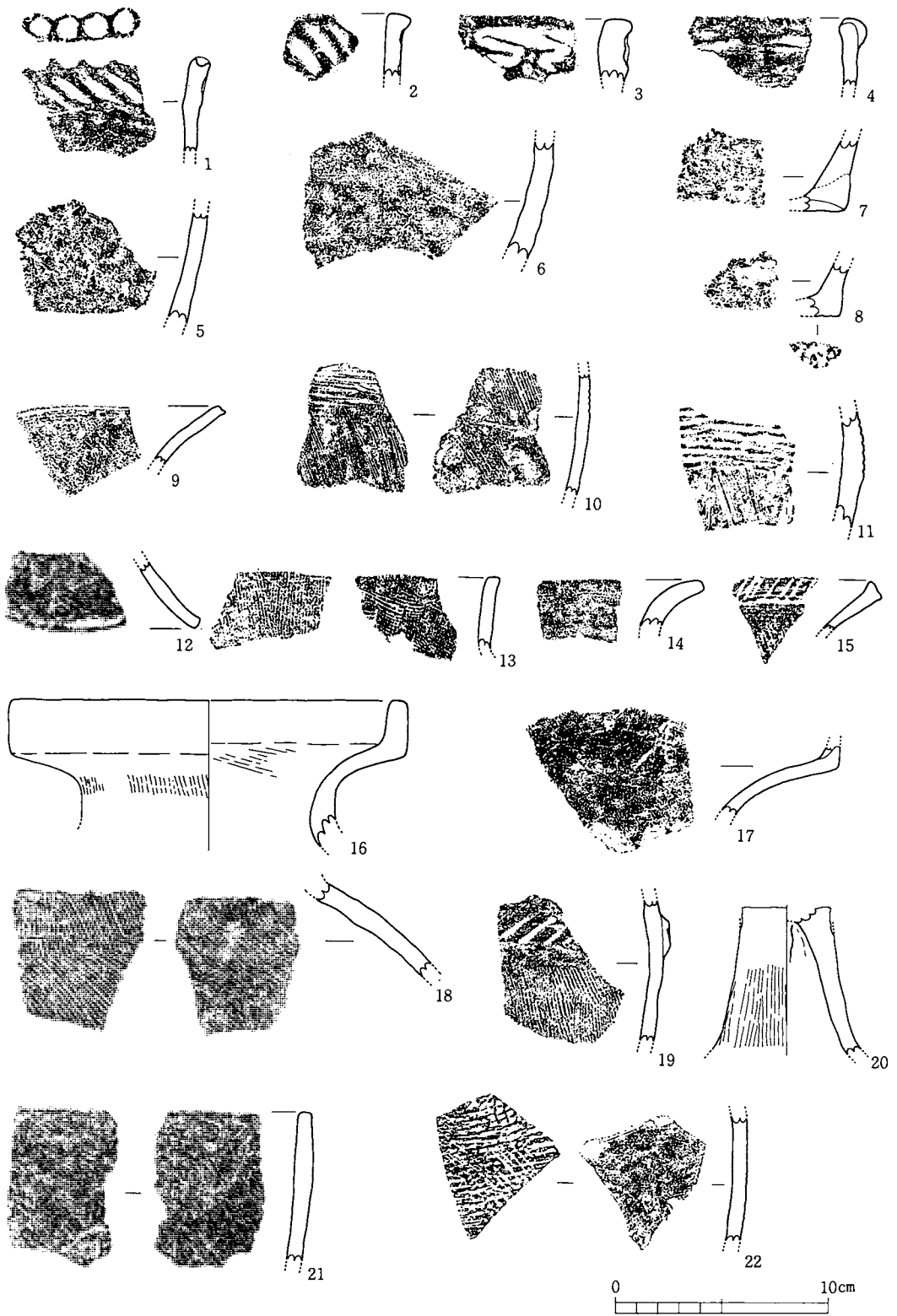
- 19 暗黄灰色土 (砂粒を含む)
- 20 暗灰色土 (砂粒を含む)
- 21 暗灰色粘質土
- 22 暗黄色土 (砂粒を多く含む)
- 23 暗青灰色粘質土 (細砂粒を含む)
- 24 暗青灰色弱粘質土
- 25 暗青灰色粘質土
- 26 黄褐色土 (砂粒を含む)
- 27 暗青灰色粘質土
- 28 暗青灰色土
- 29 混土 (暗青灰色土) 貝層 (破碎カキ主体)

カキ主体)



- 縄文土器
- 弥生土器
- ▲ 須恵器
- ◆ 馬 齒





第21図 竹の下貝塚出土土器実測図 1～8 縄文土器 9～21 弥生土器 22 須恵器

指圧などにより凹凸がみられる。7・8は平底の底部で、8にはわずかに鯨骨状の圧痕が観察される。これらの縄文土器の胎土は、砂粒や黒雲母の含有などの点できわめて共通性が強い。

### 弥生土器（第21図9～21）

器形としては甕、壺、高杯、鉢がある。

9は甕の口縁部で、薄い造りである。器面が荒れているが、外面には斜め方向のハケ目がみられる。10・11は甕の胴部破片で、上部にはやや荒いタタキ目が残し、下部はハケ目調整されている。内面は2点ともハケ目調整である。10の器壁は薄い、11は2倍以上の厚みがある。12は脚台であるが破片の状態からみて、あまり高くはならないものと考えられる。二次熱を強く受け、赤褐色に変色している。

壺には形態差があり、直口壺（13）、広口壺（14）、複合口縁壺（15～17）がある。15は肥後型複合口縁壺の一種であろうが、口縁部内面での屈曲はきわめて弱い。18は壺の肩部の破片で、16・17のような複合口縁に接続するものであろう。19は帯状の凸帯を巡らし、ハケ工具の端部で平行斜線を刻んだもので、16・18と一連の長胴複合口縁壺になるものと考えられる。この種の凸帯をもつ壺は、在地の弥生土器にはなく、東九州の影響下に出現したものであろう。

20は径の大きな高杯の脚部で、外面は荒いハケ目の上をナデ調整している。21は口縁部がほぼ直立する鉢で、外面は二次熱を受け、内面にはごくわずかに炭化物が付着している。

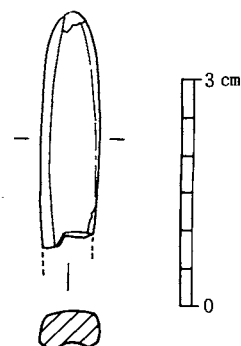
これらの弥生土器は、後期後半に比定されるもので、調査地の近く（北及び東側）にこの時期の生活址の存在を想像することができる。

### 須恵器（第21図22）

わずかに2点が出土している。1点は細片で図示できないが、6世紀代の蓋であろうとみられるものである。22は甕の胴部破片で、外面には格子タタキ目の上に平行タタキ目が重複し、内面は同心円タタキ目をナデ消している。胎土・焼成ともに良く、硬質で青灰色を呈する。これらの諸特徴により、初期の須恵器とみられる。

### (2) 骨角器（第22図）

掘削された貝層の水洗によって1点が出土した。柳葉形を呈したヤス状の刺突具の先端部分で、先端部は磨滅してやや丸味をおびる。幅7.5mm、遺存長3.15cmを測る。管骨を利用しており、裏面に凹みがある。表面はやや風化しているが、加工痕が良く残っている。



第22図 竹の下貝塚  
出土骨角器実測図

### (3) 自然遺物

調査時、排水路から掘削された貝層の大半は運び去られており、わずかな排土を水洗処理した。また、断面清掃に伴ってある程度の資料を採取したにすぎない。したがって、七ツ江カキワラ貝塚に比べると量はきわめて少ない。

貝類は、マガキの破碎されたものが主体を占め、ハイガイや小型の巻貝が混在している。

動物遺体もきわめて少なく、魚骨と獣骨が数点と馬歯が1点出土したにすぎない。馬歯は貝層上位の包含層から出土したものであるが、同一土層の近接した地点から弥生土器（後期）と須恵器（6世紀終末）が出土しており、年代の判定に苦しむところである。

植物遺体は皆無であった。

## VI まとめ

七ツ江カキワラ貝塚、竹の下貝塚の両貝塚とも、従来はその存在が知られておらず、県営ほ場整備事業の排水路工事によって発見されたものである。

とくに、七ツ江カキワラ貝塚は、そのまま工事が進行すれば壊滅的な損傷を受けていたものと予想される。いち早く、そのことを察知され、適切な措置をとられた勝木 安氏の功績を大としなければならない。また、地元の関係者や小川町、小川町教育委員会、農政部局においても、文化財保護の主旨を尊重され、調査や保存問題について全面的な協力を惜しまれなかった。

ここに報告した成果が、少しでも役することがあるとすれば、これらの関係者の努力の賜物である。

調査は、応急的に実施したもので、限られた日程と範囲の中で実施したものである。保存を前提としたため、発掘は最低限に止めた。したがって、細部については不明確な点もあり、隔靴搔痒の感も否めないが、調査の成果と問題点について簡単にとりまとめをする。

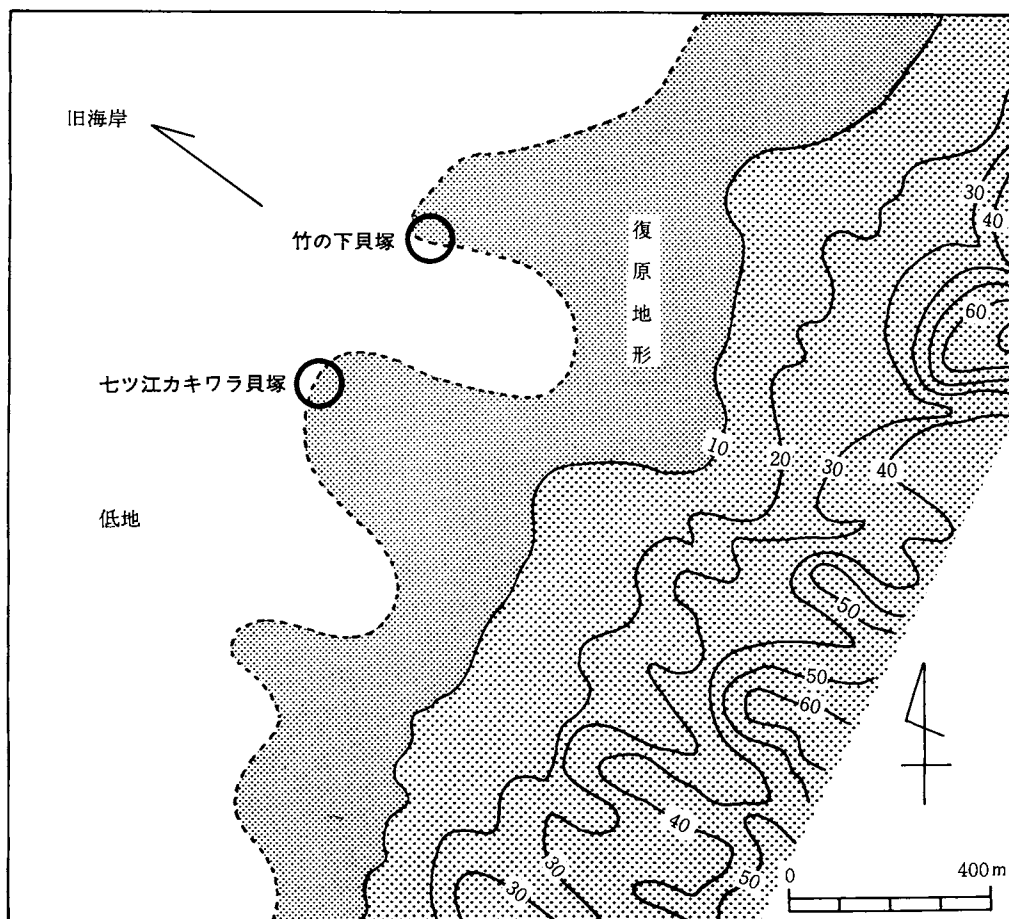
### 遺跡の立地

本文中でも述べたとおり、両貝塚の周辺、あるいは小野部田地区の山麓部の地形は、耕地化などによって改変されており、本来の微地形が変化している。そこで周辺一帯の現地踏査、ほ場整備事業施工前の地形図、航空写真などの検討により、もとの地形を復原し、遺跡立地を考えてみた。

小野部田地区は、東側の山塊と西側の低湿地の変換点に立地している。東側の山塊には大小の谷が発達し、その谷から多くの小川が西側の低地へと流れ出ている。これらの小川による小扇状地、および山塊から派生した微丘陵とがあり、西側の低地と複雑に入り組み、樹枝状の地形を呈していたものと考えられる。山麓部を南北に走るのは、県道下郷・北新田線であるが、これは藩政時代の薩摩往還にほぼ一致する。小野部田地区の集落は、この道路の東側斜面に多く位置するが、道路の西側にも点在している。西側に位置する部分に注目すると、これらの宅地がほぼ旧微丘陵上に位置していることが看取される。

第23図は、七ツ江カキワラ貝塚、竹の下貝塚周辺の微地形の復原図である。竹の下貝塚は、調査地点の北・東に宅地が点在し、この部分は現在でも微高地となっている。貝塚は、この微高地の南側緩斜面に位置しているものである。貝塚期の生活面は、丘陵の頂部、現在の宅地付近にあると考えられる。排水路の断面調査で弥生時代後期の土器が出土しているが、この時期の遺構も貝塚期に重複して存在するものであろう。

七ツ江カキワラ貝塚一帯は、東から西へごくわずかに傾斜する緩斜面である。丘陵の基部には宅地が点在するが、先端部にはみられず、他地点より改変が著しい。しかし、旧地形図等に



第23図 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚周辺地形復原図

より、図示したような微地形が復原でき、貝塚はその先端部に位置していると考えられる。住居址などの遺構は、東側の兵陵上に位置しているものであろう。

両貝塚の位置関係は、復原図でも明らかとなっており、小さな谷を隔てて隣接する丘陵の先端部に位置していたものと想定される。

このような状況は、ほぼ小野部田地区の全域についてみられることで、昭和60年度に発掘調査を行った大坪貝塚でも同様のことがいえるようである。

#### 出土遺物と貝塚の時期

七ツ江カキワラ貝塚では、縄文土器、土製品、石器・石製品、骨角器・貝製品、土師器、須恵器、自然遺物の他、人骨が検出された。時期別にみると、大半は縄文時代に属するもので、それ以降のものはごく少量である。

貝塚の年代を決定するのは縄文土器であるが、出土状態の明らかなものは少なく、掘削された貝層からの出土品や、散乱していたものを採集したものである。しかし、大きな時期差は認められず、貝塚の形成時期をほぼ特定できるようである。出土した縄文土器は前章で記述してい

るが、これらを既知の形式名で呼べば、並木式、南福寺式、北久根山式、出水式、鐘ヶ崎式、凸帯文土器の範疇に含まれる。並木式は中期、凸帯文は晩期であるが、いずれも1点ずつしか出土していない。他は縄文時代後期前半に位置づけられるものである。この地域の中期を代表する阿高式、後期後半の西平式、三万田式等はみられず、貝塚の時期は縄文時代後期前半に特定してよい。

縄文土器以外の出土遺物は、土師器、須恵器、五輪塔、埋葬獣骨を除けば、貝塚に伴うものと考えてよからう。

竹の下貝塚は、調査地点が末端部の二次堆積貝層であった。出土した遺物は少ないが、種別としては縄文土器、弥生土器、須恵器、骨角器、自然遺物が出土した。土器類は、貝層及びその上部の包含層から出土している。包含層からは弥生土器と須恵器が、貝層からは縄文土器と弥生土器が混在して出土し、いずれも原位置を止めているとは思えない。

貝塚の形成時期は、縄文期と弥生期の可能性が考えられる。弥生土器の出土量は84点で、縄文土器の21点よりはるかに多く、両者は正に混在状態であった。しかし、弥生土器の出土傾向は貝層上部の包含層に多いこと、上部の包含層において弥生土器と須恵器は混在するが、貝層部分では縄文土器と須恵器は混在しないこと、などから、貝塚の形成期は縄文期と推定される。

出土した縄文土器は量が少なく、小さな破片が多い。したがって、年代についても不確定な要素がある。七ツ江カキワラ貝塚出土の土器と大差はないが、ほぼ同時期、あるいはわずかに先行する要素があるが、中期にまでは遡らないものと考えられる。

#### 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚・大坪貝塚

昭和58年から60年の3ヵ年の間に、上記の3貝塚が相次いで発見された。従来、縄文期の資料に欠けていたこの地域にとって、絶好の資料といえることができる。大坪貝塚は阿高式、並木式土器を出土する中期の貝塚である。竹の下貝塚の位置づけがやや不明確ではあるが、下記の図式となる。

中 期	後期前半
大坪貝塚	七ツ江カキワラ貝塚
……竹の下貝塚	

#### 参 考 文 献

- 小林久雄「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』1-2 昭和10年  
乙益重隆「西北九州」『日本の考古学』II 昭和40年  
乙益重隆・前川威洋「九州」『新版考古学講座』3 昭和44年  
森 醇一郎「坂の下遺跡の研究」『佐賀県立博物館調査研究書』2 昭和50年  
富田紘一「旧石器・縄文時代の熊本」『新・熊本の歴史』1 昭和53年  
田中良之「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』6 昭和54年

## VII 専門調査の成果

1. 熊本県小川町七ツ江カキワラ貝塚出土の縄文時代人骨

松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二

2. 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚出土の植物遺体・魚骨

渡辺 誠

3. 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚出土の動物骨

西中川 駿

4. 七ツ江カキワラ貝塚の貝類

菊池泰二





# 熊本県小川町七ツ江カキワラ貝塚出土の 縄文時代人骨

松下孝幸\*・分部哲秋\*・中谷昭二\*

## はじめに

七ツ江カキワラ貝塚は、1983年に行われた圃場整備で発見された貝塚で、熊本県下益城郡小川町北部田字七ツ江に所在する。圃場整備の作業で地表一面に貝殻が露出し、人骨も検出されたので、1983年の10月から11月にかけて熊本県教育庁文化課によって発掘調査が行われた。

出土した人骨は後述しているように、縄文時代の後期に属する人骨である。熊本県では、著名な阿高貝塚や御領貝塚などから縄文時代人骨が出土しており、九州の中では縄文時代人骨の出土量が比較的多い県であるが、九州での縄文時代人骨の総括的研究が進んでおらず、従って、本県の九州での位置づけも明確になっていないのが現状である。

長崎大学医学部解剖学第二教室では、このように遅れている縄文時代人骨の研究を進展させるべく、現在出土人骨の整備とその資料化を急いでいるが、本例もこうした研究に欠かすことのできない貴重な資料となるものである。保存状態は必ずしも良好なものばかりではなかったが、人類学的観察や計測を行い、他地域の資料との比較検討を行ったので、その結果を報告したい。

表1 出土人骨一覧

人骨番号	性別	年齢	備考
1号人骨	男性	壮年	
2号人骨	女性	不明	排水路排土中
3号人骨	女性	壮年	排水路排土中
4号人骨	女性	壮年	排水路排土中
5号人骨	女性	不明	排水路排土中
6号人骨	男性	不明	排水路北壁
7号人骨	女性	不明	排水路南壁
8号人骨	女性	成年	排水路南壁

## 資 料

今回発掘および採集した人骨は表1に示すとおり、合計8体であるが、調査ができた人骨は1号人骨のみで、2号、3号、4号、5号の各人骨は排水路の排土中から検出したものであり、6号人骨は排水路北壁表面に、7・8号人骨は排水路南壁表面に露出していたのを採集したものである。

\* Takayuki Matsushita, Tetsuaki Wakebe, Shoji Nakatani,  
Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University  
(長崎大学医学部解剖学第二教室)

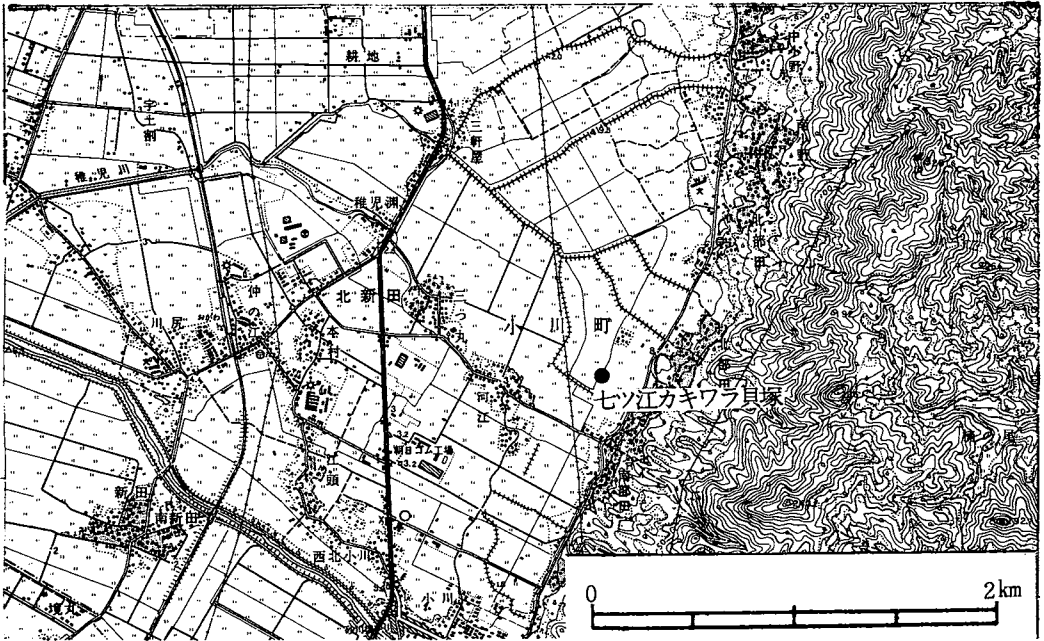
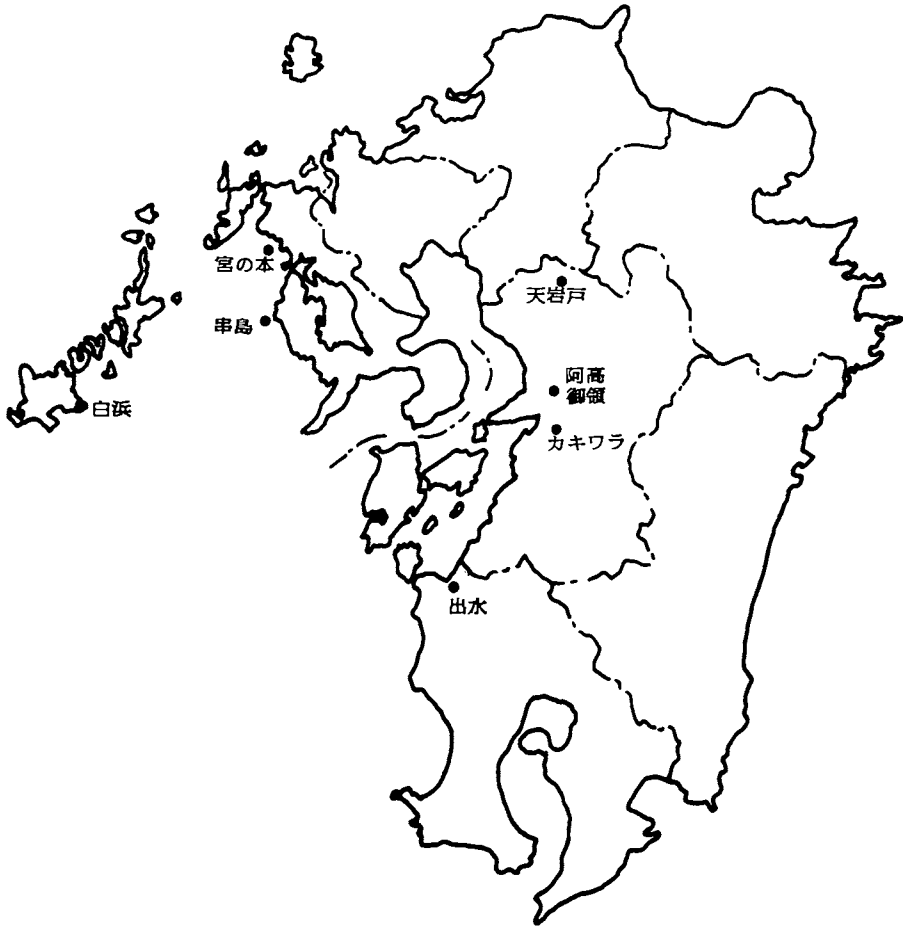


図1 セツ江カキワラ貝塚の位置

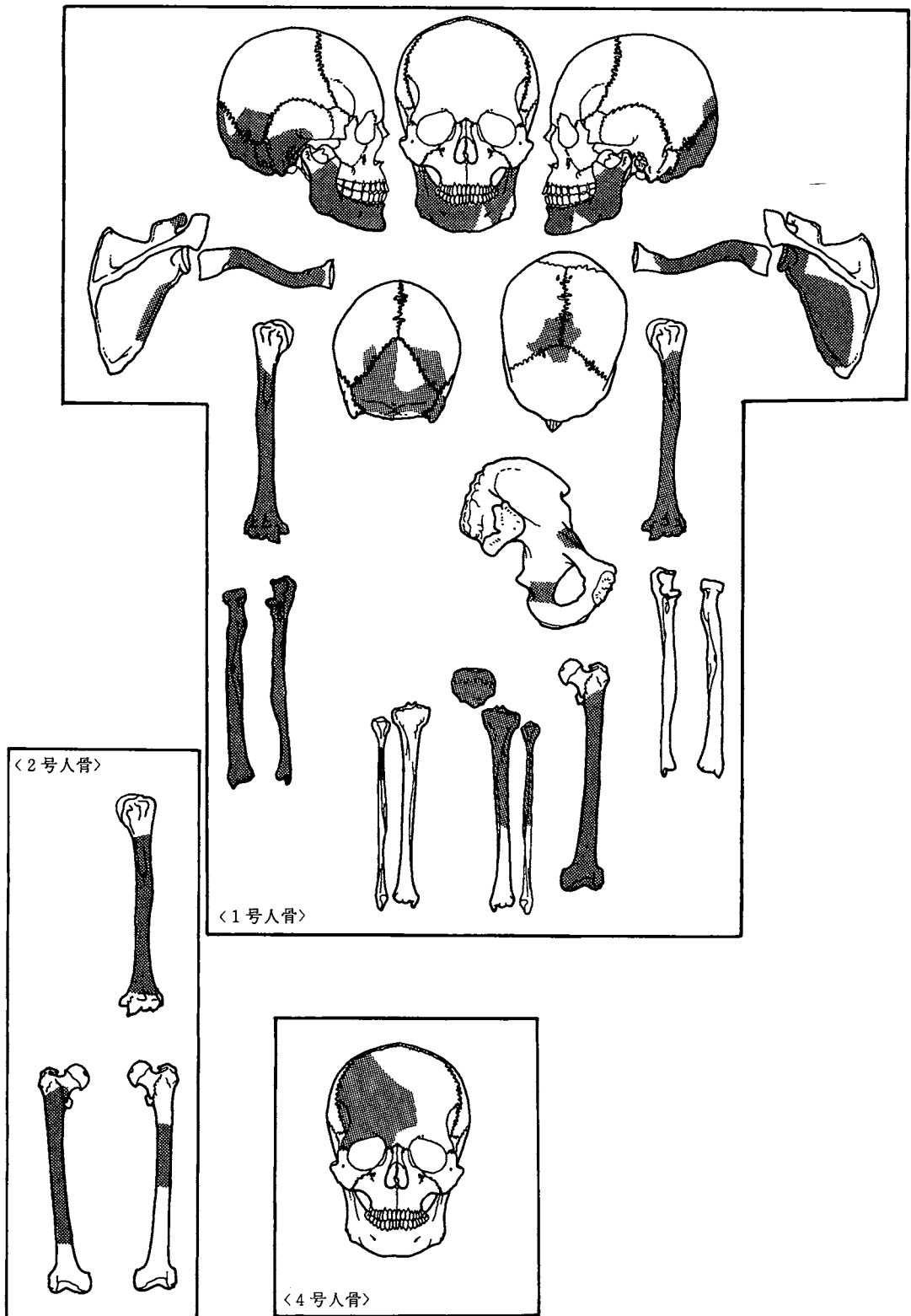


図2-A 人骨の残存状態 (アミかけの部分)  
 [椎骨、肋骨、手の骨、足の骨は略]

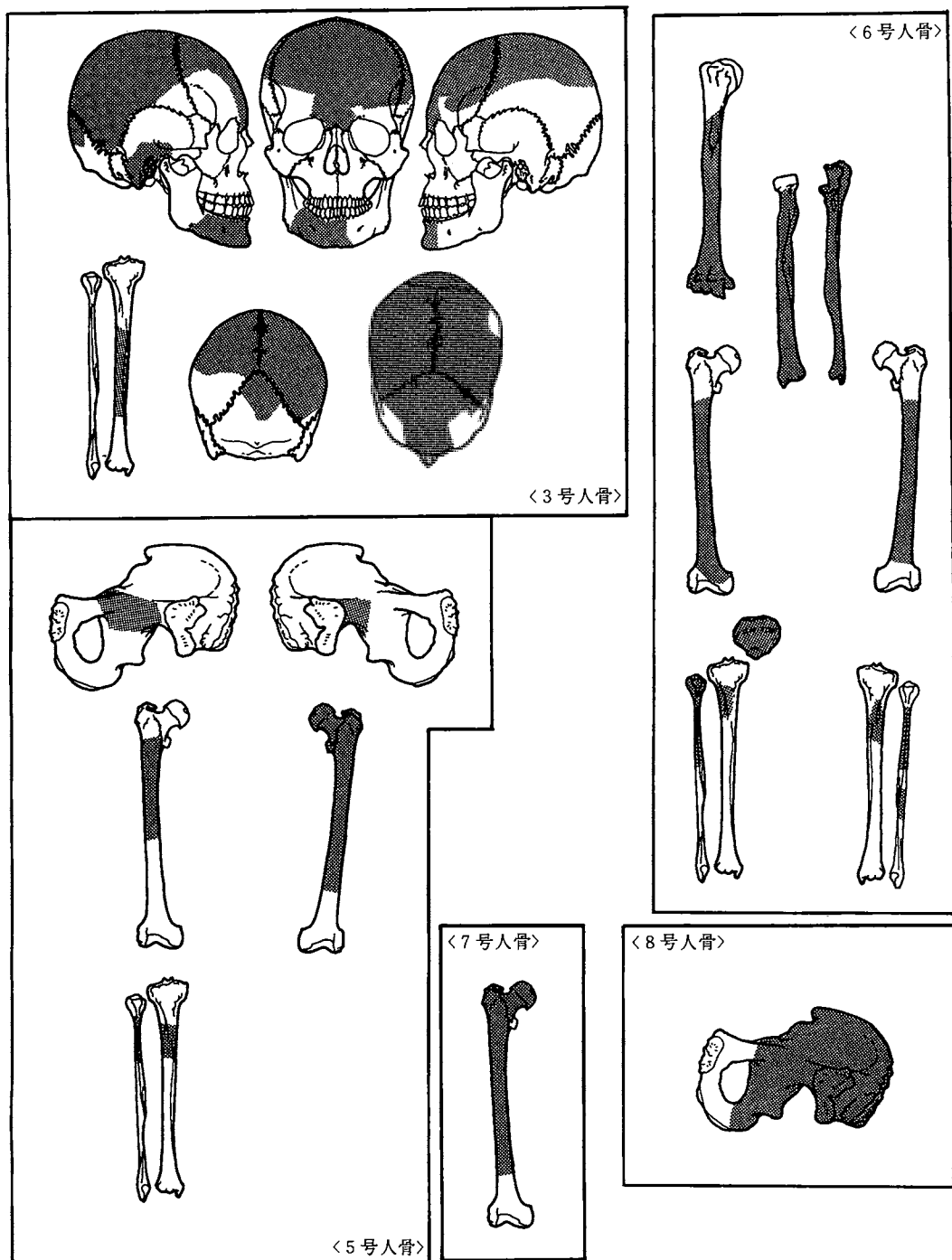


図 2 - B 人骨の残存状態(アミかけの部分)

表2 資料数

男性	女性	合計
2	6	8

この8体のうち、2体は男性骨で、残りの6体は女性骨である(表2)。

調査を行った1号人骨の残存量は少なく、頭蓋の一部、上肢骨、左側下肢骨および椎骨が残存していたにすぎないが、これらは埋葬されたままの状態を示しており、残存していた部分に関しては、攪乱された形跡はないようである。人骨の出土状態から、本例の埋葬姿勢は縄文時代としては珍しい伏臥であり、観察できた右側上肢は肘関節を約115度開き、左側下肢は膝関節を強屈していた。採集した人骨も含めて、残存量はそれほど多いものではないが、人骨はすべて堅牢なものである。各人骨の残存状態は図2に示すとおりである。

なお、1号人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より縄文時代後期に属する人骨であり、その他の人骨も遺跡の状態や人骨の出土状態から、1号人骨と同じ縄文時代後期に属するものと考えてよさそうである。

計測方法は、Martin-Saller (1957)によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。また、歯の計測は藤田(1949)の方法で行った。

比較資料としては、阿高(大森、1960a)、御領(金関、他、1955)、出水(大森、1960b)、白浜(松下、他、1980b)、串島(松下、他、1980a)、宮の本(松下、1981a)、津雲(清野、他、1928)の各縄文時代人骨のほかに大友弥生人(松下、1981b)を用いた。なお、阿高、御領縄文人は熊本県の、出水縄文人は鹿児島県の、白浜、串島、宮の本縄文人は長崎県の、津雲縄文人は岡山県の縄文時代人である。また、阿高、出水縄文人骨は縄文時代の中期に、御領、津雲縄文人骨は後期に、串島縄文人骨は後晩期に、白浜、宮の本縄文人骨は晩期に属する人骨である。

## 所 見

各人骨の計測値は文末に一括して示している。

### 1号人骨(男性、壮年)

残存していた部分は図2に示すとおりで、その量はあまり多くはない。

#### 1. 頭蓋

骨壁はそれほど厚いものではないが、乳様突起はやや大きく、外後頭隆起は強く発達しており、その尖端から約1cm上方には横走る溝が認められる。右側外耳孔の観察が可能であるが、骨腫は認められない。縫合は冠状、矢状縫合のそれぞれ一部とラムダ縫合が観察できたが、いずれも内外両板は開離している。

下顎骨もそれほど大きいものではないが、下顎角はやや外反している。また、両側とも第二臼歯のうしろにごく弱い骨隆起（下顎隆起）が認められる。

歯は、下顎については植立した状態で、上顎歯は遊離して残存していた。その残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

大臼歯の咬耗は強く、咬耗度は Broca の3度であるが、その他の歯は咬耗が著しく弱く、Broca の1ないし2度である。また、下顎に関しては風習的抜歯は認められない。

歯の計側値は表23に示すとおりである。

$\diagup$ M <sub>2</sub> / / / / / / / /	I <sub>1</sub> / / / P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> / M <sub>3</sub>
M <sub>3</sub> M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C O O	O O O P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> M <sub>3</sub>

$\diagup$ : 不明（破損）
○ : 歯槽開存

## 2. 四肢骨

### (1) 上肢骨

#### ① 鎖骨

諸径はそれほど大きくはないが、筋や靭帯の付着部の発達は良好である。

#### ② 上腕骨

諸径はやや小さいが、三角筋粗面の発達は良好である。

計測値は、中央最大径が24mm(右、左)、中央最小径は15mm(右)、16mm(左)で、骨体断面示数は62.50(右)、66.67(左)となり、骨体には強い扁平性が認められる。また、骨体最小周は61mm(右)、59mm(左)、中央周は69mm(右)、67mm(左)で、骨体は細い。

#### ③ 橈骨

右側のみが残存していたが、これは完全である。骨体は細いが、骨間縁は中央位よりやや上方で鋭く突出しており、骨体はほぼ中央区で「く」の字状に屈折している。

#### ④ 尺骨

右側のみが完全に残存している。骨体は細く、橈骨と同様に骨間縁は中央位よりやや上方で鋭く突出している。

### (2) 下肢骨

#### ① 大腿骨

近位部を欠如した左側が残存していた。諸径は小さい。粗線は幅広く、粗い。また、骨体の後方への発達は縄文人としては弱い。

計測値は骨体中央矢状径が27mm(左)、骨体中央横径は26mm(左)で、骨体中央断面数は103.85(左)である。骨体中央周は87mm(左)である。また上骨体断面示数は86.21(左)で、骨体上部の扁平性は弱い。

## ② 脛骨

左側の近位半が残存していた。骨体後面には鉛直線が認められ、骨体中央位での断面形はヘリチカのⅣ型を呈している。

計測値は、中央最大径が30mm(左)、中央横径は23mm(左)で、中央断面示数は74.29(左)となり骨体には扁平性は認められない。また、骨体周は83mm(左)で、骨体は細い。

## ③ 腓骨

骨体はやや太く、稜の発達はきわめて良好である。

## 3. 特殊所見

### ① 変形性関節症

左右の肘関節および左側の膝関節に、著しい骨増殖と関節面摩耗が認められる。右側上腕骨の上腕骨顆上方と遠位端の後面に著しい骨増殖が認められ、関節面は滑車および小頭の正面にかなり強い摩耗が認められる。また、左側尺骨の滑車切痕と左側橈骨頭にも下方に伸びる骨増殖が存在し、尺骨の滑車切痕の一部と橈骨頭の上面には摩耗の跡が認められる。一方、左側肘関節については、上腕骨だけしか残存していないが、やはり上腕骨顆上方に右側よりは弱い骨増殖が認められる。また、関節面の摩耗も認められるが、左側では、小頭と滑車の外側のみに認められる。

膝関節については、左側のみしか観察ができなかったが、大腿骨の関節面には骨縁堤が認められ、脛骨にも大腿骨よりは弱い骨縁堤が存在する。また、膝蓋骨にもかなり著名な骨縁堤が認められる。

そのほか、右側橈骨の手根関節面の一部と右側尺骨の関節環状面にも弱い骨縁堤が認められる。

### ② 変形性脊椎症

第1腰椎から第5腰椎に至るまでのすべての椎体に骨棘が認められ、特に第3、4腰椎は著しい。楔状椎は存在しない。

## 4. 推定身長値

右橈骨最大長から推定身長値を算出することができた。Pearsonの式からは156.25cm、藤井の式からは153.74cmとなり、いずれも低身長である。

## 5. 性別・年齢

性別は、外後頭隆起の発達が良好なことから、男性と推定した。年齢は三主縫合とも内外両板が開離していることから、壮年と考えられる。

## 2号人骨（女性、年齢不明）

残存していたのは、頭蓋片、上腕骨、大腿骨のみである。

### 1. 上腕骨

左側の骨体が残存していた。諸径はあまり大きくはないが、三角筋粗面の発達は良好である。計測値は、中央最大径が22mm(左)、中央最小径は17mm(左)で、骨体断面示数は77.27(左)となり、骨体の扁平性は弱い。また、骨体最小周は58mm(左)、中央周は64mm(左)である。

### 2. 大腿骨

左右とも骨体近位半が残存している。骨体は細いが、骨体は後方へ発達しており、骨体上部も扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が25mm(右)、26mm(左)、骨体中央横径は23mm(右)、24mm(左)で、骨体中央断面示数は108.70(右)、108.33(左)である。骨体中央周は75mm(右)、78mm(左)である。また上骨体断面示数は66.67(右)で、骨体上部の扁平性は強い。

### 3. 性別・年齢

性別は、四肢骨の径が小さいことから、女性と推定したが、年齢は不明である。

## 3号人骨（女性、壮年）

頭蓋冠、下顎骨、左右不明の大腿骨片、右側脛骨が残存していた。

### 1. 頭蓋

#### ①頭蓋冠

前頭骨はやや膨隆しており、眉上弓の隆起は弱い。外後頭隆起は観察できない。また、骨壁はあまり厚くない。縫合は単調で、三主縫合とも内外両板は分離している。

頭蓋最大長の計測が可能で、これは168mmである。最大幅は計測できないが、右側半分から推測できるので、算出してみると(72mm×2=144mm)となり、これから頭蓋長幅示数を算出してみると(85.71)となり、頭型としては過短頭に属しており、強い短頭性がうかがわれる。

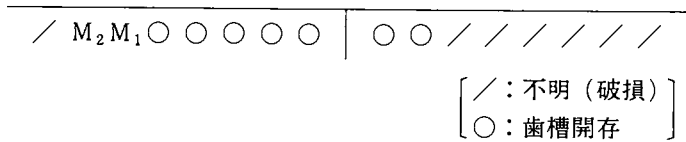
#### ②下顎骨

高径は低く、その他の径も小さい。

#### ③歯



下顎骨には歯が2本釘植していた。この歯と歯槽の状態を歯式で示すと次の通りである。



咬耗は弱く、咬耗度は Broca の1度である。また、下顎の残存していた部分に関しては風習的抜歯は認められない。

歯の計測値は表23に示すとおりである。

## 2. 脛骨

右側の骨体が残存していた。骨体の径は著しく小さい。骨体中央位での断面形はへりチカのV型を呈している。

計測値は、中央最大径が22mm(右)、中央横径は16mm(右)で、中央断面示数は72.73(右)となり骨体には扁平性は認められない。また、骨体周は62mm(右)、最小周は57mm(右)で、骨体は細い。

## 3. 性別・年齢

性別は、前頭骨が膨隆しており、眉上弓の隆起も弱いことから、女性と推定した。年齢は縫合が内外両板とも開離していることから壮年と考えられる。

### 4号人骨 (女性、壮年)

前頭骨の右側半が残存していたにすぎない。眉上弓の隆起はきわめて弱い。このことから性別は女性と推定した。冠状縫合の右側半が観察できたが、これはおそらく内外両板とも開離していたものと考えられるので、年齢をこの縫合の状態だけから推定するとすれば、壮年と考えられる。

### 5号人骨 (女性、年齢不明)

寛骨の一部、大腿骨、脛骨片、腓骨が残存していた。

## 1. 大腿骨

骨体や大腿骨頭の径は小さく、骨体の後方への発達は著しく悪いが、骨体上部はやや扁平で

ある。また、左側には明瞭な第三転子が認められる。

計測値は、骨体中央矢状径が22mm(右、左)、骨体中央横径は24mm(右)、26mm(左)で、骨体中央断面示数は91.67(右)、84.62(左)である。骨体中央周は76mm(右)、77mm(左)で骨体は細い。また上骨体断面示数は77.78(右)、68.97(左)で、骨体上部は扁平である。

## 2. 腓骨

右側骨体近位部が残存していたにすぎない。骨体は扁平で、稜は鋭い。

## 3. 性別・年齢

性別は、大腿骨などの径が小さいことから、女性と推定したが、年齢は不明である。

## 6号人骨（男性、年齢不明）

上腕骨、橈骨、尺骨、膝蓋骨、大腿骨、脛骨、腓骨および椎骨が残存していた。

### 1. 上肢骨

#### ①上腕骨

近位端を欠損した右側が残存していた。径は大きくないが、三角筋粗面の発達は比較的良好である。

計測値は、中央最大径が22mm(右)、中央最小径は17mm(右)で、骨体断面示数は77.27(右)となり、扁平性は弱い。また、骨体最小周は59mm(右)、中央周は64mm(右)で、骨体は細い。

#### ②橈骨

右側のみが残存していた。橈骨頭を欠損しているが、その他は完全である。骨体は細いが、骨間縁は中央位よりやや上方にかけて大きく突出している。

#### ③尺骨

ほぼ完全な右側が残存していた。骨体は細く、骨間縁の発達も悪い。

### 2. 下肢骨

#### ①大腿骨

両側とも骨体が残存していた。径は小さいが、粗線の発達は良好で、骨体上部は扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が26mm(右)、27mm(左)、骨体中央横径は25mm(右、左)で、骨体中央断面示数は104.00(右)、108.00(左)である。骨体中央周は83mm(右、左)である。また上骨体断面示数は67.74(右)、70.97(左)で、骨体上部の扁平性は強い。

## ② 脛骨

左側骨体について、一部の計測や観察が可能であった。径は小さく、ヒラメ筋線の発達は悪い。

## ③ 腓骨

径は小さいが、骨体は扁平で、稜の発達も良好である。

### 3. 特殊所見—変形性脊椎症—

腰椎2個を採集した。おそらく下部腰椎と考えられる。このうちの1個の椎体上面には著しく発達した骨棘が認められる。

### 4. 性別・年齢

性別は、各骨の径は小さいもの、筋付着部の発達が良好なことや他の人骨と比較し、検討した結果、男性と推定した。年齢は不明である。

### 7号人骨（女性、年齢不明）

右側大腿骨のみである。

#### 1. 大腿骨

遠位端を欠いているが、その他はほぼ完全である。骨体や大腿骨頭の径は小さく、骨体の後方への発達も著しく悪く、骨体は丸いが、骨体上部は扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が20mm(右)、骨体中央横径は22mm(右)で、骨体中央断面示数は90.91(右)である。骨体中央周は68mm(右)で、骨体は細い。また上骨体断面示数は66.67(右)で、骨体上部には強い扁平性が認められる。

#### 2. 性別・年齢

性別は、大腿骨の径が小さいことから、女性と推定したが、年齢は不明である。

### 8号人骨（女性、成年）

恥骨を欠損した右側寛骨のみである。

#### 1. 寛骨

径はやや小さく、大坐骨切痕の角度は大きく、耳状面前溝はやや深い。このことから女性の寛骨と推定した。また、径は成人とほぼ大差ないが、腸骨稜はまだ骨端が遊離しており、このことから年齢は成年と推測した。

# 考 察

頭蓋は保存状態が著しく悪かったので、四肢骨について検討してみたい。

## 1. 男性

### (1) 上肢骨

#### ① 上腕骨

計測ができた2体の平均値を算出して、他の資料と比較してみた。表3に示しているとおり、本例はすべての計測項目にわたって、御領、阿高、白浜、津雲縄文人よりも小さく、また大友弥生人よりも小さい。今回比較に用いた資料の中では宮の本縄文人に比較的近く、骨体の細いことがうかがわれる。また、骨体断面示数は白浜縄文人よりは大きい、その他の資料よりは小さく、骨体の扁平性はかなり強い。すなわち、本縄文人の男性上腕骨は骨体の径が著しく小さく、同時に扁平性が強いものである。

表3 上腕骨計測値 (男性、右、mm)

	カキワラ 縄文人		御領 縄文人 (金関、他)		阿高 縄文人 (大森)		白浜 縄文人 (松下、他)		宮の本 縄文人(左) (松下)		津雲 縄文人 (清野、他)		大友 弥生人 (松下)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
5. 中央最大径	2	23.00	3	25.50	14	24.86	1	27	1	22	20	23.9	37	24.46
6. 中央最小径	2	16.00	3	19.00	14	18.43	1	17	1	16	20	17.5	37	17.97
7. 骨体最小周	2	60.00	3	73.33	15	67.87	1	63	1	61	20	65.2	37	64.57
7(a). 中央周	2	66.50	3	72.33	—	—	1	73	1	64	19	69.7	35	71.00
6/5 骨体断面示数	2	69.89	3	74.47	14	74.23	1	62.96	1	72.73	20	72.7	37	73.60

表4 橈骨計測値 (男性、右、mm)

	カキワラ 縄文人		御領 縄文人 (金関、他)		出水 縄文人(左) (大森、他)		白浜 縄文人 (松下、他)		串島 縄文人 (松下、他)		津雲 縄文人 (清野、他)		大友 弥生人 (松下)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 最大長	1	215	1	255.0	—	—	1	228	1	230	12	235.2	11	233.82
3. 最小周	1	40	2	45.50 (左)	1	35	1	42	1	46	19	44.5	23	44.39
4. 骨体横径	2	17.00	2	17.50 (左)	1	15	1	16	1	17	20	17.2	29	17.31
4a. 骨体中央横径	2	15.50	—	—	—	—	1	16	1	16	—	—	30	16.80
5. 骨体矢状径	2	11.50	3	12.83	1	10	1	11	1	13	20	11.8	29	12.24
5a. 骨体中央矢状径	2	11.50	—	—	1	10	1	11	1	13	—	—	30	12.53
5(5). 骨体中央周	2	43.50	—	—	1	40	1	42	1	46	—	—	29	46.35
3/2 長厚示数	1	20.20	1	20.7	—	—	1	19.63	1	21.10	12	20.5	12	20.42
5/4 骨体断面示数	2	67.65	3	72.93	1	66.67	1	68.75	1	76.47	20	69.2	29	71.03
5a/4a 中央断面示数	2	74.38	—	—	—	—	1	68.75	1	81.25	—	—	30	74.86

## ② 橈骨

表4で、まず最大長を比較してみると、いずれの資料よりも著しく短いことがわかる。ついで、骨体の径をみてみると、出水縄文人よりは大きい、御領、串島縄文人および大友弥生人よりは小さく、比較的白浜、津雲縄文人に近い。すなわち、男性橈骨は長さも短く、また骨体も細いものである。

## ③ 尺骨

まず、最大長をみてみると(表5)、やはりどの資料よりも短い、比較的白浜縄文人の値に近い。骨体の径は比較的白浜縄文人に近く、あまり大きなものではない。また、断面示数は他の資料よりも大きく、扁平性はきわめて弱い。

表5 尺骨計測値 (男性、右、mm)

	カキワラ 縄文人		御領 縄文人 (金関、他)		出水 縄文人 (大森、他)		白浜 縄文人 (松下、他)		津雲 縄文人 (清野、他)		大友 弥生人 (松下)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
	1. 最大長	2	241.00	2	245.25(左)	—	—	1	243	13	252.5	7
3. 最小周	2	34.50	2	39.50	1	34(左)	1	35	18	39.3	21	37.62
11. 尺骨矢状径	2	14.00	2	13.75	1	16	1	14*	22	14.2	27	14.70
12. 尺骨横径	2	15.50	2	16.75	1	11	1	15	22	16.3	27	17.04
S 中央最小径	2	13.00	—	—	—	—	1	12	—	—	27	13.07
L 中央最大径	2	15.50	—	—	—	—	1	16	—	—	27	17.70
C 中央周	2	47.50	—	—	—	—	1	45	—	—	—	—
3/2 長厚示数	2	16.58	1	19.0(左)	—	—	1	16.20	14	17.8	12	16.77
11/12 骨体断面示数	2	90.42	2	81.95	1	68.75	1	93.33*	22	87.3	27	86.44
S/L 中央断面示数	2	83.96	—	—	—	—	1	75.00	—	—	27	74.25

※報告書の値を訂正

## (2) 下肢骨

### ① 大腿骨

骨体中央周で、骨体の太さをみてみると(表6)、宮の本、阿高縄文人よりも小さく、出水、白浜、津雲縄文人よりも大きく、比較的御領縄文人、大友弥生人に近い。骨体中央断面示数は御領、宮の本縄文人よりは大きい、阿高、白浜縄文人および大友弥生人よりは小さく、出水、津雲縄文人に近い値である。また、上骨体断面示数は阿高、津雲、宮の本縄文人および大友弥生人よりも小さく、御領、白浜縄文人よりも大きい。

ここに資料として用いた縄文人のうち、骨体が最も太いのは宮の本縄文人で、次いで阿高、御領、カキワラ、津雲、白浜縄文人の順で、最も細いのが出水縄文人である。すなわち、同じ縄文人でも骨体が太いものと細いものが存在し、本例は細い群に属している。また、骨体中央断面示数が大きく、粗線や骨体両側面の後方への発達が最も良好なものは、阿高縄文人で、次いで白浜、津雲、カキワラ、出水、宮の本の順で、御領縄文人が最も発達が悪い。一方、骨体

表6 大腿骨計測値（男性、右、mm）

	カキワラ		御領		阿高		出水		白浜		津雲		宮の本		大友	
	縄文人(左)		縄文人		縄文人		縄文人		縄文人		縄文人		縄文人		弥生人	
	n	M	(金関、他)	(大森)	(大森、他)	(松下、他)	(平井、他)	(松下)	(松下)	(松下)	n	M	n	M	(松下)	(松下)
6. 骨体中央矢状径	2	27.00	2	27.50	15	30.07	1	24	1	26	30	27.3	1	29	41	28.85
7. 骨体中央横径	2	25.50	2	27.25	15	25.60	1	25	1	24	30	25.2	1	28	41	26.07
8. 骨体中央周	2	85.00	2	86.00	15	88.73	1	78	1	80	30	83.1	1	90	41	87.22
9. 骨体上横径	2	30.00	2	41.25	15	30.53	1	21	1	29	30	29.2	1	30	42	30.62
10. 骨体上矢状径	2	23.50	2	30.00	15	25.53	1	28	1	22	30	25.2	1	25	42	24.83
6/7 骨体中央断面示数	2	105.93	2	100.85	15	117.58	1	104.17	1	108.33	30	107.8	1	103.57	41	111.72
10/9 上骨体断面示数	2	78.59	2	72.65	15	83.17	1	133.33	1	75.86	30	86.3	1	83.33	42	81.34

上部の扁平性は御領縄文人が最も強く、次いで白浜、カキワラ縄文人の順で、その他は扁平性は強くはない。出水縄文人の場合は横径と矢状径の値が逆ではないかと考えられるので、計算しなおしてみると、白浜縄文人に近くなり、これもかなり扁平である。

② 脛骨

大腿骨の場合と同じように、まず骨体周で骨体の太さを検討してみると(表7)、阿高、宮の本縄文人よりも小さく、出水、津雲、白浜縄文人よりは大きく、大友弥生人の平均値にきわめて近い。中央断面示数は阿高、津雲、白浜、宮の本縄文人および大友弥生人よりは大きく、比較的御領、出水縄文人に近い。

すなわち、脛骨も骨体が太いものと細いものが存在し、本例は後者に属している。また、骨体の扁平性については、宮の本縄文人にやや扁平性が認められるが、それ以外については扁平性は認められない。

表7 脛骨計測値（男性、右、mm）

	カキワラ		御領		阿高		出水		津雲		白浜		宮の本		大友	
	縄文人(左)		縄文人		縄文人		縄文人		縄文人		縄文人		縄文人		弥生人	
	n	M	(金関、他)	(大森)	(大森、他)	(平井、他)	(松下、他)	(松下)	(松下)	(松下)	n	M	n	M	(松下)	(松下)
8. 中央最大径	1	30	2	30.00	9	31.33	1	25	30	28.5	1	28	1	31	31	31.26
8a. 栄養孔位最大径	2	34.00	—	—	8	34.88	—	—	30	32.8	1	31	1	36	30	34.63
9. 中央横径	1	23	2	22.50	9	22.00	1	19	30	21.0	1	20	1	21	38	21.29
9a. 栄養孔位横径	2	24.00	—	—	8	23.88	—	—	30	23.8	1	21	1	22	32	23.22
10. 骨体周	1	83	—	—	10	86.20	1	70	30	78.7	1	75	1	85	34	82.85
10a. 栄養孔位周	2	91.00	—	—	—	—	1	77	30	89.3	1	82	1	95	30	92.00
10b. 最小周	—	—	2	77.50	—	—	1	62	30	71.9	1	69	1	78	34	75.35
9/8 中央断面示数	1	76.67	2	75.05	9	70.39	1	76.00	30	74.2	1	71.43	1	67.74	34	68.03
9a/8a 栄養孔位断面示数	2	70.48	—	—	8	68.88	—	—	30	72.5	1	67.74	1	61.11	30	67.16

### ③ 腓骨

中央周は出水、津雲縄文人より大きい、御領縄文人よりは小さい。中央断面示数は出水、津雲縄文人より小さい、御領縄文人よりは大きい。

すなわち、出水、津雲縄文人は骨体が細く、同時に骨体は扁平ではないが、御領縄文人は骨体が太く、かつ扁平であり、本例は骨体は細くて扁平である（表8）。

表8 腓骨計測値（男性、右、mm）

	カキワラ 縄文人		御領 縄文人 (金関、他)		出水 縄文人 (大森、他)		津雲 縄文人 (平井、他)	
	n	M	n	M	n	M	n	M
	2. 中央最大径	2	16.00	2	17.00	1	12	30
3. 中央最小径	2	10.50	2	11.00	1	10	30	10.3
4. 中央周	2	45.00	2	51.25	1	39	30	41.5
4a. 最小周	1	32	2	40.50	1	31	30	35.0
3/2 中央断面示数	2	66.08	2	64.60	1	83.33	30	74.1

### (3) 推定身長値

Pearson の式を用いて右橈骨最大長から算出した男性の推定身長値を比較してみた(表9)。御領、白浜、串島、津雲縄文人はいずれも160cmを超えているが、本例の1例の推定値は156.25

表9 推定身長値（男性、cm）\*

カキワラ 縄文人		御領 縄文人		白浜 縄文人		串島 縄文人		津雲 縄文人	
n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	156.25	1	169.34	1	160.50	1	161.16	12	162.96

\* 右橈骨最大長から Pearson の式を用いて算出

cmで、160cmを大きく下回っている。古人骨の場合は橈骨から算出した推定値は、大腿骨から算出した値よりも大きくなる傾向があり、この点を考慮すると、本例の身長値はかなり低いことが考えられる。

## 2. 女性

### (1) 上肢骨

#### ① 上腕骨

表10で、骨体最小周と中央周をみると、御領縄文人の値がとびぬけて大きく、その他はいずれも小さい。この小さいグループの中では天岩戸、出水縄文人がひととき小さいが、本例はこれほどではなく、比較的阿高縄文人および大友弥生人の平均値に近い。一方、骨体断面示数については、津雲、天岩戸、出水縄文人、大友弥生人が示数値の小さな集団を形成し、本例と阿高縄文人とが大きな集団を形成する。

すなわち、女性上腕骨の骨体の径はそれ程小さいものではなく、扁平性は男性の場合とは異

表10 上腕骨計測値 (女性、右、mm)

	カキワラ		御 領		阿 高		天岩戸		出 水		津 雲		大 友	
	縄文人(左)		縄文人(左)		縄文人		縄文人		縄文人(左)		縄文人		弥生人	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
5. 中央最大径	1	22	—	—	7	21.29	1	20	2	20.00	25	20.4	25	21.68
6. 中央最小径	1	17	1	19.0	7	16.43	1	14	2	14.00	25	14.3	25	15.48
7. 骨体最小周	1	58	1	72.0	7	59.43	1	53	1	54	23	55.3	20	57.65
7(a) 中央周	1	64	1	69.0	—	—	—	—	1	56	25	58.6	23	61.96
6/5 骨体断面示数	1	77.27	—	—	7	77.43	1	70.00	2	70.71	25	69.0	25	71.53

なり、認められない。

(2) 下肢骨

① 大腿骨

骨体中央周で、骨体の太さをみてみると(表11)、80mmを超えるものとそれ以下の2群に大別することができる。すなわち、本例と津雲縄文人は骨体が細く、御領、阿高、出水縄文人と大友弥生人は骨体が太い。骨体断面示数は、本例のみが100以下であり、粗線や骨体両側面の後方への発達が縄文人としては著しく悪いことを物語っている。また、阿高、出水、津雲縄文人については、骨体上部の扁平性は弱い、本例や御領縄文人には強い扁平性が認められる。

すなわち、本例は骨体が細く、粗線や骨体両側面の発達は著しく悪いものであるが、骨体上部は著しく扁平である。

表11 大腿骨主要計測値 (女性、右、mm)

	カキワラ		御 領		阿 高		出 水		津 雲		大 友	
	縄文人		縄文人		縄文人		縄文人		縄文人		弥生人	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6. 骨体中央矢状径	3	22.33	1	26.5	18	27.17	2	28.00	20	23.5	30	26.00
7. 骨体中央横径	3	23.00	1	24.5	18	25.44	2	24.00	20	23.2	30	25.03
8. 骨体中央周	3	73.00	1	80.00	19	82.74	1	81	20	74.7	28	80.32
9. 骨体上横径	3	28.00	1	30.5	17	29.77	2	25.05	20	27.3	32	29.06
10. 骨体上矢状径	3	19.67	1	21.0	17	23.71	2	25.50	20	22.3	32	22.75
6/7 骨体中央断面示数	3	97.09	1	108.2	18	107.33	2	116.67	20	102.3	30	104.05
10/9 上骨体断面示数	3	70.37	1	68.9	16	79.24	2	102.75	20	82.0	32	78.42



## ② 脛骨

骨体周および最小周は比較に用いたいずれの資料よりも著しく小さく(表12)、骨体はきわめて細い。中央断面示数は小さいもの(御領、阿高)と大きいもの(津雲)とが存在し、本例は後者に属し、骨体は扁平ではない。

すなわち、本例は骨体が著しく細く、扁平性は認められないものである。

表12 脛骨計測値(女性、右、mm)

	カキワラ 縄文人		御領 縄文人 (金関、他)		阿高 縄文人 (大森)		津雲 縄文人 (平井、他)		大友 弥生人 (松下)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
8. 中央最大径	1	22	1	28.0	7	29.29	20	23.9	27	27.26
9. 中央横径	1	16	1	17.5	8	19.88	20	18.7	29	19.48
10. 骨体周	1	62	1	—	8	79.63	20	67.9	27	74.74
10b. 最小周	1	57	1	69.0		—	20	61.7	23	68.17
9/8 中央断面示数	1	72.73	1	62.5	7	68.88	20	78.0	27	71.79

### 3. 四肢骨全体の検討

四肢骨については、それぞれ骨ごとにその特徴を検討してきたが、ここでは、骨体の太さについて、四肢骨相互の関係を各遺跡ごとに検討してみることにしたい。

各骨について検討していく過程で、骨体の大きさに大小関係が存在することがわかってきたが、それを整理してみると、次の4つの型に分類することができた。①上肢骨も下肢骨もともに太くて頑丈である。②上肢骨は細く、下肢骨は太い。③上肢骨は太いが、下肢骨は細い。④上肢骨も下肢骨もともに細くて小さい。

本来は上肢骨全体と下肢骨全体の関係を検討すべきであるが、橈骨、尺骨、腓骨などの計測値が揃っていないので、今回は上腕骨に上肢骨を代表させ、大腿骨に下肢骨を代表させた。それぞれの縄文人が上記のどの型に入るのかをはっきりさせるため、横軸に上腕骨の骨体最小周と中央周との平均値をとり、縦軸に大腿骨の中央周をとって、この上腕骨と大腿骨の両方の資料が揃っている、カキワラ、御領、阿高、白浜、宮の本、津雲縄文人を入れていき、さらに(65、86)の点へ原点を移動してみると、図3が得られる。横軸に、上腕骨の骨体最小周と中央周との平均値をとったのは、両者の値に大きな差がある場合があるからで、上腕骨の骨体の太さの基準を今回は両者の平均値で表した。

この図と上記4つの型および各縄文人との関係は、次のとおりである。

I = ①上肢骨も下肢骨もともに太くて頑丈である。 = 阿高、御領

II = ②上肢骨は細く、下肢骨は太い。 = 宮の本

III = ④上肢骨も下肢骨もともに細くて小さい。 = カキワラ

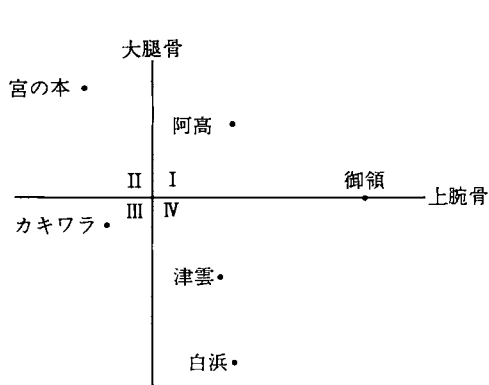


図3 大腿骨と上腕骨の骨体の太さ（男性）

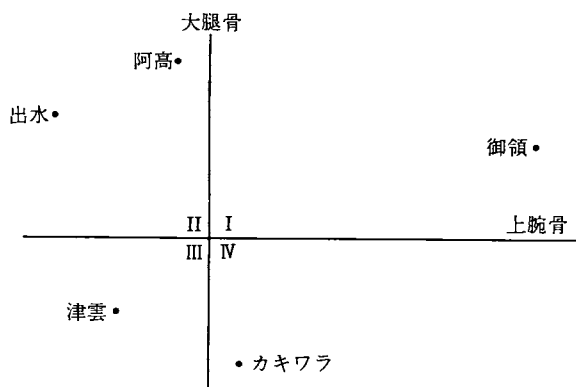


図4 大腿骨と上腕骨の骨体の太さ（女性）

IV=③上肢骨は太いが、下肢骨は細い。 = 白浜、津雲

すなわち、上肢骨も下肢骨もともに太くて頑丈なのは、阿高、御領縄文人で、特に阿高縄文人は大きい。これと全く対照的に上肢骨も下肢骨もともに細くて小さいのが本例、すなわちカキワラ縄文人である。

一方、女性についても男性と同じようにして検討したが、女性の場合は原点を（60、77）にした。図4に示すように、

I=御領。II=阿高、出水。III=津雲。IV=カキワラ。

となり、御領縄文人は男女とも上肢骨、下肢骨とも太くて頑丈であるが、これ以外の縄文人は男女のあいだで多少の差が認められる。ただ、大腿骨の中央周については男女とも同じ傾向が認められ、阿高縄文人の骨体は男女とも太いが、カキワラ、津雲縄文人は男女とも細い傾向を示しているようである。

今回は骨体の太さだけについて検討してみたが、九州の縄文時代人骨についてはまだ未報告資料を残しているので、これらの報告書が出揃ってから、骨体断面示数などについても検討してみるつもりである。

## 総括

熊本県下益城郡小川町北部田字七ツ江にある七ツ江カキワラ貝塚は、1983年に行われた圃場整備で見つかった貝塚で、1983年に発掘調査が行われ、縄文時代に属する埋葬人骨1体とその他に7体分の人骨を発掘・採集した。出土量の少ない九州では貴重な資料なので、人類学的観察や計測を行い、他地域の資料との比較検討を行った。その結果は次のように要約することができる。

1. 8体の人骨のうち、調査ができたのは1体のみで(1号人骨)、残りの7体は、排水路の排土中から検出したものや排水路の壁表面に露出していたのを採集したものである。この8体

のうち、2体は男性骨で、残りの6体は女性骨である。

なお、性別は1号人骨と3号人骨は頭蓋が、8号人骨は寛骨が残存していたので、これらについての性別は明らかであった。従って、他の人骨の性別については、これを男女の基準として推定した。

2. 1号人骨は縄文時代後期に属する人骨で、他の7体もほぼこの時期の縄文人骨と推測される。
3. 頭型を知ることができたのは、女性1例のみで、この女性頭蓋は強い短頭性を示した。
4. 男性の下顎骨（1例）に、ごく弱い下顎隆起が認められた。また観察できたものについては、外耳道骨腫は認められなかった。
5. 男性上腕骨は、骨体が細く、扁平性が強いものである。女性上腕骨の骨体はやや大きく、扁平性は認められない。
6. 男性大腿骨の骨体も細く、柱状形成は縄文人としてはあまり強いものではないが、骨体上部は扁平である。女性大腿骨の骨体も細いもので、粗線や骨体両側面の後方への発達は認められず、骨体の断面形は横広の楕円形を呈するが、骨体上部は著しく扁平である。
7. 脛骨は男女とも骨体は細く、扁平性は認められない。
8. 変形性関節症（1号人骨）と変形性脊椎症（1号人骨、6号人骨）とが認められた。
9. 本縄文人骨のうち男性の四肢骨は上・下両肢とも小さく、女性は下肢骨が著しく細いものであった。九州での縄文人の四肢骨を検討してみると、その骨体が太いものと細いものの両群が存在し、本例はその後者に属している。九州での縄文人骨の出土量は確かに多くはないが、それでもある程度の量は存在する。従って、これら未報告人骨の報告書が公にされるだけでも研究は進展するものと期待される。私達はこのような観点から未報告人骨の整備とその資料化を急ぎ、縄文時代人骨の研究を進めていくつもりである。

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育庁文化課の諸先生方ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

表13 脳頭蓋計測値 (mm)

		3号人骨 女性
1.	頭蓋最大長	168
8.	頭蓋最大幅	[144]*
8/1	頭蓋長幅示数	[ 85.71]
26.	正中矢状前頭弧長	113
27.	正中矢状頭頂弧長	127
29.	正中矢状前頭弦長	101
30.	正中矢状頭頂弦長	110
29/26	矢状前頭示数	89.38
30/27	矢状頭頂示数	86.61

\*72 × 2 = 144

表14 下顎骨計測値 (mm)

		3号人骨 女性
69.	オトガイ高	28
69(2).	下顎体高 (右)	27
	(左)	—
69(2)/69	下顎高示数 (右)	96.43
	(左)	—

表15 鎖骨計測値 (mm)

		1号人骨 男性	
		右	左
4.	中央垂直径	11	11
5.	中央矢状径	12	12
6.	中央周	39	39
4/5	鎖骨断面示数	91.67	91.67

表16 上腕骨計測値 (mm)

	1号人骨		6号人骨	平均				2号人骨	
	男性			男性	男 性		女性		
	右	左	右		左			左	
	n	M	n	M					
4.	下 端 幅	57	55	60	2	58.50	1	55	—
5.	中央最大径	24	24	22	2	23.00	1	24	22
6.	中央最小径	15	16	17	2	16.00	1	16	17
7.	骨体最小周	61	59	59	2	60.00	1	59	58
7(a).	中央周	69	67	64	2	66.50	1	67	64
11.	滑車幅	—	—	21	1	21	—	—	—
12.	小頭幅	—	—	17	1	17	—	—	—
12(a).	滑車幅および小頭幅	—	—	43	1	43	—	—	—
12(b).	小頭幅	—	—	22	1	22	—	—	—
13.	滑車深	—	—	26	1	26	—	—	—
14.	尺骨頭窩幅	—	—	25	1	25	—	—	—
15.	尺骨頭窩深	—	—	13	1	13	—	—	—
6/5	骨体断面示数	62.50	66.67	77.27	2	69.89	1	66.67	77.27

表17 橈骨計測值 (mm)

		1号人骨 男性 右	6号人骨 男性 右	平均 男性 右	
				n	M
				1.	最大長
1b.	平行長	212	—	1	212
2.	機能長	198	—	1	198
3.	最小周	40	—	1	40
4.	骨体横径	17	17	2	17.00
4a.	骨体中央横径	15	16	2	15.50
4(1).	小頭横径	23	—	1	23
4(2).	頸横径	13	—	1	13
5.	骨体矢状径	12	11	2	11.50
5a.	骨体中央矢状径	12	11	2	11.50
5(1).	小頭矢状径	23	—	1	23
5(2).	頸矢状径	14	—	1	14
5(3).	小頭周	75	—	1	75
5(4).	頸周	43	—	1	43
5(5).	骨体中央周	43	44	2	43.50
5(6).	骨下端幅	32	30	2	31.00
3/2	長厚示数	20.20	—	1	20.20
5/4	骨体断面示数	70.59	64.71	2	67.65
5a/4a	中央断面示数	80.00	68.75	2	74.38

表18 尺骨計測值 (mm)

		1号人骨 男性 右	6号人骨 男性 右	平均 男性 右	
				n	M
				1.	最大長
2.	機能長	203	214	2	208.50
2(1).	肘頭尺骨頭長	233	242	2	237.50
3.	最小周	36	33	2	34.50
6.	尺骨頭幅	—	24	1	24
6(1).	上幅	—	31	1	31
7.	肘頭深	—	26	1	26
7(1).	肘頭鈎状突起間距離	—	23	1	23
8.	肘頭高	—	21	1	21
9.	橈側關節面前幅	—	6	1	6
10.	橈側關節面後幅	—	12	1	12
11.	尺骨矢状径	14	14	2	14.00
12.	尺骨横径	16	15	2	15.50
S	中央最小径	13	13	2	13.00
L	中央最大径	16	15	2	15.50
C	中央周	48	47	2	47.50
3/2	長厚示数	17.73	15.42	2	16.58
11/12	骨体断面示数	87.50	93.33	2	90.42
S/L	中央断面示数	81.25	86.67	2	83.96

表19 大腿骨計測値 (mm)

	1号人骨 男性	6号人骨 男性	平均		2号人骨 女性	5号人骨 女性	7号人骨 女性	平均	
			男性					女性	
			n	M				n	M
6. 骨体中央矢状径 (右)	—	26	1	26	25	22	20	3	22.33
	(左)	27	27	2	27.00	26	22	—	2
7. 骨体中央横径 (右)	—	25	1	25	23	24	22	3	23.00
	(左)	26	25	2	25.50	24	26	—	2
8. 骨体中央周 (右)	—	83	1	83	75	76	68	3	73.00
	(左)	87	83	2	85.00	78	77	—	2
9. 骨体上横径 (右)	—	31	1	31	30	27	27	3	28.00
	(左)	29	31	2	30.00	—	29	—	1
10. 骨体上矢状径 (右)	—	21	1	21	20	21	18	3	19.67
	(左)	25	22	2	23.50	—	20	—	1
15. 頸垂直径 (右)	—	—	—	—	—	—	27	1	27
	(左)	—	—	—	—	—	28	—	1
16. 頸矢状径 (右)	—	—	—	—	—	—	20	1	20
	(左)	—	—	—	—	—	20	—	1
17. 頸周 (右)	—	—	—	—	—	—	80	1	80
	(左)	—	—	—	—	—	80	—	1
18. 頭垂直径 (右)	—	—	—	—	—	—	40	1	40
	(左)	—	—	—	—	—	39	—	1
19. 頭横径 (右)	—	—	—	—	—	—	40	1	40
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—
20. 頭周 (右)	—	—	—	—	—	—	129	1	129
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—
21. 上頸幅 (右)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(左)	79	—	1	79	—	—	—	—
6/7 骨体中央断面示数 (右)	—	104.00	1	104.00	108.70	91.67	90.91	3	97.09
	(左)	103.85	108.00	2	105.93	108.33	84.62	—	2
10/9 上骨体断面示数 (右)	—	67.74	1	67.74	66.67	77.78	66.67	3	70.37
	(左)	86.21	70.97	2	78.59	—	68.97	—	1
16/15 頸断面示数 (右)	—	—	—	—	—	—	74.07	1	74.07
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—
19/18 頭断面示数 (右)	—	—	—	—	—	—	100.00	1	100.00
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—

表20 脛骨計測値 (mm)

	1号人骨 男性 左	6号人骨 男性 左	平均 男性		3号人骨 女性 右
			n	M	
			3a. 上内関節面幅	32	
4a. 上内関節面深	47	—	1	47	—
8. 中央最大径	30	—	1	30	22
8a. 栄養孔位最大径	35	33	2	34.00	—
9. 中央横径	23	—	1	23	16
9a. 栄養孔位横径	26	22	2	24.00	—
10. 骨体周	83	—	1	83	62
10a. 栄養孔位周	95	87	2	91.00	—
10b. 最小周	—	—	—	—	57
9/8 中央断面示数	76.67	—	1	76.67	72.73
9a/8a 栄養孔位断面示数	74.29	66.67	2	70.48	—

表21 膝蓋骨計測値 (mm)

	1号人骨
	男性 左
1. 最大高	44
2. 最大幅	46
3. 最大厚	19
4. 関節面高	28
5. 内切面幅	23
6. 外切面幅	24
1/2 膝蓋骨高幅示数	95.65

表22 腓骨計測値 (mm)

	1号人骨		6号人骨	
	男性		男性	
	右	左	右	左
2. 中央最大径	15	16	17	—
3. 中央最小径	11	12	10	10
4. 中央周	45	46	45	—
4a. 最小周	—	41	32	31
4b. 頸横径	—	14	12	10
4c. 頸矢状径	—	12	10	11
4(1). 上端幅	—	—	27	—
4(1a). 上端矢状幅	—	—	23	—
3/2 中央断面示数	73.33	75.00	58.82	—

表23 歯の計測値 (mm)

	1号人骨	
	男性	
	近遠心径	頬(唇)舌径
上顎右側 M <sub>2</sub>	9.27	11.74
左側 I <sub>1</sub>	8.48	6.92
P <sub>2</sub>	6.77	9.53
M <sub>1</sub>	9.54	11.88
M <sub>3</sub>	8.77	11.36
下顎右側 C	6.79	8.12
P <sub>1</sub>	6.91	8.24
P <sub>2</sub>	7.02	8.25
M <sub>3</sub>	10.94	10.34
左側 P <sub>1</sub>	7.04	8.09
P <sub>2</sub>	6.91	8.39
M <sub>2</sub>	10.81	10.67
M <sub>3</sub>	10.59	9.87

	3号人骨	
	女性	
	近遠心径	頬(唇)舌径
下顎右側 M <sub>1</sub>	11.36	10.71
M <sub>2</sub>	10.70	9.77

表24 推定身長値 (cm)

	1号人骨 (男性)	
	Pearsonの式	藤井の式
橈骨 (右)	156.25	153.74

表25 四肢骨比

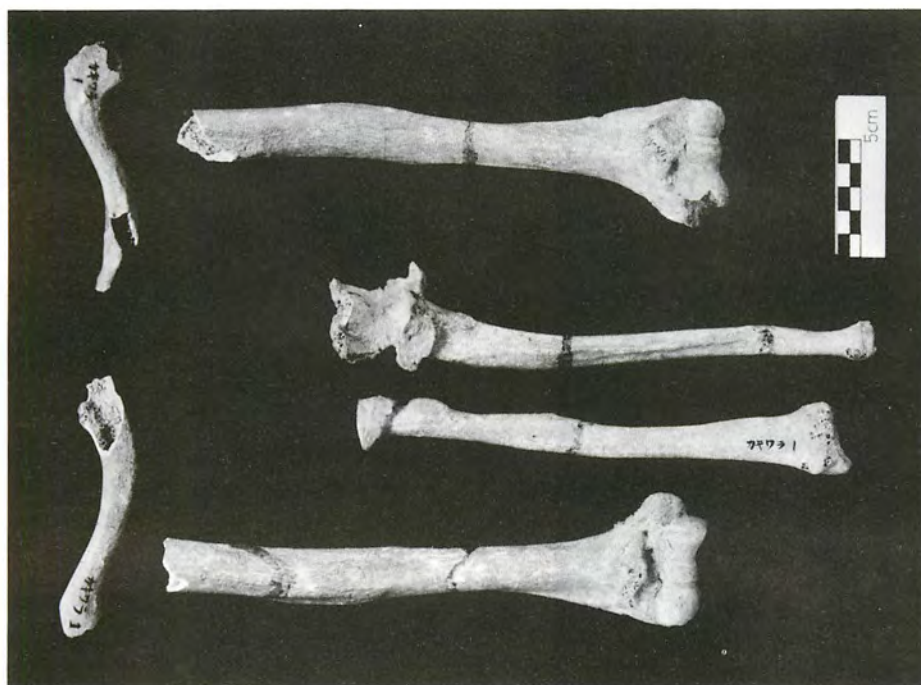
	1号人骨 男性	6号人骨 男性	平均		2号人骨 女性
			男性		
			n	M	
橈骨骨体中央周 / 尺骨中央周 (右)	89.58	93.62	2	91.60	—
	—	—	—	—	—
橈骨骨体中央周 / 上腕骨中央周 (右)	62.32	68.75	2	65.54	—
	—	—	—	—	—
鎖骨中央周 / 上腕骨中央周 (右)	56.52	—	1	56.52	—
	58.21	—	1	58.21	—
上腕骨中央周 / 大腿骨骨体中央周 (右)	—	77.11	1	77.11	—
	77.01	—	1	77.01	82.05
脛骨骨体周 / 大腿骨骨体中央周 (右)	—	—	—	—	—
	95.40	—	1	95.40	—
腓骨中央周 / 脛骨骨体周 (右)	—	—	—	—	—
	55.42	—	1	55.42	—

参 考 文 献

1. 藤田恒太郎、1949：歯の計測規準について。人類学雑誌、61：27-32。
2. 金関丈夫、他、1955：熊本県下益城郡豊田村御領貝塚発掘の人骨について。人類学研究、2：93-163。
3. 清野謙次、他、1926 a：津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第二部 頭蓋骨の研究（前編）。人類学雑誌、41：95-140。
4. 清野謙次、他、1926 b：津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第二部 頭蓋骨の研究（後編）。人類学雑誌、41：151-208。
5. 清野謙次、他、1928 a：津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第三部 上肢骨の研究。人類学雑誌、43、第3付録：179-301。
6. 清野謙次、他、1928 b：津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第四部 下肢骨の研究。其一大腿骨・膝蓋骨・脛骨及び腓骨に就いて。人類学雑誌、43、第4付録：303-390。
7. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bb.1. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart: 429-597。
8. 松野 茂、他、1967：肥後国上益城郡嘉島村六嘉かきわら貝塚出土人骨について。熊本医学会雑誌、41：



- 41-52。
9. 松下孝幸、他、1980 a : 串島遺跡出土の人骨。串島遺跡 (長崎県文化財調査報告書51) : 133-135。
  10. 松下孝幸、他、1980 b : 五島・白浜貝塚出土の縄文晩期人骨。白浜貝塚 (福江市文化財調査報告書2) : 120-133。
  11. 松下孝幸、1981 a : 宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡 (佐世保市埋蔵文化財調査報告書) : 110-113, 119, 147。
  12. 松下孝幸、1981 b : 佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡 (佐賀県呼子町文化財調査報告書第1集) : 223-253。
  13. 森本岩太郎、1971 : 脛骨の横断指数の算出をめぐる一Martin法への反省一。人類学雑誌、79 : 88-89。
  14. 内藤芳篤、他、1978 : 天岩戸岩陰遺跡出土の人骨について。菊池川流域文化財調査報告書 (熊本県文化財調査報告31) : 117-121。
  15. 岡本辰之輔、1929 : 肥後国下益城郡阿高貝塚人人骨の人類学的研究 (頭蓋骨に就いて) 第一報。人類学雑誌、44 (第一附録) : 1-26。
  16. 岡本辰之輔、1929 : 肥後国下益城郡阿高村西阿高貝塚人人骨の人類学的研究 (其の二、四肢骨について)。人類学雑誌、44 (第三附録) : 77-105。
  17. 大森浅吉、他、1957 : 阿高貝塚人の下顎骨について。鹿児島医学会雑誌、30 : 408-421。
  18. 大森浅吉、1960 a : 故南山大学教授中山英司博士により測定された阿高貝塚人骨の測定値。人類学研究、7 (附録) : 211-23。
  19. 大森浅吉、他、1960 b : 薩摩国出水貝塚出土 (昭和29年) の人骨について。鹿児島医学会雑誌、33 : 269-283。



1号人骨 (男性) 上肢骨



1号人骨 (男性) 下肢骨



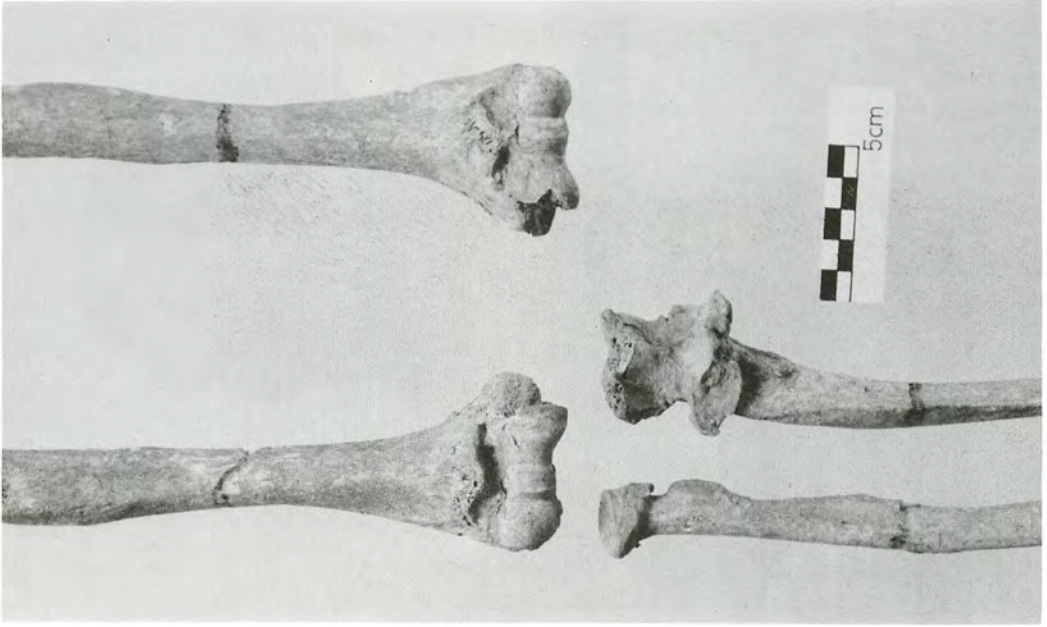
1号人骨（男性）下顎骨



1号人骨（男性）頭蓋（後頭骨）



1号人骨（男性）腰椎・变形性脊椎症



1号人骨(男性)肘関節・変形性関節症

図版 4



2号人骨（女性）



4号人骨（女性）前頭骨



3号人骨（女性）頭蓋上面



3号人骨（女性）



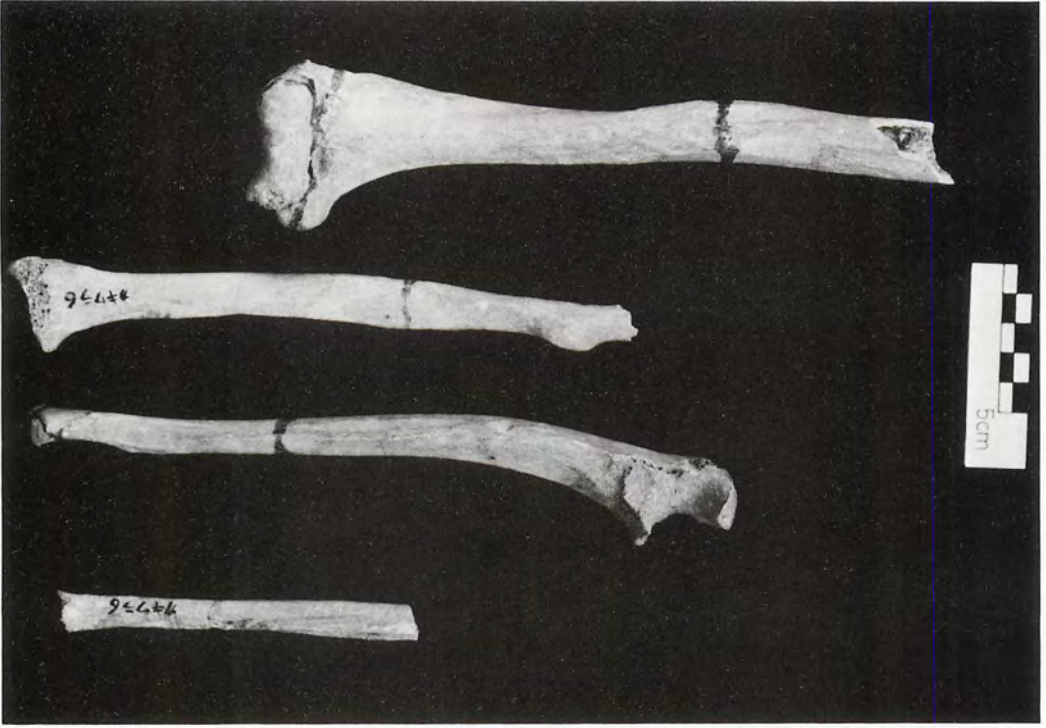
5号人骨 (女性)



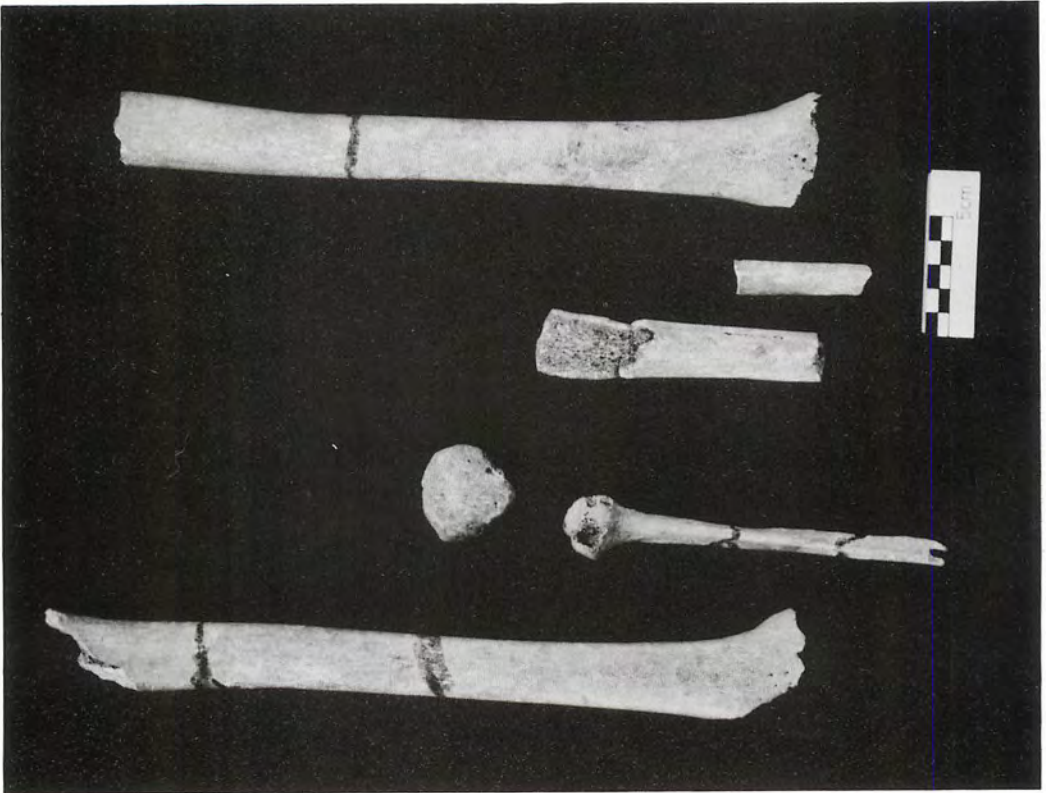
7号人骨 (女性)



8号人骨 (女性)



6号人骨(男性)上肢骨



6号人骨(男性)下肢骨





# 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚出土の 植物遺体・魚骨

渡 辺 誠

熊本県下益城郡小川町七ツ江カキワラ貝塚、および竹の下貝塚から検出された植物遺体(種子類)、魚骨の調査結果は、次のとおりである。

両貝塚ともは場整備事業の工事中に発見されたもので、応急的な調査によって得られた資料である。

七ツ江カキワラ貝塚の場合、資料のほとんどは排水路工事により掘削された貝層の水洗処理によって得られたものであるが、他時期の混入遺物は皆無に等しく、その所属時期は縄文時代後期前半と考えられている。

竹の下貝塚の場合は、貝塚末端部と考えられる二次堆積層部分の調査であるが、貝塚そのものは七ツ江カキワラ貝塚にやや先行する可能性があるものの、縄文時代後期前半と考えられている。

## 1. 七ツ江カキワラ貝塚出土の種子類

検出されたのは、いずれも炭化したブナ科コナラ属の種子の子葉、いわゆるドングリ類である。このうち幼根の溝によって種の同定の可能なのはイチイガシのみであるから、種子類のリストは次のようになる。

1. ブナ科コナラ属イチイガシ *Quercus gilva* Blume

2. ブナ科コナラ属 *Quercus* sp.

これらの出土数量を送付時のラベルごとにみてみると、次のとおりである。

「水路断面・あげ土、1983・10・26」 イチイガシ子葉片側1 (0.10g、写真1-1)。

「獣骨東排土、——」 イチイガシ破片2 (0.15g、同2)、およびコナラ属の破片少量 (1.22g、同3)。

「獣骨東排土、——」 コナラ属破片2 (0.10g、同4)。

「水路排土、——」 同破片1 (0.32g、同5)。

「木の实、——」 同破片1 (0.12g、同6)。

第1表 ドングリ類の分類

民俗分類	属		種	森林帯	他の堅果類
A. クヌギ類 アク抜き伝承の 途絶えたもの	コナラ亜属	コナラ属	クヌギ	落葉広葉 樹林帯 (東北日本)	オニグルミ クリ トチノキ
B. ナラ類 水さらし+加熱 処理			アベマキ		
C. カシ類 水さらしのみ	アカガシ亜属		ミズナラ	照葉樹 林帯 (西南日本)	
			コナラ		
	イチイガシ				
D. シイ類 アク抜き不用	シイノキ属	ツブラジイ・スダジイ			
	マテバシイ属	マテバシイ			

ドングリ類は、第1表のように分類される。イチイガシは、カシ類のなかでは例外的にアク抜きをせずに食用化できる種類である。本遺跡で出土しているコナラ属は、側面観が楕円形を呈し、A類やD類とはみなしがたいので、アク抜きを必要とするB・C類である可能性がきわめて強い。出土数量は少ないが、縄文時代の食生活の研究上貴重な資料である。

## 2. セツ江カキワラ貝塚出土の魚骨

検出された魚骨の種名は、次の7種である。他にカニ類と、不明種少量がある。

1. サメ類                      *Lamnida* sp.
2. エイ類                      *Rajida* sp.
3. イワシ科マイワシ      *Sardinops melanosticta* Temmink & Schlegel
4. ウナギ科ウナギ        *Anguilla japonica* Temmink & Schlegel
5. スズキ科スズキ        *Lateolabrax japonicus* Cuvier & Valenciennes
6. タイ科クロダイ        *Mylio macrocephalus* Basilewsky
7. カサゴ科カサゴ        *Sebastiscus marmoratus* Cuvier
8. カニ類

他に種不明の脊椎骨が3点検出されている。

検出された部位は、カニ類は爪のみ、クロダイは前上顎骨、スズキは主鰓蓋骨、種不明タイ類は、下顎歯骨・主鰓蓋骨を含むが、他はすべて脊椎骨のみである。これらの件別検出数量は第2表に示すとおりである。

脊椎骨でそれらの構成比をみてみると、51%をサメ類が占め、19%を占めるエイ類を加える

第2表 魚骨数量表

種名	部位	水路 南断面	獸骨 東排土	水路 排土	1号 人骨 付近	合 計	脊椎 骨合 計	同 %	写真 番号
サメ類	脊椎骨	9	19	40	11	79	79	50.97	写真1-7・8
エイ類	脊椎骨	1	13	13	3	30	30	19.35	同9
マイワシ	脊椎骨	—	—	—	6	6	6	3.87	同10
ウナギ	脊椎骨	1	—	—	—	1	1	0.65	同11
スズキ	主鰓蓋骨 l	—	—	—	2	2			
	脊椎骨	—	7	14	—	21	21	13.55	同12
クロダイ	前上顎骨 l	—	—	1	2	3			同13
	同 r	1	2	3	2	8			
タイ類	下顎歯骨 l	—	—	1	—	1			
	主鰓蓋骨 r	—	—	—	1	1			同14
	脊椎骨	2	4	6	2	14	14	9.03	同15
カサゴ	脊椎骨	—	1	—	—	1	1	0.65	同16
不明魚類	脊椎骨	—	2	1	—	3	3	1.94	
カニ類	爪	1	—	—	—	1			同17
合計		15	48	79	29	171	155	100.01	

と、70%が軟骨魚類で占められていることになる。絶対量が少ないとはいえ、軟骨魚類の比重がこれほど高い遺跡はなく、縄文時代の食生活を研究する上ではきわめて興味深い資料といえよう。

サメ類の脊椎骨はいずれも小型で、これ自体では種の同定は難しいが、トラザメやホシザメのような、小型のサメ類ではないかと推定される。

これらの他は、スズキ14%、タイ類9%、マイワシ4%、そしてウナギ・カサゴ各1%である。タイ類は、他の部位からみてクロダイであろう。

これらの魚種はいずれも内湾に棲息する種類とみることができる。当時西方の水田部分に広がっていた内湾域において、捕獲されたものであろう。別稿に記されているように、貝類は圧倒的にハイガイ・マガキが多い。これは内湾の泥質底・転石や岩礁に棲息する貝であるから、魚類との関係にはまったく矛盾はない。

### 3. 竹の下貝塚出土の魚骨

検出された魚骨の種名は、次の4種である。他に不明1種がある。

1. サメ類                    *Lamnida* sp.
2. エイ類                    *Rajida* sp.
3. タイ科クロダイ *Mylio macrocephalus* Basilewsky
4. コチ科コチ            *Platycephalus indicus* Linné

送付時のラベルによれば、1は「水路断面」より、2～4は「水路排土」より検出されている。

これらの数量などは、次のとおりである。

サメ類は、小型の脊椎骨が2点検出されている。

エイ類は、脊椎骨が2点検出されている（写真2-1・2）。それぞれ別種の可能性がある。

クロダイは、右前顎骨が1点検出されている（同3）。なおタイ類の小型の脊椎骨が2点検出されている（同4・5）。クロダイの可能性が強い。

コチは、小型の脊椎骨が1点検出されている（同6）。

他に種不明の脊椎骨が1点検出されている（同7）。

以上に記したように、検出された魚骨の数量はきわめて少ない。しかしそれらの魚種はいずれも内湾に棲息する種類とみることができる。当時西方の水田部分に広がっていた内湾域において、捕獲されたものであろう。

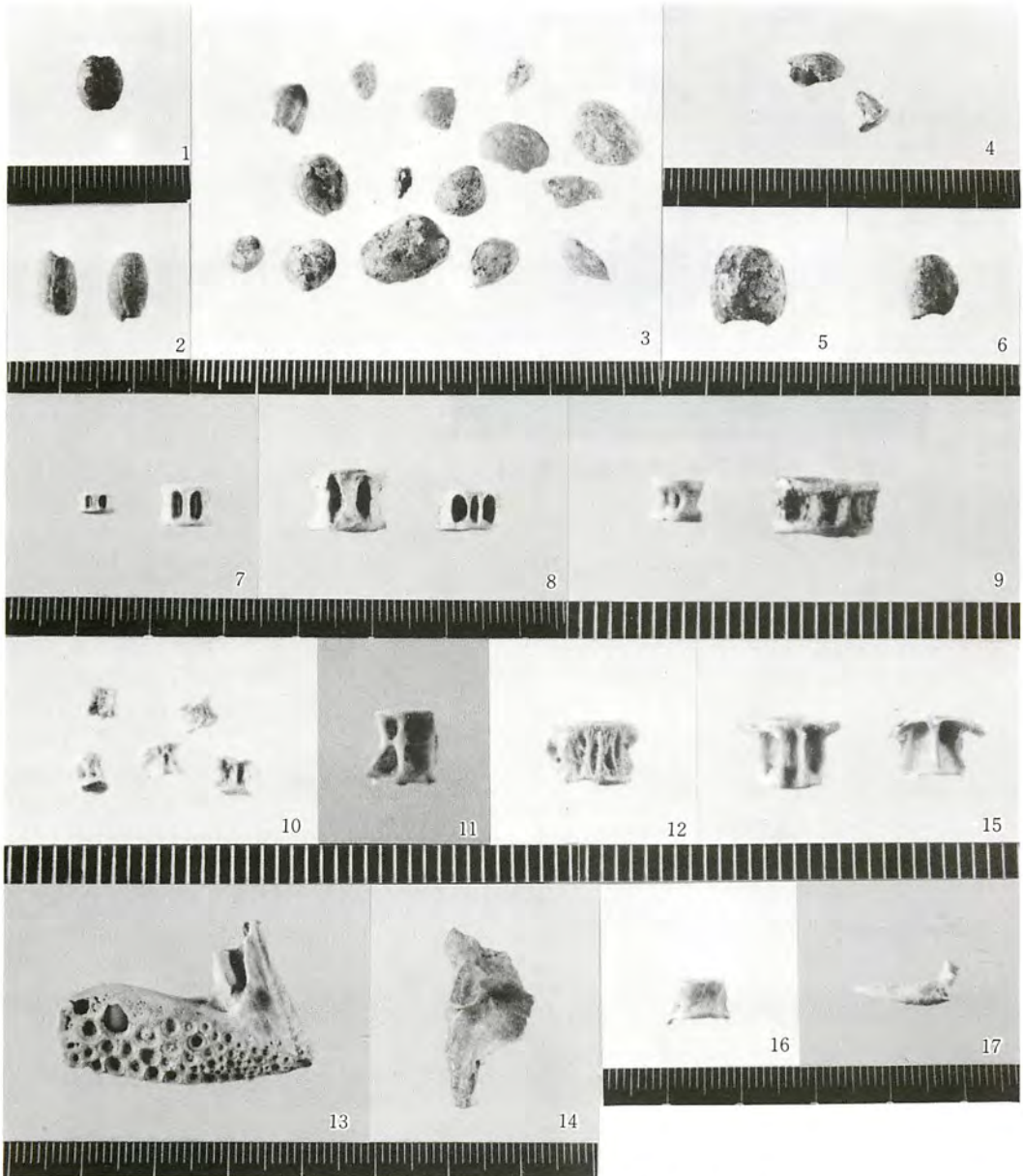


写真1 セツ江カキワラ貝塚出土の種子類・魚骨 (スケールの単位はmm)

1・2: イチイガシ 3~6: コナラ属 7・8: サメ類 9: エイ類 10: マイワシ脊椎骨 11: ウナギ脊椎骨 12: スズキ脊椎骨 13: クロダイ前上顎骨I 14: タイ類主鰓蓋骨 15: 同脊椎骨 16: カサゴ脊椎骨 17: カニ類爪

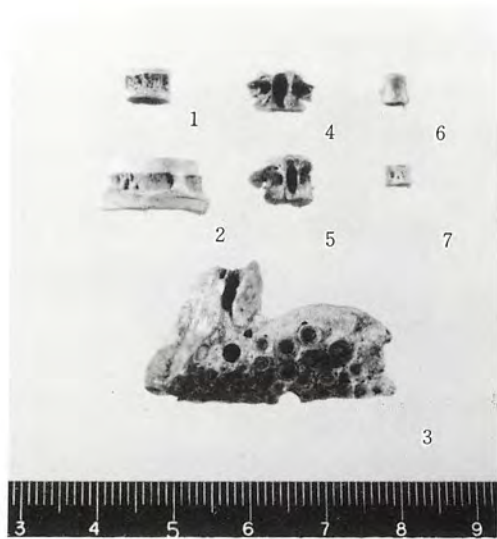


写真2 竹の下貝塚出土の魚骨(実大)

# 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚出土の動物骨

西中川 駿

## 1. 七ツ江カキワラ貝塚出土のウシ・ウマの骨

### (1)はじめに

七ツ江カキワラ貝塚は、熊本県下益城郡小川町大字北部田字七ツ江・竹の下にあり、県営ほ場整備事業のために、昭和58年10月～11月に熊本県文化課が発掘を行い、古代から中世と考えられるウシ・ウマの骨を出土した遺跡である。

わが国の縄文から古墳時代のウシの骨を出土した遺跡は、直良<sup>4,5)</sup>や芝田<sup>8)</sup>によると、全国33ヵ所があげられ、また、九州では仙波<sup>9)</sup>が長崎県原ノ辻や直良<sup>4,5)</sup>が長崎県大門、寄神、大浜、岐宿貝塚から、また、林田<sup>2)</sup>が志多留貝塚からの出土を報告している。熊本県下では、5世紀の宇土城三ノ丸跡<sup>6)</sup>から出土している。

一方、ウマの出土は、芝田<sup>8)</sup>によると全国75ヵ所<sup>8)</sup>があげられ、熊本県下でも轟<sup>8)</sup>、西平貝塚<sup>8)</sup>や塚原古墳群<sup>11)</sup>、上ノ原遺跡<sup>7)</sup>、宇土城三ノ丸跡<sup>6)</sup>などから報告されている。

今回、熊本県文化課から依頼された出土骨は、発掘後当教室に持ち込まれたものである。出土骨は肉眼的ならびに計測学的に調査し、他の遺跡のものや在来牛、トカラ馬の骨などと比較検討した。

### (2) 出土骨量

七ツ江カキワラ貝塚から出土した動物骨は、総重量10364.8gで、そのうちウシが9782.8gで、全体の94%を占め、ウマは582gと少ない。ウシのものであるが、骨の種類を同定出来ない細骨片が1237.0gあり、鑑定率は89%である。出土骨は骨格別にみると、ウシでは胴骨1734.2g、前肢骨3620.1g、後肢骨3191.5gであり、ウマは後肢骨のみで582gである。また、ウシの骨片は千数百点であるが、復元すると188個の骨であり、その骨格別出土骨数は表1に示した。

### (3) 出土骨の概要

(1)ウシ (*Bos taurus* Linnaeus) 図版1～26参照

ウシの出土骨は、188個で、肩甲骨や脛骨の数から約4体分と推定される。以下各骨格別に詳述する。

①胴骨：頸椎は、第一・七頸椎各2個、第二・三・四頸椎各1個計7個の出土である。胸椎

表1 ウシ、ウマの骨格別出土骨数

	頭蓋骨	胴骨					前肢骨						後肢骨						総出土骨数					
		頸椎	胸椎	腰椎	仙椎	尾椎	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手根骨	中指骨	種子骨	種骨	寛骨	大腿骨	脛骨	膝蓋骨		果根骨	足根骨	中足骨	趾骨	種子骨
ウシ	左					20	3	3	1	1	2	2	6	8	1	2	4	3	1	6	1	9		188
	右	7	20	6	2	8	4	2	3	2	6	3	12	1	5	3	3			2	2	1	1	
ウマ	左														1								3	
	右														1	1								
骨格別出土骨数		85 (44.5%)					59 (30.9%)						47 (24.6%)						191					

は20個の出土であるが、前中後位のもの各々みられ、第十二胸椎の椎体長は53.7mmである。腰椎は横突起や棘突起の欠如したものが多く、6個の出土である。尾椎の出土は42個みられ、前位のものが多い。以上脊椎骨は完全なものはほとんどないが、各椎骨の形状は、土井が浜牛などよく類似している。

②前肢骨：肩甲骨は左右同一個体2組と、左右別々個体3個計7個の出土で、4個体のものと推定される。ほとんどの肩甲骨は近位端は破損しているが(図版1参照)、遠位部の肩甲骨の径は小さいもの52.2mm、大きいもので58.8mmであり、これらは小さい方が雌で、大きい方が

表2 上腕骨の計測値 (mm)

	骨体最小		遠位最大		滑車最大			
	幅	径	幅	径	幅	径		
カキワラ貝塚	15	R	36.9	43.6	87.0	67.0	76.5	43.5
	30	R	32.7	43.7	83.2	71.5	76.0	42.5
	70	L	32.4	43.3	84.0	71.0	76.5	42.5
	74	R	36.6	43.9	82.0	72.5	73.7	42.5
	90	L	37.2	47.3	—	—	—	—
土井が浜	L		33.0	39.6	78.8	70.8	70.8	43.0
	R		37.0	47.1	86.0	74.2	76.0	45.8
口之島牛	雄		36.8	43.5	85.3	75.0	75.1	43.1
	雌		34.4	41.2	78.4	63.8	69.7	40.0
黒毛和牛	雄		51.0	58.8	117.0	88.3	98.6	64.1
	雌		45.0	51.8	93.7	78.2	84.4	53.4

雄のものと推定され、現存する口之島牛程度の大きさである。上腕骨は、左側3、右側2計5個の出土で、近位端はすべて破損し、また、遠位の滑車の一部も破損している。骨体最小幅をみると(表2参照)、32.4~37.2mmで、これは土井が浜牛や口之島牛のものと同程度の大きさである。橈骨は左1、右3計4個の出土で、15号標本のみ近位関節面を有している。橈骨の骨体中



表3 中手骨の実測値

(mm)

	最大長	近位端		骨体中央		遠位端		
		幅	径	幅	径	幅	径	
カキワラ 28L	186.8	54.4	—	30.7	23.0	58.7	33.3	
貝塚 30R	185.5	57.3	37.1	30.5	22.5	58.4	32.2	
土井が浜	L	54.5	34.0	28.5	21.5	54.0	30.6	
	R	193.8	59.8	35.7	35.0	23.2	63.2	33.8
宇土城	(153.8)	—	—	32.8	23.1	—	—	
口之島牛	雄	187.5	59.6	35.3	30.1	20.5	58.5	32.1
	雌	186.5	54.2	32.4	29.7	20.5	53.6	30.1
黒毛和牛	雄	215.0	81.5	51.3	45.2	28.5	71.4	39.8
	雌	209.6	64.8	40.5	34.3	24.5	62.0	35.4

( ) 保存長

表4 第三指基節骨の実測値

(mm)

	最大長	近位端		骨体中央		遠位端		
		幅	径	幅	径	幅	径	
カキワラ 5R	56.2	31.2	31.2	23.8	24.0	26.0	21.6	
貝塚 28L	57.3	32.2	32.2	24.5	23.8	26.3	21.7	
宇土城	61.2	32.2	35.2	28.0	27.2	30.8	24.0	
黒毛和牛	雄	66.7	41.1	42.8	34.8	30.8	35.6	26.5
	雌	64.0	34.7	36.1	27.8	27.0	29.0	22.4

表5 大腿骨の計測値

(mm)

	大腿骨頭		大腿骨頸		骨体中央		
	幅	径	幅	径	幅	径	
10L	60.5	46.1	40.6	40.4	34.7	38.3	
カキワラ 19L	—	—	38.9	37.4	35.7	38.0	
貝塚 20R	61.7	46.1	40.0	37.5	35.2	38.9	
25L	55.2	44.8	37.5	38.2	30.0	37.5	
土井が浜	L	55.2	41.8	34.6	33.6	29.5	32.4
	R	61.8	43.6	36.4	35.9	31.1	36.3
口之島牛	雄	61.5	47.0	43.0	42.7	36.0	41.1
	雌	53.3	42.7	40.5	40.2	33.3	37.5
黒毛和牛	雄	82.6	65.2	50.0	49.4	44.1	51.8
	雌	75.7	57.0	48.2	48.9	41.5	48.0

央幅は38.4~41.2mmで、これは口之島牛と同じ大きさである。尺骨は、橈骨との関節部付近のみ3個（左1、右2）がみられるが、計測不可能である。手根骨は橈側、中間・第四手根骨など8個がみられる。中手骨は左2、右3計5個で、No.30・28標本は最大長185.5、186.8mmで、これは口之島牛大の大きさである（表3参照）。指骨は、第三・四指列の基節、中節、末節骨など、ほぼ一体分など18個の指骨がみられ、基節骨は、現代和牛よりはるかに小さく、また、宇土城三ノ丸跡出土骨よりも小さい（表4参照）。

③後肢骨：寛骨は左1、右5骨片の出土であるが、右側の3骨片は同一個体のものである。大腿骨は、左2、右3計3個の出土で、完全なものはない。表5に示すように、骨体中央幅は土井が浜のものより大きい。No.10・20標本は同一個体とみなされ、転子や筋線がよく発達して大きいことから、雄のものと推定される。胫骨は左4、右3計7個の出土で、すべて近位端は欠如している。骨体中央幅は35.3~41.3mmであり、一括で取り上げられた標本（図12の左から2つ目）には数カ所に刀傷がみられる。膝蓋骨は、左側が3個みられる。足根骨は踵骨4、距骨1、中心・第四足根骨2など8個の出土である。中足骨は、左1、右2の計3個で、No.19標本はほぼ完全で、他は骨幹のみである。骨体中央幅は22.8~27.7mmであり土井が浜や口之島牛と同じ大きさである（表6参照）。趾骨は第三、四趾列の基節骨4、中節骨4、末節骨2の計10個の趾骨がみられ、ほぼ完全なものであり、その形状、大きさは土井が浜や口之島牛のものに類似している。

(2)ウマ (*Equus Cabalus Linnaeus*) 図版27・28参照

ウシの骨に混じて、左右寛骨および右大腿骨の3点が出土し、これらは同一個体のもと思われる。左側の寛骨は、腸骨翼や恥骨の一部、坐骨の欠如した標本で、大坐骨切痕、坐骨棘、寛骨臼などはほぼ完全である。右側も左側とほぼ同じ保存状態であるが、寛骨臼は破損してい

表6 中足骨の計測値

(mm)

	最大長	近位端		骨体中央		遠位端	
		幅	径	幅	径	幅	径
カキワラ 5 R	(184.3)	53.2	46.1	27.7	27.9	—	—
7 L	(157.3)	—	—	22.8	26.7	—	—
貝塚 18 R	(160.7)	—	—	23.9	26.6	—	—
19 L	208.8	52.5	46.0	27.7	27.8	57.6	31.6
土井が浜 L	204.6	44.7	39.8	20.9	24.0	48.7	29.0
R	220.5	53.0	48.2	27.2	27.3	47.7	33.8
口之島牛 雄	211.5	48.3	45.4	23.0	24.0	55.8	31.7
雌	210.5	45.7	40.6	24.1	26.0	51.2	29.3
黒毛和牛 雌	246.6	59.4	55.5	31.6	32.0	60.7	35.4

る。腸骨体の幅は34.7mmで、トカラ馬の雄(39.7mm)と雌(31.2mm)の中間の値であるが、腸骨体の形状から雌のものと推定される。大腿骨は、骨幹、第三転子を有する標本で、その骨体中央部の幅は35.7mm、径47.6mmでこれはトカラ馬の雌とほぼ同じ値で、形状もよく似ている。

#### (4) 考察

七ツ江カキワラ貝塚で、一ヵ所に埋葬されていた動物骨は、ウシ・ウマのもので、ウシは胴骨、四肢骨など約4体分とみられ、ウマは後肢骨のみで1体分と推定された。ウシでは頭蓋を除く全身骨格がみられたが、歯などは全くなく、頭蓋は別の所に埋葬されたことが考えられる。東京都の伊皿子貝塚では、頭蓋のみが発掘されているが、これは祭祀に利用されただろうといわれており、本貝塚の頭蓋も儀式的なものに用いられ、別の所に埋葬された可能性も考えられる。また、胴骨は、最も深い層にあったことから、まず、穴の中に胸椎や肋骨のついた胴骨を入れ、その上に四肢骨を入れて埋葬したことが想像される。また、四肢の骨は関節をはずすことなく、筋肉を除去した後、そのまま穴の中に放り込んだ形で残っている。胫骨などには明白な刀傷があることから、おそらく食用に供したものであろう。

ウシの骨は各層共に大型と小型のものがみられるが、両者共に骨端線は閉鎖している成獣であることから、大きい方が雄で、小さい方が雌である可能性がある。また、両者共に骨稜・筋線が明白で隆起しており、労役に使用していたことがうかがわれる。一方、出土骨の大きさは、現代黒毛和牛よりはるかに小さく、現生の見島牛や口之島牛<sup>10)</sup>に似ている。これらのウシ程度の大きさであったと仮定すれば、体高が雄で120cm、雌115cmのウシであったことが想像される。

熊本県下のウマの出土骨は前述したが、本貝塚から出土したウマの骨は、寛骨と大腿骨のみの1個体分で、これは現生のトカラ馬大の大きさで、しかも雌のものである。これまで塚原古墳群<sup>11)</sup>や上の原遺跡<sup>7)</sup>のものは、すべて頭蓋であり、トカラ馬より幾分大きめのものであった。本貝塚のものが、トカラ馬程度の大きさであったとすれば、体高約115cmのウマであったことが想像される。

以上、七ツ江カキワラ貝塚のウシ・ウマの出土骨について考察を加えたが、頭蓋のなかったことは、今後さらに検討する必要がある。

#### (5) まとめ

熊本県下益城郡小川町七ツ江カキワラ貝塚から出土した古代～中世の動物骨について調査した。

1、総重量10364.8gで、それらはウシ(9782.8g)とウマ(582g)のものである。

2、ウシでは、頭蓋を除く胴骨、四肢骨などがみられ、千数百点の骨片からなるが、それらは188個の骨であり、約4体分と推定される。骨の大きさは現生の口之島牛や見島牛とほぼ同じ大きさで、小型である。

3、ウマの骨は、寛骨・大腿骨の1個体分で、大腿骨の大きさから現生のトカラ馬と同じ大きさである。

4、ウシ・ウマの出土骨には、刀傷の跡がみられることから、食用に供された後、埋葬されたものと思われる。

## 2. セツ江カキワラ貝塚出土の動物骨

セツ江カキワラ貝塚から出土した古代～中世と考えられるウシ、ウマの出土骨について前述したが、ここでは同じ貝塚で、水洗処理によって検出された縄文後期の人工遺物と共伴した動物骨について述べる。

出土総重量は、81.5gで、細骨片のために動物種の不明なものが多数あったが、水路排土および獣骨東排土から、イノシシ、シカ、タヌキ、ネズミ、ウミガメおよび魚類の歯や骨が出土している。

イノシシは水路排土から、下顎第一切歯（右）、第二切歯（左）、脛骨（右）および腓骨（左）が、東排土から脛骨（左）、第五指末節骨（左）などが出土している。シカは水路排土から、下顎の第四切歯（右）、第三前臼歯（右）、第一後臼歯（右）が、東排土から上腕骨（右）、上顎第二臼歯（左）などが出土している。タヌキは水路排土から上顎第四前臼歯と東排土から第一頸椎の2点が出土している。ネズミは水路排土から上顎第一切歯（左）が、ウミガメは縁甲のみがみられる。

以上、セツ江カキワラ貝塚から出土した縄文時代後期に属する動物骨について述べたが、いずれも少数であり、詳細に報告できないが、縄文後期に貝塚を遺した人々が、イノシシやシカを中心に、狩猟を行っていたことは確かであろう。

## 3. 竹の下貝塚出土の動物骨

竹の下貝塚は、縄文後期、弥生後期および6世紀末の人工遺物の出土した遺跡で、出土した動物の骨は、わずか8点の細骨片であり、そのうち動物種を明らかに出来たものは4点である。それらは水路排土から出土したイノシシの下顎第四前臼歯（右）、ネズミの上顎第一切歯（右）および頸椎と、排水路断面より出土したウマ下顎第一後臼歯（右）である。

イノシシ、ネズミは縄文もしくは弥生時代のもものと推測されるが、ウマは6世紀末のものであろう。ウマの歯はほぼ完全で、その歯冠長24.9mm、歯冠幅14.4mm（いずれもエナメルヒダで計測）である。これらの計測値は、現生のトカラウマより少し大きく、熊本県上<sup>7)</sup>原や塚原古<sup>11)</sup>墳出土の歯とほぼ同じ大きさであり、また、咬面の形状も類似している。当時の人々により飼養されていたものであろう。

## 参 考 文 献

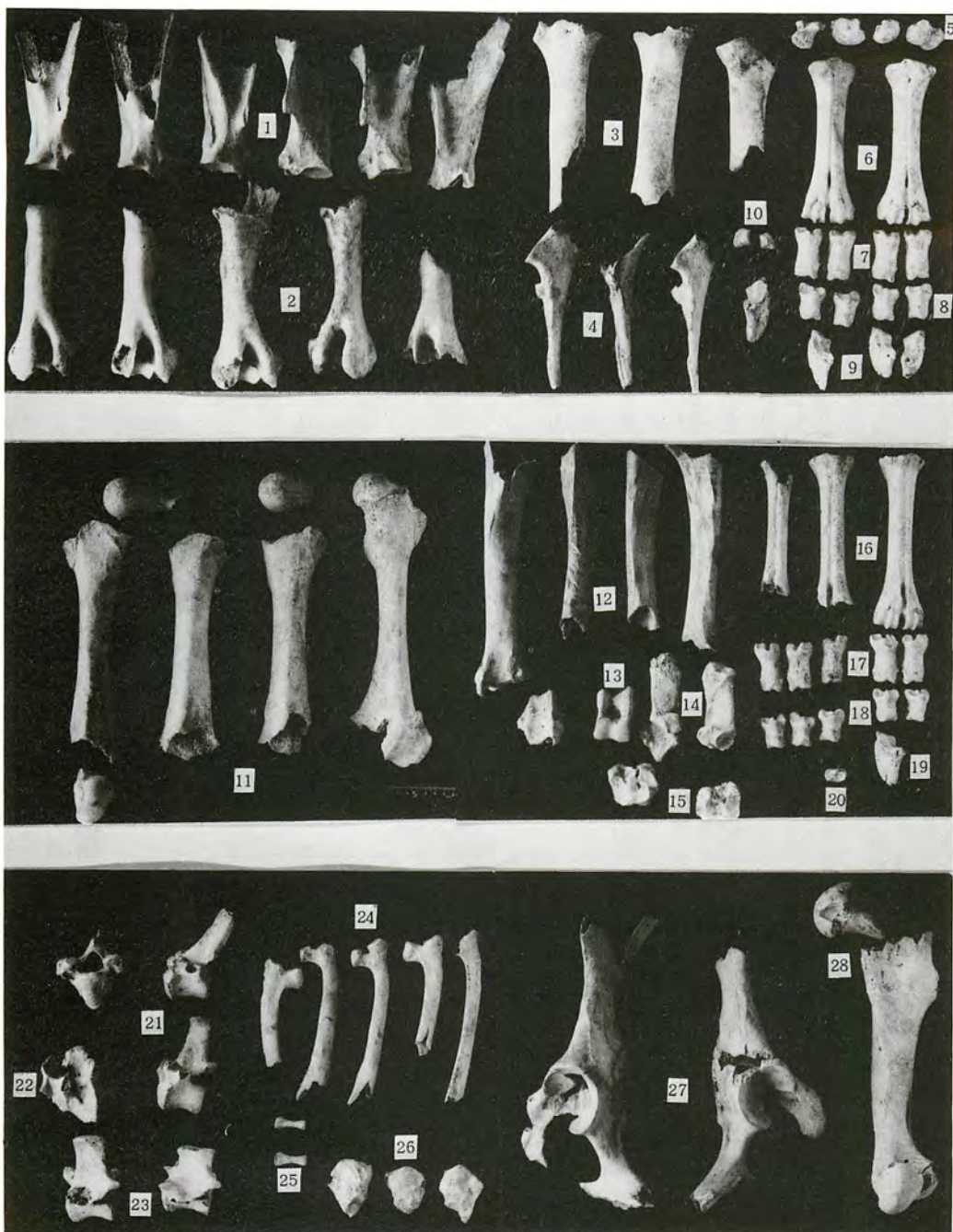
1. Driesch, A : A guide to the measurement of animal bone archaeological sites. p.1~137, Pub. Peabody Museum, Harvard Univ. USA (1976)
2. 林田重幸：志多留貝塚の動物骨について、坂田邦洋著「対馬の考古学」縄文文化研究会刊、p.249~265 (1976)
3. 林田重幸：日本在来馬の系統に関する研究、中央競馬会、東京 (1978)
4. 直良信夫：日本および東アジア発見の馬歯、馬骨、p.1~174、日本中央競馬会、東京 (1970)
5. 直良信夫：古代遺跡発掘の家畜遺体、p.1~248、校倉書房
6. 西中川駿：宇土城三ノ丸跡出土の動物骨について、宇土城三ノ丸跡、p.71~82 (1982)
7. 西中川駿：塚原古墳群（上の原支群）出土の馬歯について、上の原遺跡II、熊本県教育委員会、p.97~103 (1984)
8. 芝田清吾：日本古代家畜史の研究、p.1~338、学術出版会、東京、(1969)
9. 仙波輝彦：長崎県壱岐島中期および後期弥生式時代遺跡出土哺乳動物骨の研究、人類学研究第7巻1~2号、p.190~233 (1960)
10. 富田武他：口之島野生牛の遺伝学的研究、日本畜産学会第72回大会講演要旨、p.101 (1981)
11. 吉倉 真：塚原古墳群出土の馬歯、塚原、熊本県文化財調査報告第16集、p.323~337 (1975)

## 図版説明

1～26：ウシ

27. 28：ウマ

1. 肩甲骨（近位部破損、向って左から、右、右、右、左、左、左側の肩甲骨以下同じ） 2. 上腕骨（近位端破損、右、右、右、左、左側） 3. 橈骨（遠位端破損、右、右、左） 4. 尺骨（両骨端破損、右、左、右） 5. 手根骨（右） 6. 中手骨（左、右） 7. 基節骨（指、左、右） 8. 中節骨（指、左、右） 9. 末節骨（指、左、右） 10. 近位種子骨（左） 11. 大腿骨（右、左、左、左） 12. 脛骨（左、左 刀傷あり、右、左、右） 13. 距骨（右） 14. 脛骨（右、左） 15. 足根骨（右） 16. 中足骨（右、左、左） 17. 基節骨（趾右、右、左） 18. 中節骨（趾右、右、左） 19. 末節骨（趾、左） 20. 遠位種子骨（左） 21. 胸椎 22. 頸椎 23. 腰椎 24. 肋骨（右、左、左、左、左） 25. 尾椎 26. 膝蓋骨（左、左、左） 27. 寛骨（左、右） 28. 大腿骨（右）



図版 セツ江カキワラ貝塚出土動物骨





# 七ツ江カキワラ貝塚の貝類

菊池 泰二

熊本県下益城郡小川町北部田字七ツ江にある七ツ江カキワラ貝塚（縄文後期前半）から出土した貝類遺骸堆積物の組成について検討した。

対象としたのは、表1に示したように貝塚の頂部から採取した4箇の30×30×20cmのブロックサンプルで、排水路に近い北東端の採取地点のものをブロック1とし、以下南西方向に向って順にブロック2、3、4と名付けた。標本の大部分を占める二枚貝については、二枚の殻片が分離して出土するだけでなく、かなりの殻片が破損してしまうため、殻片数からただちに個体数を決定することは難しい。そこで右殻と左殻、合弁殻をそれぞれ独立に計数した。完全に残った殻だけでなく、二枚貝の場合は殻頂部と前縁または後縁の一部を含み他の殻片と重複して計数するおそれのないものは計数の対象とした。巻貝については、食用のため螺塔上部を打ち割られた貝が多いので、殻口、体層部を基準として計数した。ブロックサンプルのほかにも稀に出土する貝の種類相をも明らかにするため任意採集を行いその標本も検討した。

ブロックサンプル中の貝の種組成を表2に示した。一見してわかるのはマガキ*Crassostrea gigas*とハイガイ*Anadara granosa*の両種が全貝殻標本のほとんどすべてを占めていることである。全殻片を一箇とみなして合計した単純な値に基づく百分率ばかりでなく、左右いずれかが卓越する側の殻片数に双殻合弁の個体数を加えた控えめの推定値によっても、マガキとハイガイ両種が貝殻全体中に占める比率は、4ブロックとも90%を越えている。ブロック1、2、4ではマガキが73~84%と優位を占めるのに対し、ブロック3ではハイガイ75.8%、マガキ16.8%とハイガイの方が多い。巻貝のカワアイ*Cerithideopsisilla djadjariensis*がこのブロックだけに30

表1 七ツ江カキワラ貝塚貝類ブロックサンプルの採集記録

番号	サンプル容積	サンプル上面のレベル	貝層の区分	採集時の観察事項
1	30×30×20cm	3.19m	純貝層	カキとハイガイ
2	30×30×20	2.93	純貝層	カキを主体とし、ハイガイを混える。
3	30×30×20	3.18	混土貝層	土の量はごく少ない。ハイガイを主とし、カキが混じる。土器が多い。1号人骨の近距離
4	30×30×20	3.21	純貝層	カキが主体、やや破碎している。

表2 セツ江カキワラ貝塚ブロックサンプル中の貝類種構成

		ブロック1	ブロック2	ブロック3	ブロック4
二 枚 貝	マガキ 固着殻	489	647	96	452
	遊離殻	840	785	165	502
	ハイガイ 双殻	0	1	6	0
	右殻	284	87	602	79
	左殻	283	68	642	61
	オキシジミ 双殻				1
	右殻			1	1
	左殻	1			1
	アゲマキ 破片(殻頂部数)	6-7	1	6-7	6
	アサリ 左殻				1
貝	カリガネガイ 左殻				1
	ヤマトシジミ 左殻			1	
	ウネナシトマヤガイ 双殻	0	2	0	7
	右殻	2	2	2	4
左殻	9	3	1	7	
巻 貝	フトヘナタリ	0	2	0	3
	カワアイ	1	0	30	2
	カワニナ	7	0	0	0
	ゴマフダマガイ	0	0	0	1
	合計	1,923	1,598	1,552	1,129

箇まとまって出土することとも考え合わせるとやや性格を異にするようでもあるが、特に層位が大きく異なるわけではなく、この程度の偏りは継続的に堆積していく単一集団中でも生じるものとみるべきであろう。オキシジミ、アゲマキはハイガイと同じく泥質潮間帯の食用貝であるが数はきわめて少ない。砂地あるいは砂泥地にすむアサリ、ハマグリはさらに稀で、任意採集でごく少数が発見されたに過ぎない。ウネナシトマヤガイは潮間帯中部の転石地にマガキの殻のすきまに足糸で附着して生息する貝であり、食用とするにはあまりに小型で個体数も少ないことから、マガキを採取する際副次的に混獲された可能性が強い。エガイ科のカリガネガイ、ミミエガイ、ヒメエガイなども恐らく同様に混獲されたものであろう。

表3 セツ江カキワラ貝塚任意採集の貝類標本

マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
ハイガイ	<i>Anadara granosa</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
ナミマガシワ	<i>Anomia chinensis</i>
ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium (Neotrapezium) liratum</i>
ヒメエガイ	<i>Nipponarca bistrigata</i>
ミミエガイ	<i>Arcopsis symmetrica</i>
ツクシマイマイ	<i>Euhadra herklotsi</i>
ウスカワマイマイ	<i>Acusta decusta sieboldii</i>
シーボルトコギセル	<i>Phaedusa sieboldiana</i>

巻貝類は全体的にみて僅少であるが、泥干潟にすむカワアイ、河口域にすむフトヘナタリ *Cerithidea rhizophorum*、淡水産のカワニナ *Semisulcospira libertina* と塔形のものがほとんどで、いずれも人間の食用のため殻頂部を打ち欠かれた状態のものがみられた。ゴマフダマガイは現在もハイガイのすむ泥干潟に発見される中型のタマガイであるが1個体だけ採集された。任意採集標本中にみられたツクシマイマイ、ウスワカマイマイ、シーボルトコギセルの3種は、九州平地に普通に産する陸貝であり、貝塚成立の原因となった上代人の食生活とは無関係に混入堆積したものと判断される。

# 圖 版



図版 1 南小野・北部田地区航空写真 1. セツ江カキワラ貝塚 2. 竹の下貝塚 3. 大坪貝塚  
(昭和54年12月9日撮影 高度1,236m 縮尺1:8,000)



図版 2 七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚遠景（南から）



七ツ江カキワラ貝塚遠影（南東から）



図版 3 竹の下貝塚・七ツ江カキワラ貝塚遠影（北西から）

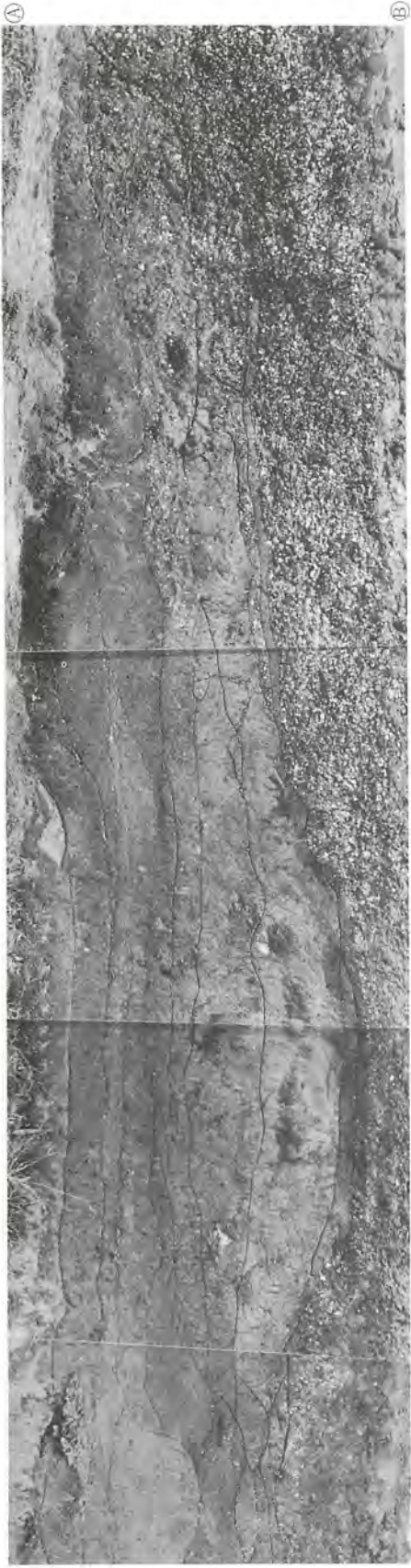


七ツ江カキワラ貝塚 貝層断面（西から）



図版 4 七ツ江カキワラ貝塚 貝層断面（東から）

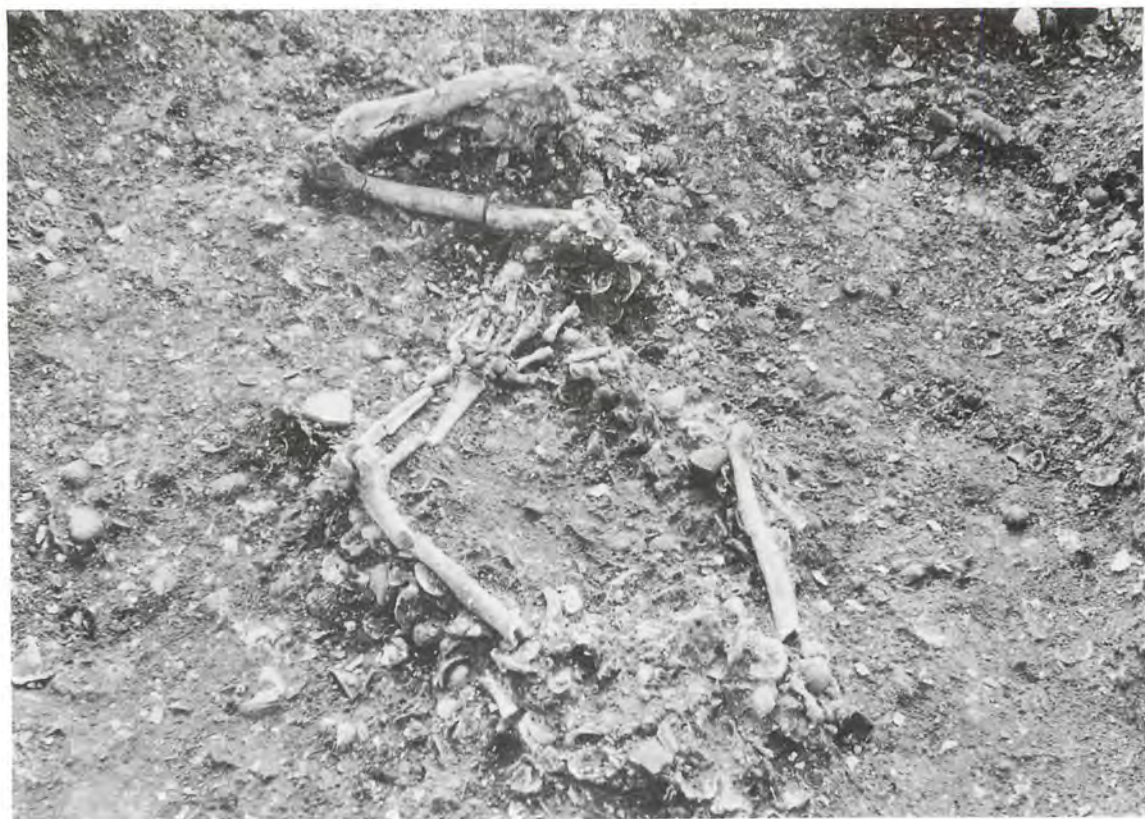




図版 5 七ツ江カキワラ貝塚 貝層断面



図版 6 露出した貝層



图版 7 埋葬人骨



埋葬人骨



图版 8 埋葬人骨周边出土土器 (第 7 图对照)



图版 9 埋葬獸骨



図版10 埋葬獣骨と出土土器（第9図対照）



S ≐ 1/2

図版11 セツ江カキワラ貝塚出土土器 (第10図対照)



図版12 七ツ江カキワラ貝塚出土土器（第11・12図対照）





図版13 セツ江カキワラ貝塚出土土器 (第13図対照)

S ≐  $\frac{1}{2}$



S ≐ 1/2



S ≐ 1/1

図版14 セツ江カキワラ貝塚出土土製品・土器・石器 (第12・18・14図対照)



図版15 七ツ江カキワラ貝塚出土石器 (第15・16図対照)



S ≐ 1/2

図版16 セツ江カキワラ貝塚出土石器 (第16図対照)



S ≐  $\frac{1}{2}$

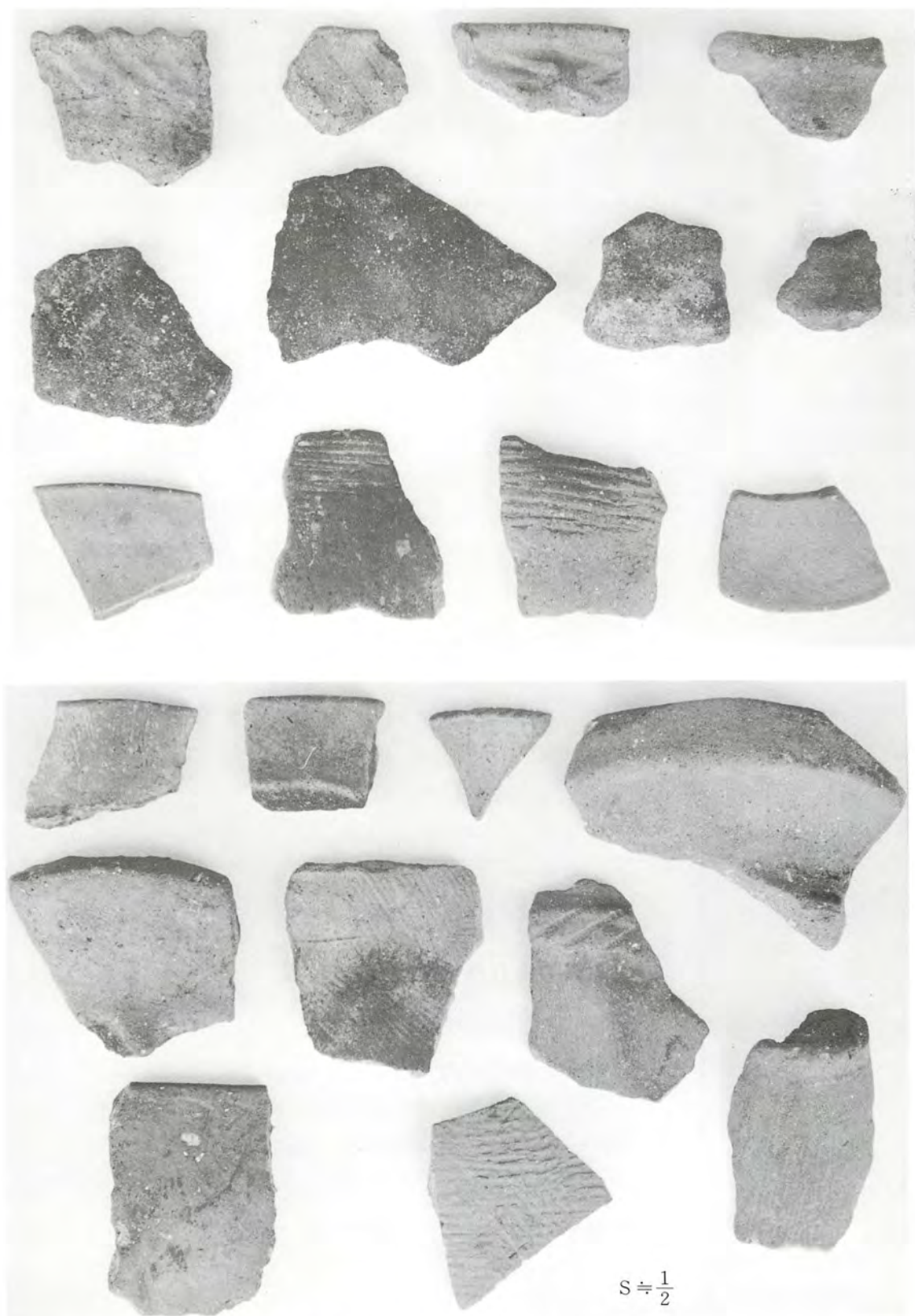


S = 不統一



S ≐  $\frac{1}{1}$

図版17 七ツ江カキワラ貝塚出土石製品・骨角器・貝製品 (第16・17図対照)



図版18 竹の下貝塚出土土器 (第21図対照)

熊本県文化財調査報告 第79集

七ッ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚

昭和61年3月31日

編集 熊本県教育委員会  
発行 〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 コロニー印刷  
〒862 熊本市二本木3丁目12番37号

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 79 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：七ツ江カキワラ貝塚 竹の下貝塚

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日